
鬼畜外道より愛をこめて

makinoko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼畜外道より愛をこめて

【Nコード】

N3076T

【作者名】

makinoko

【あらすじ】

僕たち仲良し4人組！PKギルド「ラヴァーズ」だよ！！

ある日みんなで敵対ギルドの奴らをぶっKILLに行ったら突然変な穴に吸い込まれて（ゲームとは全く関係ない）異世界に来ちゃった！！

・・・で？正味僕達いわゆる廃ゲーマー、リアルに未練は欠片もないよ？

こつちの世界はいろいろ犯りたい放題できるからまあいいか？
というわけで、狂科学者、忍者、乱射魔と常識人のこの僕で！！

この世界を愛し殺すぞー!!!

先ずはオープニングより愛をこめて（前書き）

えゝ初投稿ですガンバリマス。

あ、主人公最強もので残酷な描写有りですので

ジョジョに奇妙な大逆転の好きな方、魔法少女がマミられるのがダメな方は

BACK TO THE 過去で。

大丈夫だ、問題ない方は生暖かい目で見守って下さい。

先ずはオープニングより愛をこめて

突然だがあなたがとても混乱していたでしょう。

何が起きているのかもわからず、どうすればいいのかももちろんわからない。

そんな時、周りに自「死ねオラア!!」分より混乱し、

みつともな「死ぬのはテメエだあ!!」く騒いでる奴が、

それも二人も「ライダアアアアア・」ひいつさあつ・」居たら

きつときみは必ず落ち着けるといいうか

「だまれ!!」

と、さつきから争っている二人に上から金ダライー（2tとかかれた分銅入り）が直撃する

「ぐおお・・・」「ぬうう・・・」

「とりあえず二人とも落ち着きなさい!!ていうか混乱しているところでさらに事態がややこしくなるようなことをしない!!」瞬私まで現実逃避したじゃないですか!!」

「だってよお・・・」「しかし・・・」

「だって何かかしもない!!」「それ古いヨ」

「じゃらあつぶ!!」

・・・・・・

ここはどっかの城。で、玉座の間。そこに僕たち4人は円になるよ

うに向かい合っていた。(あぐらで)

「フム・・・、落ち着いたところで第1回ラヴァーズ臨時会議を始めます。

つと、その前にこれ脱いでいいですか？」

僕は自分の仮面を指さして言う。ちなみに僕の恰好はトレンチコートにハンチング帽をかぶってる。色は帽子の上から地面まで真っ二つになるように白と黒に分かれてる。

ちなみに僕が指差した仮面はもちろん白と黒のクマの仮面。ただ某ゲームの悪役と違うのは、仮面の黒いほうは普通で、白いほうが邪悪に嗤っているところだ。ちなみに髪だけは黒だ。

「ダメだヨ」「ノリ悪いで」「有り得ねっつの」
即却下される。そういう4人も仮面を着けていた。

「ていうかコレ発案者キミだヨ？みんなの反対押し切って、いざ着けたら恥ずかしくなるってどれだけへたれなのサ」
真っ先に却下した、この4人のなかでは比較的普通の、変な男が言う。

この男、一言でいうなら白だ。白衣だ。僕にケンカ売ってるレベルで白だ。

こいつは寺田凍(こおる)。キャラ名Dr・フロスト、またの名をマッドサイエンティスト
激怒博士。

ジョブはもちろんエンジニアの最上級職「狂科学者」。
仮面は一センチから五センチくらいの歯車がいくつも噛み合って、巧妙に目以外のところを隠している。

「だいたい俺のコレは取られへんやん？せやからみんな合わせてく
れて嬉しかつてんで？」

この関西弁の情に訴えてくるやつは竹内有（たけち ゆう）。

キャラ名真庭黒蟻、またの名を「過剰の黒蟻」。ジョブは無論忍者
の最上級職「頭領」。

好きな人なら説明しなくてもわかるだろうが、恰好は顔の見える忍
び装束に鎖を体中に巻いている。

全体的に見るとどこことなくアリに見える。

仮面は顔の上半分を覆う、アリの、どちらかといえばお面みたいな
感じのものだ。

ちなみにさっき喧嘩してたライダーキックの方。

「ぎやははは！へたれへたれー！！」

この腹の立つ侍みたいな恰好をしたおんなは、僕の幼馴染である。

名前は鴉羽瑠璃架（からすば るりか）。キャラ名ルリ。ジョブは
やつぱり侍・・・ではない。

このなりでガンナーの最上級職「乱射魔」だ。この格好にだまされ
た奴を何人も蜂の巣にしてきたので、

ついたあだ名は「撃鉄侍」・・・刀、立派な大小下げてんのに・・・。

ちなみに仮面は白い陶器のようにつややかで、三日月ににやりと笑
った口に目じりの下がった右目、

左目は赤いターゲットサイトになっている。

やれやれ、実に特徴的な変態どもだ。恰好だけならまだしも性癖ま
で変態だから始末に負えない。

僕みたいな常識人はこういう奴らに振り回されるしかないのかなあ・・・。

「おーけーおーけー、もうこの仮面のことは言いや。とりあえずこ

れからどうしよう?。」

すると、さっきまで元気だった三人が急に難しい顔になる。
・・・いや難しいというよりバツが悪い?といった感じだ。
たまにこいつらはこんな顔をする。一体どうしたんだ?

「ンー、とりあえず、サ」

「うん、とりあえず、や」

「そう、とりあえず、だ」

そして三人は同時に

「」「その娘どうにかしろ(や)(口)」「」「」

玉座に磔にされている少女を指さした。

この一撃に愛をこめて

とある五人の天才たちがいた。どのくらい天才かというとインテル入ってるレベル。

そんな彼らは叡智を結集し、世界最高の性能を誇る超々スーパーコンピュータ、

その名も「バタフライズ・ドリーム」を作り上げた。

それは世界すらも再現できる性能を持っていた。

彼らはそれを使い、超々巨大MMORPGを作り上げた。

それが「ワールド・オブ・ロード」だった。

公式サイトには

「これはいわゆる天界、魔界、人間界の三界間が舞台のゲームだ。なおこのゲームにはHPなんていうぬるいシステムはございません。攻撃当たるととても痛いです。気絶したら死んだってことになるかなー。あ、あとジョブとか種族とかスゲエたくさんあるから楽しんでな。ま、細かいルールは実際にプレイした奴がwikiとかにupしてくれww。そうそうこのゲームはリアルの顔を100パー再現すつから、ゲームだからってイケメンにはなれねえぜ（笑）まあそういう感じだ、楽しんでくれたら幸いだ。」

という五人のメッセージ動画だけだった。

そしてこの動画に惹かれた奴がやりだしてたちまち大ヒット。

このゲームの特徴はいわゆる何でもアリな自由度だ。

転生で種族変更ー（魔族魔物天使人間亜人機械人など多種多様）、
多種多様なジョブ（とりあえずあらゆる職業）、スキルはメインー
つ、サブ四つ、サポートが五つの計10種類まで覚えれる（やりよ
うによっては剣技使える僧侶ができる。）、Lv999、もちろん
PKも。

強い必殺では刀で本当に山を真つ二つにできる。（だいたい三日く
らいで直る）

あと装備やコスチュームの外見、というかほぼ全てのアイテムが自
分でデザインできる！！

おかげでここは結構コスプレしてプレイしてる人が多い。

極めつけはシステムに意図的に残してある穴、これを使えばチート
無しでチートのようなことができるのだ！！（例えば破壊不能オブ
ジェは移動はできる。のでそれを盾にする、など）

しかしこれは気付いた人がいても一人で独占するのであまり表に出
てこない。

これには「ホール・テクノロジー」という俗称がついている。

.....

ここはどっかの城。で、玉座の間。の、玉座前の広いとこの床で僕たち4人は円になるように向かい合っていた。(やはりあぐらで)だが前回と違うのは白黒男以外の三人が玉座の方を指さしているところだ。

僕は玉座の方を振り返る。

玉座には、少女が座っていた。

腰まで流れる黄金の髪、艶やかな肌、少しだけふくらんだ胸。十人いたら十三人は彼女をふつくしいと称賛するだろう。

その少女は目隠しをし、可愛らしい小さな舌をチロリと出して小さく震えている。時折ピクツ、ピクツと痙攣しているようだ。

これだけ聞けばとても淫靡だが、実際は違う。

舌を伸ばしているのは単純に黒い針に舌を貫かれ引っ込めることができるだけだ。

体が小さく震えてる？手を、腕を、肩を、腹を、太ももを、膝を、足を何本ものダガーに貫かれ、玉座に縫い付けられているのだから当然だ。

痙攣？ダガー一本一本が強弱つけて電流を流しているのだ。

ふん？あれがどうしたのだろう？

「ああ、彼女はもうしばらくあのままです。」

「なーんデー？」

本当に何を言ってるんだこいつらは？前から無いと思っていたがまさかここまで常識が無いとは……。

「何でって……愛でるために決まってるでしょう？常識的に考えて。」

「ああ……でたよこいつの『常識』。」

「やれやれ、運が無かったんやなこの子。」

「カワイソーだねー。」

んん？本当に何を言ってるんだ？僕はこんなにこの子を可愛がってるのに……ああ！そうか！

「ああ！！蹴りを忘れていました！！」

僕は一足飛びで彼女の前に立つと、そのまま踵を叩き込むように彼女の鳩尾を蹴りつけた。

「えうう！？」

思った通り可愛い声だ？

あんまり可愛いからこのまましばらく蹴り続けよう。

「えうつ！！ひゃえつ！！ひゃえひえひゅあひゃつ！！つつつつつつつ！！！！」

ガッ、ゴッ、ガッ、
ガッ、ゴガガガガガ
ガガガガガガガガ！！！！！！

舌に突き刺さった針のせいでうまく話せない彼女が可愛い。

それでも命乞いをしようとする彼女が愛おしい。

「~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~っ！よし、ぱー、ふえく、とー！（ガッ、ゴッ、ドゴォー！）」

ふう、あんまり彼女が可愛いからつい「達人の太鼓」をやってしまった？

反省反省（笑）。でも可愛いかったなあ？

少女は最後の一発で既に意識はない。

彼女の足元に徐々に水たまりが広がっていく。

この光景を見ていた人切忍者と狂学者と乱射魔は、あらためて自分たちのリーダーである彼の異常さを認識した。

本名 丹生 月光（うにゆう つきひ）、キャラ名ラヴ。ジョブ
トリックスター

その二つ名は「異常識人ラヴ」

「ワールド・オブ・ロード」最凶のPKプレイヤーである。

この一撃に愛をこめて（後書き）

やっと主人公の名前が出た（汗

次回は今回よりグロ低目です。（たぶん

ハイパーシヨンに愛をこめて

ここはどっかの城。で、玉座の間。の、玉座前の広いとこの床に3人は半円になるように向かい合っていた。(やはりあぐらで)

が、顔は玉座の方を向いていた。

玉座には、少女が座っていた。

少女はぐったりとしピクリとも動かない。

その少女の腹は赤黒く変色していた。

「うん、うん？ん、スキル<解析>・・・おつと死にかけてる。いけないいけない。

死んだらもうどうにもならないよ？希望を持って強く生きるんだ！うん、ちようどいいからここらで実験ついでに回復薬を使ってあげる！」

頭の中で「メニュー。」と念じる。と、目の前に薄青く光る半透明な、様々な項目が表示された。

そこには<アイテム>や<スキル>、<クリエイト><メッセージ><フレンド>などの項目があった。

ラヴはその項目の中の一つ、<ログアウト>に目をとめる。

(いまだにこの項目があるから、イマイチ実感がわかないんだよね・・・。)

苦笑しつつアイテムからハイポーションを選択する。

すると手に光が集まり弾けた。そこにはまさによくある回復ボトルといった感じの物が握られていた。

それを彼女の頭から振り掛ける。

びちゃびちゃと不快な音を出しながらハイポーションが体を伝っていく。

すると少女の赤黒かった腹がみるうちに治り、体中に刺さっていたナイフや舌の針が新たな肉によって押し出された。

瞬きするうちに元通りきれいな姿になる少女。心なしか顔色もいい。

「おお！！ほとんどゲームと同じですね！！・・・ん？よく見てなかったけどなんでナイフと針がぬけたんだ？貫通してたのに？・・・まあいつか。」

とりあえず忘れていたことはした。待たせていた振り返り、一応謝罪する。

「いや、この大変な時にすっかりしていてホントすいませんでした。」

ん？何かボーツとしているな。どうしたんだろう。

実際は完全に引いていた彼らだが、ハツと我に返るとあわてて返事を返す。

「いやいや気にせんでええで？ミスは誰にでもあるからなあアハハ・・。」

「そうそう大丈夫大丈夫、全然大丈夫だからハハハ・・。」

「そんなことよりこれからのことを相談しようヨ！！」

「（んん？なんかギクシャクしてるような・・？）・・・まあそうですね。」

ではまず現状を確認しましょう。」

ここでラヴは一度言葉を切った。なぜなら彼自身あまり認めたくないことを言わなければならないからだ。それは余りに非現実的で、突拍子もなく、かなり深刻な事態。

「・・・我々はMMORPGの中に来てしまった・・・ですね？」

そう、彼らは「ワールド・オブ・ロード」の世界に取り込まれていたのだ。

彼は思い出す。さっきまで自分たちが何をしていたのかを。

ハイパーションに愛をこめて（後書き）

今回時間がないのでちょい短め（汗）

あと諸事情により更新が遅れるかもしれません。

ひ、ひらにご容赦を

雑談に愛をこめて

ここは『ラヴァーズ』の拠点である超巨大要塞『モンスター』。

『モンスター』を一行で説明すると、基本「でかい、長い、四角い、黒い。」である。

上の部分には戦艦に積んであるような大砲がいくつもあり、機銃がハリネズミのように大量に配備されている。だが後ろの方(前?)には巨大な塔が立っている。そこには大きく「赤いハートが牙をむいて愛しい人の頭を丸かじりにしている」という、『ラヴァーズ』のシンボルマークが描かれている。

その塔の、一室。モダン調の部屋で4人は非常にゆったりとくつろいでいた。

ルリは銃の情報サーチ、Drフロストは新しい機械系モンスターの設計に忙しい。黒蟻は・・・天井からぶら下がって「いかにこの世界で真庭忍法を再現するか」というレポートを書いている。今度真庭忍軍(コスプレイヤーズ)の集まりで発表するらしい。

ラヴが紅茶を飲みながら(MMORPGで食事をする。これが当たり前になってもう二年もたつ。

だが何度経験しても不思議な感覚だ。)、ふと思い出したかのよう
に口を開いた。

「サイキッカーってジョブ知ってます？」

「知ってるヨ」「いや知らねーよ」「なんやそれ？」

「かなりマイナーなジョブですよ。なんでも人間種族専用で魔法が一切使えない、鎧が装備できないなどの制限がある代わりに超能力つぽいことができるそうです。」

「ぼいことってなんや？」

「ようはテレポートとか手を触れずに物を動かすとかテレパシーとかですよ。」

「でもかなり使い勝手が悪い、不人気職業だヨ？」

テレパシーはメニューのメッセージを使えばいい、テレポートはほんとんど飛べない、

観念動力に至っては物理をあげて殴った方がは言いとされているほどだヨ。しかも鎧が装備できないからダメージがそのまま痛みになっつてすぐ気絶しちゃウ。・・・ンデ、それがどうしたノ？」

「いえね、今から我々が襲撃を仕掛けるギルド『ホワイトナイツ』のリーダー、

『THE委員長』のサチさんがそのジョブを極めているそうです。」

法治ギルド『ホワイトナイツ』

それは主に初心者支援を行い、PK狩りやフィールドの治安維持（つまりは盗賊行為やトレインPK、横取りなどの防止）なども行う、とにかく正義を行うギルドである。ただし個人的なケンカには口出ししない、一種の自警団である。

早い話がPKギルド『ラヴァーズ』の対極の存在である。

「それがあ？いいカモだつてことか？」

「いえ、なんでもレポートで2キロの距離を詰め、テレパシーで相手を混乱させ、観念動力に至つてはそれだけで城ひとつ落としたとか。」

「はあ！？カスなジョブじゃなかったのかよ！！」

「いえ、彼女のレベルが900を超えたところから急激に上がつてきたそうです。」

「ああ、なるほど、隠し設定やな。」

隠し設定。それはホール・テクノロジーと対をなすシステム。すげえ弱かったり、育てにくいジョブや種族は、あとあとともおいしい思いができる（かも）というシステムである。

が、その道はあまりに険しく、そもそも本当にいい思いができるのか、特殊条件があるのではないか等、

とにかく謎だらけなので挑戦する人が少なく、挫折する人も多い。

「それがガセつて可能性ハ？」

「その落とされた城つてのが僕の知り合いがリーダーやつてる盗賊ギルド『ろびん・ふつど』なんだよ。」

「でも大丈夫だろ。そいつが『旅立ちの城』を出たのをわざわざ確認してからこうして攻め込んでんだろ？しかも俺たちの切り札、最終決戦兵器『モンスター口』まで出してよう。」

「まあそうなんですがね。やれやれ、これはまだ出さない予定だったのになあ……。」

これでPKギルドの看板は返上かあ……。これからは超PKギルドとしていろいろなしがらみに捕らわれるのかなあ……。」

「捕らぬタヌキのなんとやら、やで？先ず勝たなあかんやろ。ていうか負けたら俺ら

『なんかすごかったけどすぐ負けた残念な奴ら』としてネットで笑われんねんで？

嫌やで？『さすがまにわに噛ませ犬www』とか言われんの。」

「たしかに。先ず勝たねばず。」

『ワールド・オブ・ロード』のギルド戦は至ってシンプルだ。

勝利条件は『ギルドシンボル』を奪うこと。

これによってそれまで加算されていたギルドポイントが相手ギルド

に全て移動する。

そうすると、ギルドランクが一気にEランクまで下がり拠点を失うことになる。

大抵コレはギルドリーダーが持っているため倒して奪うしかない。
(ちなみにこれもクリエイト対象でタイプも武器だったり指環だったりと多種多様である。)

が、ある一定以上ギルドポイントが貯まり、Bランク以上になると拠点がもらえるので、ここに保管するギルドが多い。

ちなみにランクが上がることに大きな拠点がもらえ、Sランクにもなると超巨大なダンジョンか街がまるまるもらえる。

そのうえ、そのダンジョンすらコーディネート対象なので外観やトラップの配置、配置するモンスターまで決めれる。

階層ごとの門番(いわゆる中ボス)に至っては外観とキャラ設定、どんなセリフを言うかまで決めれる、まさにマニア殺しな使用になっている。

街は外観は変えられないが、その代り施設が充実している。

その上その施設のあげた利益の10%がギルドの資金になるのだ。

もちろんその道は果てしなく遠く、険しいが。

ちなみに『ラヴァーズ』の集めたポイントはほとんど大量のPKとギルド潰しで、残り

は特殊イベントの一番最初にクリアした者へのボーナスである。

それだけでSランクに到達し、

この超巨大要塞（全長400キロ全高140キロ幅200キロ）『モンスター』を手に

入れたのだ。それも、たった四人でだ。

もひとつちなみに『ホワイトナイツ』もSランクギルドだ。

が、彼らの拠点は飛んでいる。天空都市『旅立ちの城』という、特殊拠点だ。

商人や医療施設が初めから有り、初心者支援にもってこいの場所だ。

もちろん防衛設備も半端じゃない。有り得ない数のビーム機銃が空からくる敵を寄せ付けず、

唯一の出入り口はレポート・ゲートのみ。または団員の持つ指輪の特殊スキルだけが、

この空に浮く荘厳なる都市に行けるのだ。

「それにしても長い闘いでしたね。」

「五回も殺り合ったギルドって初めてじゃねえか？」

「大抵はケンカ売る（売られる）、四人で拠点襲撃、ハイ終わり、やからな。」

「だいたい襲撃かけられて最終防衛ラインまで追い詰められたこと自体初めてのことだったよネ」

「それをいうなら僕たちの襲撃が失敗したこと自体初めてだったよ。」

ちなみに『ホワイトナイツ』との戦績は

一回戦

遭遇戦

PKをしていたところを『ホワイトナイツ』に見つかり戦闘。即勝利。

二回戦前半

襲撃戦

天空都市『旅立ちの城』に戦闘機で突撃。が半端ない弾幕にあえなく撃墜される。敗北。

二回戦後半

襲撃戦

唯一の出入口のゲートポートを襲撃。見張りを皆殺しにする。が、向こうからゲートが閉じられていた。どうやら監視装置があったらしい。敗北。

三回戦

防衛戦

『ホワイトナイツ』本隊が襲撃をかけてくる。その数148人。見た顔（つまり潰した顔）がちらほらあるので、どうやら同盟を組んできたらしい。リーダー、サチの姿は見られず。最終防衛ラインま

で102人が到達。しかし、ここでアレを用い四人でこれを迎撃。アッサリと勝利。

四回戦

決戦

『ホワイトナイツ』の本拠地、天空都市『旅立ちの城』が『ラヴァーズ』本拠地『モンスター』の真上にくる。

・・・ラピュタビームを撃ち込まれた。四発も。

が、『モンスター』はホール・テクノロジーを用い、破壊不能オブジェと化しているので全くの無傷。お返しにこちらからミサイルとレーザー、機銃、大砲、無人戦闘機（モンスター）をぶちこむ。

しかし、やはりというかなんというか、ミサイル、戦闘機、弾丸はその弾幕に屈した。レーザーは届いた模様。与えたダメージは微々たるものだったが。

その後、天空都市は引き返していったが、両者共に有効打が無かったので引き分け。

そして今から始まる第五回戦。

超巨大要塞『モンスター』は今飛んでいる。

だがこの要塞は飛べるはずがないのだ。飛べる拠点はランクが上がって手に入る、もともと飛んでいる物ばかりだ。

まあ隠すことでもないし、隠せるとも思わないので種明かしすると、やっぱりこれもホール・テクノロジーの賜物だ。

今や陸の要塞から空の移動要塞と化した『モンスター』（怪物）
は天空都市を飲み込めんと、前進を続けていた。

雑談に愛をこめて（後書き）

一応ホール・テクノロジーはちゃんと説明できるようになっています。

といっても大したネタではないのですが（汗

さて明日からも更新できるか（時間的に）微妙です。

・・・ガンバります。

違和感に愛をこめて（前書き）

質問、誤字脱字がありましたらどしどし（優しく）教えて下さい！

違和感に愛をこめて

超高高度を巨大な黒い戦艦が不気味なほど静かに前進している。

遠くから見るとまるで超巨大なマッコウクジラといった感じだ。

が、クジラと違うところをあげるとすれば、背中にあたるところに無数の機銃、大砲が備えられ、さらに後ろのほうには巨大な塔が突き出ているところだ。

ここは超巨大空中要塞「モンストロ」。
の上に突き出てる塔。
の中のブリッジ。

そこは薄暗く、窓はない。ただ無数の計器類とモニターが淡い光を放っている。

機器やモニターの前には、よくアニメで見るような美人さんが座っている。

彼女たちはこの「モンストロ」を動かしているオペレーターの方たちだ。

ほかに整備士、コック、情報管理官、金庫番、果ては執事など細かいところに人が配置されている。

が、彼女らはプレイヤーではない。いわゆるNPCだ。

ダンジョン型拠点はダンジョン部、生活部のように二つに分かれている。

ダンジョンでは中ボスの、生活部では施設などにいるNPCの「クリエイト」が可能なのである。

反対に都市型拠点は城壁部分と支援施設に分かれている。店舗や、門番などの警備ユニット、あと「」の街にようこそ」という役の人などがそれにあたる。

彼女らはこの四人にクリエイトされたモンスターなのだ。

そしてある程度の知識があればNPCのプログラムを直接いじり、このように操縦などもさせられるようになるのだ。

そこで三人は各々戦闘準備を整えていた。

Dr・フロストは自分の乗る機体「テンパランス？」の武装をチェックしている。

ルリは自分の着ている黒い着物に次々と武器弾薬を仕舞い込み、アイテムボックスにもありったけの装備を入れている。

そんな中、黒蟻が、いつもとは違う奇妙な喋り方でラヴに話しかける。

「それで「今回はどんな「作戦！」「だ？」

まるでラジオやテレビの音声を切り貼りしたような、老若男女、切羽詰まったのから

のんびりした声まで混じる、ずいぶんと機械的な声だった。

だがこれこそが、彼の操るホール・テクノロジーを駆使した恐るべき忍法の一端なのだ。

「ああ、では作戦を説明しますね。」

そういつて唯一戦闘準備など必要ないかのようにのんびりと艦長席に座り、数本のダガーをくるくると回転させながらジャグリングして遊んでいたラヴは作戦を説明する。

「まず我々は、！つぐああああ！！」

たが突然視界が揺れたかと思うと、体中に激痛が走った。

「なっ！っああああ！！」

「ぐうううう！！」

「まずイ、い、しき、が……。」

フロストがガクリと膝をつき、黒蟻が天井からドサリと落ちる。

ラヴも今までに死んだことはあった。が、ここまでの激痛は初めてだ。いつもなら三秒もすれば自動で安全装置が作動し、気絶という

形で「DEAD」画面にいくはずだ。しかし五秒を過ぎても激痛は続く。まるでこれから本当に死んでしまうかのようだ。

「つき、．．ひ．．」

瑠璃架がこちらに手を伸ばそうとしたまま気絶する。

ラヴは、月光は薄れゆく意識の中、倒れ込むようにしてその手を握った。

．．．．．
．．．．．
．．．．．

妙に見覚えのある壁が目の前に見える。．．．ああ、黒蟻がいつもぶら下がっている天井だ。話すときにいつも見上げていたのだ。

ふい、と上を見る。

と、そこには瑠璃架が寝ている。自分の手を握ったまま。やれやれ可愛い幼なじみだ。性格は少しアレなのが珠に傷だが。

それにしてもなぜ自分はこんなところで「思い出したあ！！」意識が一気に覚醒する。

「瑠璃架！瑠璃架！！起きなさい！！」

ぐらぐらと揺するが瑠璃架は起きない。ええい、仕方ない！

月光は瑠璃架の耳元で、

「瑠璃架、起きないとちゅーしますよ？」

「わひゃうー！！」

「起きましたか、ルリ。」「な、ななななにやにをおー！！」

動揺と羞恥で顔が真っ赤になっている。とても可愛い。

「どうかしましたか？」

「どうかしましたかって、えと、えと、な、なんでもないっ！！」

とぼけてみると怒ってそっぽを向かれた。怒って頬を膨らませる、その子供っぽい仕草がまた可愛い。
ん？

「ルリ？仮面は？」

「あん？」

「いえ、ですからあなたの仮面は？さっきまで着けてたじゃないですか？」

そう、今ルリはいつものターゲットサイトのついた仮面を外し、素顔をさらしていた。

肩まで流れる、漆黒の黒髪をオールバックにし、

シミひとつない雪のような白い肌はその黒髪と相まって、白と黒のコントラストになっている。

何より目を引く彼女のチャームポイントは光り輝くそのデコだ。

夏、スポーツ少女（というか格闘娘）である彼女の額に浮かぶ汗を

たまにべろりと舐め上げたくなる。

えっ？ いやいや何ですか変態って。普通舐めるでしょ？ 常識でしょ？

「い、いやちよつと気分転換に外してた！ハハハ今つけるぜ！！」

「いったいいつの間にはずし、別にいいだろ俺が仮面外しててもよ
う――！もう、気にすんなよバカー――！――！」。・・・（キー
ーン）わ、わかりました、気にしません。ん？あれ？」

「こんどはなんだ!？」

「いえ、ああここにあった……つと。いえね、私の仮面も外れていたですよ、なぜか。」

「そ、それも気にするな――――！！」

「わ、わかりましたから大声出さないでください。」

何だろう、妙にいつもより可愛く感じる。

「ふむ、痴話喧嘩はそれくらいにしてくれないかナ。」

「夫婦ゲンカは犬も食わんで？」

「夫婦ゲンカじゃない――――！！！！」

（パパパパパパパパパパパパパパパパパパ
パズドオーン!!!）

ルリが懷からマシンガンを取り出し、袖口からマシンガンを抜いてもう片方の袖からはバズーカをずるうりと引き抜いて三人（ラヴ、フロストがマシンガン、黒蟻はバズーカ）に向けて同時に発射する。

「くふふ、あはははは、うわー撃たれるーwww」
「ぬるいツツコミだな（ニヤニヤ）」

が、ラヴもフロストも回避すら行わず、立ったままだ。

しかしラヴの前に来た弾丸は次々に消えていく。
ラヴの前の空間が水面のようにユラユラと揺れ、弾丸を飲み込んで
いるのだ。

フロストの方はいつそ幻想的と呼べる光景が広がっていた。
弾丸が空中で止まっている。いや、凍っている。

数十発の弾丸がその軌跡ごと空気中の水分を凍らされ、止まっ
ているのだ。

さらに脅威なのはそれほどに空間が冷やされたというのに、だれも
寒さを感じていないのだ。

瞬間的な冷凍力とその精密性が、それを可能にしていた。

で、オチ。

「ちょ、まつ!? くつ、うおおおおお!!!」

ただ一人バズーカを向けられ、どうすればいいのか一瞬パニックる黒
蟻。

躲せばブリッジの中で爆発（内部はさすがに破壊不能オブジェではない）、

切り落とせばこの場で爆発（つまり、やはりここブリッジ）、

追い詰められた彼は、

「忍法・雨矢取り（あまやどり）！！」

発射された秒速120メートルの弾頭を掴み取り、

「ああおうんつ。」

有り得ないほど口が開き、そのまま飲み込んだ。

「っ！ゲフツゴフゴフ」

どうやら腹の中で爆発したらしい。口から黒い煙を吐いている。だが黒蟻は全くの余裕だ。

が、しかしやはり切れてはいるようで、

その蟻の仮面をぐいと外し、眉間に皺を刻んだ素顔をずいとルリの前に出すと

開口一番、

「おいこらドゥいつつもりや、ああ！？なんで俺だけバズーカやねん！！」

あんま調子のつとつたらブチ殺すぞ！！」

とドスのきいた声を出す。

短く刈り込んだ茶髪に日焼けした肌。

鋭く尖った目は今殺意を込めてルリをにらんでいた。陳腐な表現だがこれだけで人が殺せそうだ。

「チツ」

だがルリはそれを意に介さず今度は4つのバズーカを同時に構え、引き「やめなさいっ！」頭を床に叩きつけられた。二人とも。

「つゝつ！」「何で俺まで・・・」

「まーったく、君たちは！仲良くできないんですか！だいたい、よく考えたらこんなことしてる場合ですか!？」

そうなのだ。先ほどの痛みは何だったのか分かっていないのだ。

「さっきのアレは何だったのでしょうか」

「バグじゃねえか？」

「バグ、んー、あり得なくはないですが・・・取り合えずGMコールといきますか。」

メニューを開き、「GM」コマンドを押す。

ゲームマスター
これでGMに繋がるはずだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・出ませんねえ。」

そつ、いつもならすぐつながるはずなのに繋がらないのだ。

「回線が混雑してんじゃね？俺らみたいに被害を受けた奴がたくさんいたりしてよ」

「世界最高峰の超々スパーパーコンピュータバタフライズ・ドリーム「B・D」が？

いえ、それどころか繋がる気配すらないというか・・・・まあいいでしょう。ならその間に別の可能性を検証しましょう。」

「フム、では敵の攻撃というのハ？」

「我々全員に気付かれずにですか？しかも侵入の痕跡も残さずに？」

「遠隔攻撃タイプのマジックアイテムなら？オリジンクラスなら不可能ではあるまい」

「まああり得なくはないですが・・・・」

オリジンクラスアイテム。

『この世界の神が作ったといわれる、絶大な効果を持つアイテム。俗に公式チートと呼ばれる代物だ。（ホール・テクノロジーはあまり表に出ない裏技なので裏公式チートと呼ばれている）』

と、というのが非公式設定のアイテムだ。

なぜ公式ではないのかというと、そもそも公式ホームページには制

作者達の動画しかなく、
ルールも世界観もさっぱりわからないのだ。

ゆえに好きな奴らが各々好き勝手な憶測をならべ、wikiに投稿し、

某掲示板ではひと月に一回は集中議論スレが立つほどだ。

「それにしてもやはり妙なのです。」
「妙？」

「ええ、先ほどく解析>したところ我々、どこかここにいるオペレーター達ですらHPが一ポイントほども減ってないのです。」

そういうとラヴは再びく解析>のスキルを使う。しかし、やはり4人とも、そしてこちらの様子を窺っているオペレーター達もHPバ―に減りは見えない。

しかしここで彼は何かとてつもない違和感を感じた。

何か強烈におかしなものを見たような・・・。

『このゲームは痛みで気絶したり、安全装置が作動するほど脳に負担がかかりすぎると「死んだ」ということになり、強制的に「DEAD画面」に移行するのだ。
もちろんその画面で待っていれば、だれか味方が蘇生してくれることもある。

が、たまに（というか極まれに）、痛みを感じない脳障害の方、拷問の訓練を受けた退役軍人などがプレイすることがある。

そんな彼らは痛みで気絶することはないので、それらの不公平を無くすため、そして無敵ゲーなどという面白くないゲームをそんな彼らに味わわせないため、HPバーがある。

これは数値で表されておらず（種族が非常に多岐にわたるため）、かすり傷で1ドット、片腕切り飛ばされてバーの五分之一（大抵の人はこれで十分気絶できる。）、頭や心臓破壊で即死となり全部減る、といった具合だ。

他にも毒や失血多量などでHPバーが減りつづけて死ぬこともある。

□

と、ここまではwikiにまとめてある非公式設定のシステムだ。なぜ非公式かとい（ry

「ふム、それは確かに変だね……。ホルテク（ホール・テクノロジー）の失敗作・・・と力？」

「なあ、もし仮に敵の攻撃やったらそろそろ第二波がくるんちゃう？」

「「「「.....」」」」

唐突な黒蟻のセリフに三人は固まった。

まずこいつが賢そうなを言ったことに驚き、
実際賢いこと言ってるのに驚愕し（いつもは中身がない）、
いままで自分たちのボケ倒した時間に呆然として、

まずラヴが平静を取り戻した。

「さ、索敵！最大領域で！！」

周りにいる7人のNPCオペレーターに指示を出す。

それに対しオペレーターは実際に理解して動くわけではない。
音声コマンドに反応してそれぞれ行動を開始する。

「了解！！」

「スイッチボイス展開！！」

「っ！十二時の方向に敵反応あり！！数40！！」

「モニター、出ます！」

薄暗い空間に突然「パキユッ」という電子音とともに四角いモニターが現れる。

ラヴはしかし、そのモニターではなく、オペレーター達を見ていた。
やはり何か非常に違和感を感じたのだ。

なにか、こう、妙に、彼女たち、生き生きしてないか？

だがそんなことを考えている場合ではない。

さっきの激痛が敵の攻撃だとしたら、その第二波のこいつらは少なくともレベル900越えた。

ついでに40という数にいやな予感を覚える。

いま『モンスター』は高高度を飛行中である。

そこに突撃できるのは飛行ユニットを持っているギルドだけで、さっきのような激痛を与えられるアイテムを持っている。さらに戦闘メンバーが40人もいるギルドといえば……

ただいま絶賛戦争中の『ホワイトナイツ』のペガサス隊ぐらいしか
思いつかないからである。

[illegible]

が、予想に反してモニターに映ったのはサルだ。

いや、コウモリの羽とねじれた角をはやした、空飛ぶサルだ。

手には大きなフォークを握っている。

「・・・レッサーデーモン？」

そう、そこには白銀の天馬ではなく40匹の醜悪な悪魔たちがいたのだった。

ラヴは眉間を揉むと、三人に振り返り、

「レッサーデーモン系で固めたギルドってありましたっけ？」

と尋ねた。

「聞いたことないナ」「俺もだ」「右に同じや」「ですよね・・・。」

このゲーム、「ワールド・オブ・ロード」はどんな種族にも（一部例外を除いて）なれるため確かにああいふキャラもたまに見かけるが、40人ものプレイヤーがレッサーデーモンだけのギルドを作れば、少しは話に聞くはずだ。

だがそんなギルドは聞いたことがない。

なら空にだけいるエンカウントエネミーザコデキだろうか？

・・・40匹も同時に？

「んー、まあごちゃごちゃ考えても仕方ないです。どうやら攻撃し

てきてるようですから、とつとと蹴散らしましょう。」

「その前にレベルを確認しよう。それでプレイヤーかただのザコかわかるはずだ」

「了解！敵を分析します！」

「アナライズ・アイ起動」

「・・・出ました！中級レッサーデーモン、数1、レベル140、下級レッサーデーモン、数39、平均レベル83です。」

「・・・いよいよもってな〜にか変だ。

フロストも首をひねってる。ん〜喉まで出かかってるんだが・・・。

「・・・ま、いいか。とりあえず、その中級がプレイヤー、残りは大方召喚獣の類でしょう。

では、迎撃してください。フロスト、ルリ、黒蟻、仮面を着けなさい。

『ホワイトナイツ』戦の前にこの艦の試験運用です。

こいつを確保してギルドの本拠地を吐かせてそこを潰します。」

「あゝ、その意見には大賛成なんだがよぉ・・・俺の見間違いかしんねえんだけどさあ、ずいぶん低いとこ飛んでねえ？」

「俺もそう見えるわ・・・。つか2時の方向にそいつらが出てきたっぽい城があんねんけど？」

「そんなバカなことがあるわけな・・・あ・・・い・・・で・・・。」

あつたのだ、そんなバカな光景が。

レッサーデーモンたちの奥に小さく映る、
うつすらと霧がかかった山に囲まれた、「いかにも」な魔王城が。

その「THE・西洋の城」は黒く邪悪っぽいオーラに包まれていて、塔の先端には禍々しい悪魔の彫像が首を動かしこちらを睨んでいる。ガーゴイルだ。

ぐねぐねと蠢くイバラがそこかしこに巻きつき、締め切られた窓からのぞく光は緑だったり赤だったり。

そんな城の城壁では、ゴブリンやトロールが弓や弩を構え、フードを目深にかぶった魔道士たちが杖を振り回して指揮を執っている。

「うーん、一体いつの間にこんな低いところを飛んでいたのでしょう？」

「それよりあんな「いかにも」な城を構える、魔物系ギルドってあったか？」

「しらねーよ。それよりあそこじゃないか？さっきのアレ仕掛けてきたの。」

「なるほど、中途半端なホルテクーつこて（使って）俺らを潰して、

その隙突こ思とつたんやな。」

フムウ、たしかに筋は通っている。通っているが……。

「……まあ現状ここがどこかわかりませんし、とりあえず情報収集と試験運用、それと暇つぶしを同時に行いますかねえ？」

「やっぱそれが本音かよ……。」「ククク、まあ楽しもうや。」「新型のテストと行く力。」

三人がそれぞれ仮面をかぶる。それに合わせてラヴも邪悪に笑う白と黒のクマの仮面をかぶる。

「さあて、さっきのアレの犯人かどうかはわかりませんが、」

仮面の下が、かぶった仮面よりも邪悪に嗤う。

「まあとりあえず、愛を届けに行きましょう？。」

違和感に愛をこめて（後書き）

えゝそのですね、来週丸々テストなのです。

のでしばらく更新できませぬ。

待って、お願い見捨てないで!!

あ、あと今回の文章でおかしな点がいくつかあったと思います。

それは可能性としては二つ。

1、伏線

2、作者の国語力の無さ。

・・・1だったらいいのになあ・・・。

ワンサイドゲームに愛をこめて

低空を巨大な黒い戦艦が不気味なほど静かに、ゆっくりと前進している。

遠くから（かなり遙か遠くから）見るとまるで超巨大なマッコウクジラといった感じだ。

が、クジラと違うところをあげるとすれば、背中にあたるところに無数の機銃、大砲が備えられ、さらに後ろのほうには巨大な塔が突き出ているところだ。

ここは超巨大空中要塞『モンスター』。
の上に突き出てる塔。
の中のブリッジ。

そこは薄暗く、窓はない。ただ無数の計器類とモニターが淡い光を放っている。

機器やモニターの前には、よくアニメで見るような美人さんが座っている。

彼女たちはいま矢継ぎ早に『モンスター』各所に指示を出している。

「敵、こちらの射程内に入りました。」

「前面下部20ミリ魔導バルカン開放。」

「各銃座、迎撃を開始してください。」

「デケエ・・・」

彼の名はドルス。

このレッサーデーモン部隊の隊長である。突然現れたこの巨大な何かを調べるよう言われてきた。

（調べろつたつてよぉ・・・）

彼は目の前の物体を見上げて思う。あまりにも巨大で首が痛くなる。

（こんなまどろっこしいことしてねえで、魔王軍全軍で攻撃しちめえばいいのによぉ・・・ん？）

よくみると巨大なソレの底辺部分、真ん中ぐらい（端が見えないのでおそらくだ）入り口のようなものが見える。

・・・いや周りが黒かったからそう見えただけのようだ。そこには白い壁に黒い線でギザギザが書いてあるだけだ。

（しっかしデケエぜ。遠近感狂っちゃう。・・・（カシュウツ）ん！？）

「な、なんだ！？」

突然その白い部分の周りに黒い穴が次々に出現し、黒い半球体が突き出てきた。

「まさかアレだけで殲滅できるとはネ。」

「いやいやレベル100前後に300レベル銃座ぶつけたんやろ？
当然やろ。」

「だけどよお、まだ実弾しか撃つてねえんだぜ？せめて光弾くらい
までは耐えるかな〜と思ってたのに。」

『ワールド・オブ・ロード』にはあらゆる武器が存在する。という
か、生産系ジョブなら武器の形まで<クリエイト>できるので、作
ろうと思えば（限界はあれど）何でも作れるのだ。

そんな中、『銃火器』は少し特殊である。

実はこのゲーム、レベルをあげれば弾丸くらい切り落とせるのだ。

これは、装着型仮想空間体験装置によるセ（中略）であり、さらに
『五人の天才たち』が提唱したニューロン・ト（中略）のである。
これによって五感を遥かに底上げできるのだ。

このシステムにより動体視力の高いプレイヤーは飛び道具をほぼ無
効にできる。

が、もちろん対抗策はある。

それが光弾と魔弾だ。

光弾は簡単に言うくとビームだ。これは同じ光剣つまりライト・セイバーでないと弾けないし、
耐久値の低い剣なら溶けてしまう。

つぎに魔弾は使用者のMPを消費して撃ち出すものだ。これが最も高威力である。

基本ガンマン系ジョブはこれらの弾丸を使い分けて戦う。

「賭けは私の勝ちですね、ルリ。あとでステキな罰ゲームです？」

「うげえ……。」

「いつのまにそんなことヲ……。」

「しかし、ここまで弱いとやりたかった試験がほとんどできませんね。」

「仕方ない。機兵投下試験を終えたら我々が直接でて叩こウ。」

「だな。全武装の試し撃ちしたかったけど、それしたらこの城跡形もなくなっちまう。」

「ええ、そうでしょうか。……おや？わんさか出てきましたね。」

モニターに映る城から大量の影が黒い洪水となって押し寄せてくる。

「敵の拠点より新たな敵反応多数出現！！・・・600、700、・・・1000を超えています！！」

「敵の平均レベルと最高レベルは？」

「アナライズ・アイの解析によると敵平均レベルは300前後。最高レベルは480です。モニターに出します。」

オペレーターの一人が言うと、新たなモニターが出現する。

そこに映ったものを見て彼らは驚く。

「へえ、ブラックドラゴンですか。」

「めっずらしい。」

「レベル高い調教師ティマーが召喚士サモナーがおるんやろな。」

「ま、なにせよラッキーだね。これで武装のチェックができる。」

「ええ。では、航空戦力を出しましょう。ミサイルを300発ほど発射。その後、副砲を前下部に用意し機銃と合わせて迎撃。ついでにAI戦闘機50機ほどを出撃させてください。」

「了解！」

「ミサイル兵弾スタンバイ。・・・一斉発射。」

「三連魔導キャノン、開放！各員、射程距離に入り次第撃ってください！！」

☐こちら砲座。任務了解。砲撃を開始する。☐

[illegible]

『モンスター』の巨大な前方部分の下部には今、直径2メートルくらいの半球体の銃座が等間隔に並んでいる。

その銃座と銃座の間に今度は6メートルもの穴が開く。

そこからまたも黒光りする半球体が現れる。今度のは銃座よりも大きく、長い筒（電柱半分に切ったような）が三つ付いている。

この砲座のレベルは500。

またもオーバーキル。

と、銃座と砲座の間に今度は30センチほどの穴が次々に開いていく。

それぞれの間に縦に三つずつ。

そこから、

バシユバシユバシユバシユバシユバシユバシユバシユバシユ
バシユバシユバシユバシユバシユバシユバシユバシユバシユ
バシユバシユバシユバシユバシユバシユバシユバシユバシユ
バシユバシユバシユバシユバシユバシユバシユバシユバシユ
バシユバシユバシユバシユバシユバシユバシユバシユバシユ

次々にミサイルが飛び出していく!!

ミサイルには顔が書いてある。鋭い眼光に獰猛な笑顔。

その眼は前方の獲物を見据え、笑みを深くした。

それに続くように、今度は『モンスター』底面部で異変が起きていた。

ガコンツ、イイイイイイイイイイイインツ!! ブシュウツ!!

黒い、ただただ漆黒の装甲に覆われていた底が細長く開き、幾本ものカタパルトが出現していた。

ドシュウツ、ドシュウツ、ドシュウツ、ドシュウツ、ドシュウツ、

ドシュウツ、ドシュウツ、ドシュウツ、ドシュウツ、
ドシュウツ、ドシュウツ、

そこから次々に無人戦闘機が飛び出していく。

不気味な沈黙とともに編隊を組み飛行するそれらは、例えようのない威圧感を出していた。

[illegible]

その城の上空では、一人の女将軍が指揮を執っていた。

「伝令！！敵魔導戦艦より何か来ます！！」

「ガーゴイルどもを前に出せ!!」

彼女はこの空軍を指揮する将、六魔将が一人、『斬風』のエージェンツ。

艶やかな蝙蝠の翼と尖った尻尾。額にちよこんと生えた二本の角。腰には長剣を差し、紫紺の外套をはおる。

いわゆる『悪魔』である。

彼女の指揮する軍は、盾となるガーゴイル部隊が200、突撃兵レツサーデーモン1000、後衛の邪妖精部隊200、主力の竜騎兵が400と魔霊騎兵が500、そして切り札ブラックドラゴンが5。

つまりは全軍がここに出そろっている。

彼女の下、つまり地上では地面から1700ものスケルトン部隊が現れ、弓をつがえ、バリスタを用意し、魔法を唱えている。

城を守る『バラ』が危険を察知したのかツタを持ち上げくねらせている。

城壁の内側にゴーレムが配備される。

ここまでのことをしているのに彼女はこの未知なる敵に勝てる気がなかった。

なぜなら彼女の目の前、視界すべてを塞いでもまだ足りないほどの巨大というのもバカらしくなる戦艦がたたずんでいたからだ。

それでも彼女は指揮を執る。それが六魔将ある自分の責務だと信じて。

彼女の指揮のもとガーゴイル部隊200が前に出る。

3メートルの巨体、筋骨隆々の悪魔の石像。手には盾と鎚を持っている。

「ガーゴイル部隊、撃て!!」

魔法によって拡声された声が戦場いつぱいに響き渡る!!

同時にガーゴイルの目が赤く光り、

ビュイイイーーーーーッ!!!!ン!!!!

真紅の破壊光線が発射される。

その光は飛んでくるミサイルに当たり・・・、

そうなところで躲かくされた。

そう、ラヴは『ミサイル』といったが実は違う。ミサイルの形に＜クリエイト＞したモンスターなのだ。

ちなみに『砲台』も『銃座』も『無人戦闘機』も、すべて＜クリエイト＞されたモンスターだ。

＜ダンジョンクリエイトルール＞

・ダンジョン内にはモンスターの湧くポイント（以下湧きポイント）を一階層ごとに5つまで置けます。

なお、このとき湧きポイントは入り口から10メートル以上離し、湧きポイント同しは20メートル以上離さないといけません。

このルール、ダンジョン内と書かれている。

つまり、ダンジョン外ならばいくらでも置くことができるのだ！！

そこから出現モンスター設定で出てくるモンスターを設定し、今にいたる。

これは『ラヴァーズ』が誇る『ホール・テクノロジー』のひとつだ。

300発のミサイルはレーザーを躲きると次々にガーゴイルに接近、＜自爆＞していく。

物言わぬ石像たちは苦悶の表情を浮かべて粉々に砕けて、地に落ちる。

それでもまだ余るミサイルは、後ろに控えていた軍に着弾する。

「伝令！！ガーゴイル部隊全滅！！突撃部隊も120ほどやられましたー！！」

「伝令！！敵魔導戦艦より正体不明の敵多数出現！！突撃部隊より応援要請！！」

甘かった！！まさかこれほどとは・・・！！

「落ち着け！！長引けばこちらが不利だ！！全軍で一気に敵艦に取り付く！！後衛は高速化の大規模強化呪文をかける！！」

その号令とともに後衛が一斉に動き出す。

200もの邪妖精が魔力を集め、高速化の呪文を全軍にかける。

「後衛とブラックドラゴンはこの場で待機！城を任せた！！残りは私に続けえ！！！！」

言うなり先陣を切って飛び出す。それに続いていく軍勢。

だが彼女は分かっていた。

このまま、帰ってこれないんだろうな・・・、と。

.....

「いや、すごい気迫ですねえ？」

彼ら四人はモニター越しに突撃してくる彼女を見ていた。

「うれしそうだね」

「ええ、ここまで真剣に来てくれるプレイヤーは久しぶりですから、うふふ」

「でもよお、あれだけのNPCを動員できるってことはさあ、うちの迎撃装置とおんなじホルテク使ってんじゃない？」

「せやな、そのあたりも聞いてみたいわ。」

「あ、そうだ！」

「あ、ろくでもないこと思いついた顔だ。」「今度はなんや？」「嫌な予感ガ……」

「あそこで指揮を執ってた彼女、ひとつ招待してあげましょう！」

「あ？なんで？」

「もちろん会ってお話したいからです！人間やっぱりいついかなる時もコミュニケーションが大切です！」

会って話すことによりお互いの仲が深まったり、一生殺し合う運命だと理解できたりするのです！」

「せやけど、この混戦の中どうやって（あ、当たったぜ。いや、まだ生きてるヨ）迎えにいくんや？」

「んゝ、だ・れ・に・し・よ・う・か・な・て・ん・の・か・み・さ・ま・の・い・う・と・う・り！はい、黒蟻に決定！！」

「えゝ……あんなん？それ？」

「あります？」

「まあ退屈しとったから、体ほぐしにいいか。」

そついう黒蟻の雰囲気徐徐に忍びのソレへと変化する。

「いつてらっしや〜い!〜!」

こうして『ワールド・オブ・ロード』最凶PKギルド『ラヴァーズ』の一角、

『過剰の黒蟻』がブリッジから出て行った。

ワンサイドゲームに愛をこめて（後書き）

い、今起こったことをありのまま話すぜ・・・。

『テスト勉強をしていたら小説を投稿していた』。

眠くなるとか掃除がしたくなるとかそんなちやちなもんじゃ断じてねえ！

もっと恐ろしい勉強のへ（ry

・・・自重しよう。

人斬り忍者より愛をこめて

低空を巨大な黒い戦艦が不気味なほど静かに静止している。

遠くから（かなり遙か遠くから）見るとまるで超巨大なマツコウクジラといった感じだ。

が、クジラと違うところをあげるとすれば、背中あたるところに無数の機銃、大砲が備えられ、さらに後ろのほうには巨大な塔が突き出ているところだ。

これは超巨大空中要塞『モンストロ』。

いま『モンスター』の前では戦闘が起きていた。

[illegible]

「くっ、おおお！」

ガッギギイ、ズバアッ！！

向かってくる鉄の鳥を風の守護を帯びた剣で叩つ切り、彼女、エー
ジエン又は前に進む。

（何なんだこいつらは！新種の魔鳥か！？ッ！！）

また一羽こちらに向かってくる。大量の、おそらくは火炎系統の魔法を避けながら、自らの魔剣に魔力を込める。刀身が濃い緑の風に覆われる。

「ッハア！！」

その刀身ですれ違い様にソレを一刀のもとに両断する。

背後で鳥が爆発する。

「ハア、ハア、くっ」

雨のように降る攻撃と謎の魔物にもはや彼女の体力は限界だった。

が、それでもなお進もうとした時、

「・・・？」

対空砲火による光のカーテン。その隙間に
妙なものが見える。

隙間すらないほど砲台でギッシリな巨大な壁の前。

なにかいる。

それは人に見えた。

肩口からざっくりと切り落としたかのような、袖のない装束。

腕、足、胴に蛇のようにぐるぐると巻き付いている鎖。

両手両足には鋭利な爪のついた手甲に足甲。

顔の上半分を覆う黒く、艶やかで、強靱な顎がついている仮面。おそらく蟻をイメージしたものなのだろう。

そして足の踵あたりから青白い炎が下に向かって小さく、しかし勢いよく燃えていた。

と、観察していると、そいつは口を開いた。

「名乗（ズドーン！！）らうで、お（ズガガガガガガガッ！！）
……俺（キイイイイイイイン！！）……」

全く聞こえない……。

と思っていたらその男はとても小さな、星のような形のもの（たしか・・・手裏剣だったか？）を取り出し、両手に構え、

「・・・（チュゴーン！！）・・・忍法・・・」

そいつは何かを小さく呟くと、ここから見てもわかるくらいグ、グ、グ、と力を溜め、突然、

「ツッコミハリケン突撃破手裏剣！！」

体がブレるほどの速度で回転する。

グシャア、グシャシャア、ドグシャア！！！！ズドーン！！！！ドゴ
ー！！！！！！

目を疑った。

今まで火を噴いていた数えきれないほどの砲台が全て、破壊されている。

それも無残に変形し、原型を留めていない。

それよりもここまでの破壊を可能にしたのがあの小さな鉄片だというのが何より信じられない！！

周りを飛んでいた魔鳥は炎を体から吹き上げ、きりもみしながら落ちていき、地に着く前に爆散した。

後ろを振り返ると、遙か彼方でも同じように炎が線を引きいて落ちていく。

あれほど硬かった魔鳥、あれだけの速度で飛んでいた魔鳥、敵味方入り乱れて飛んでいた魔鳥。

それが全て糸を引いて落ちて行った。

だがなお異常なのは、

あれだけの攻撃で、一こちらの味方が一人も減っていなかったことだ（・・・・・・・・・・・・・・・・・・）。

「ふゝ、やっと静かになったの。やっぱり人が話すときは静かにせなあかん。」

「・・・貴様・・・何者だ？」

「ん？ああ、せやせや、名乗らせてもらつて。」

一拍置き、

「俺はW O R真庭忍軍十二頭領が一人にしてPKギルド『ラヴーズ』の一員、真庭黒蟻。ひとよんで、『過剰の黒蟻』や!!」

沈黙が場を支配した。

.....

（あかん、痛い。めっちゃ恥ずかしい。これなんべんやってもあかんわホンマ。でもこれやらな『名乗り』ポイント入らんしな・・・アイツも怒りよるし。はあ世知辛あ。）

『名乗りポイント』というのはプレイヤー戦で今のように見栄をきって名乗るとギルドに特殊ポイントがつくというものだ。ちなみにけっこう恥ずかしいのであまりやりたがる人はいないのだが、ラヴがこつというのが好きなのと、照れながらもやる仲間の姿が大好物なので、『ラヴァーズ』では強制である。

（た、たのむ！！ツツコミでもええから何か返してくれ！ていうかむしろツツコンでくれ！ボケ殺し（スルー）だけは勘弁や！！）

取り合えず我に帰ったエージェンヌ。

「私は魔王軍六魔将が一人エージェンヌ・ドルー！！『斬風』のエージェンヌだ！！なぜこちらを攻撃する！？」

これを聞いて黒蟻は頭をひねった。

（レベル999いつとらんのに『二つ名』やと？・・・俺も痛いけどにわか（・・・）も十分痛いな。）

Worの『二つ名』というのは自分で名乗ったり、人につけられるものではない。運営がレベル999に到達したプレイヤーに与えるボーナスの一つなのだ。

しかもこの『二つ名』、プレイヤーそれぞれにいちいち運営が考えているらしく、二つとして同じものはない。

某掲示板では運営ヒマなのか？と話題になったこともある。

（いや、それより『なぜ』やと？さっきのアレはこいつらとちゃうってことなんか？せやったら・・・）

「答える！！」

（敵さんノリノリやで。・・・ま、嫌いやないし、つきおつとか。）

「なぜ、やと？たまたまやけど？」

「なつ、なんだと！？」

「やゝからゝ、たまたま目についた、だから攻撃する。それだけや。他にはなんの意図も無いで？強いて言ったらお前らは運がなかっただけや。」

「たまたまだと！？目についたから襲っただと！？どうしてそんなことができる！！！」

おかしなことを言いよる。・・・こういうのがアイツが大好きやったなあ。ああもうめんどいなあ、めんどいなあ、もおどうでもええやろが！！！！

「ああ！！もおグダグダぬかすなや！！！！こちとらお前らを斬りとうて斬りとうてしゃあないんや！！！！」

とりあえずや、俺の変体刀、
「籠刀ろうとう重かさね」を抜いとこ。

腰に付けたポーチからずるうりと、さながら四次元ポケットのように抜身の刀を取り出す。

真っ直ぐな、ただ真っ直ぐな直刀に鑢は正方形。そして美しく、妖しく、うつすらと紅色の妖気が刀を包む。

「安心せえ。お前は後でリーダーが会う言うところから……。」

「なつ、貴様ツ!!!」

「腕の一本ぐらいで済むでえ!!!」

[illegible]

真庭忍軍とは、もともとある小説の中の敵役である。

諜報、索敵、暗殺、破壊工作とさまざまな忍びの仕事の中で、暗殺にのみ特化した恐るべき忍者達だ。

十二人の頭領をもち、それぞれが特殊な忍法を操る。

その強さは集団行動をする意味がないと言われるほど。

しかし、平和な時代が来て、暗殺者の需要がなくなり、真庭の里は滅亡の危機を迎える。

追い詰められた真庭忍軍は、四季崎という伝説の刀鍛冶の打った、一本で国が買える程の名刀を集め、売り飛ばして逃亡しようと企んだ。

だがその小説では、いわゆる咬ませ犬役で、最後には真庭忍軍は滅んでしまう。

そんな彼らにホレた物好きたちがいた!!!

彼らはW O Rの世界で暗殺ギルド『W O R真庭忍軍』を結成した。
その数ちようど十二人。もちろんみんなジョブは『頭領』。

だが彼らはそれだけでは満足しなかった。

いわゆる二次創作に手を出した。

とりあえず名前は原作とかぶらないようにした。

そして彼らは真庭忍軍が刀集めに勝利したという設定でいくことにした。

さしあたって必要なのは強力な刀。

と、そこにちようどイベント発生。

『とある刀鍛冶の遺産一本目』から『とある刀鍛冶の遺産十二本目』
まで同時に。

「……キターー!!!」 (十二頭領・談)

他の参加者囿にしたり踏み台にしたり不意打ちしたり騙し討ちしたり、とにかく卑怯卑劣な方法で文字通り奪い取ってきた。

という書き込みがあったとかなかったか・・・。

「おうら、刀籠流しとうろうし!!」

ガッ、
ギイイイイイイイ
ン!!!!!!!!

「ぐっ！？ぬっっっううう！！！？」

それを受け止める風の魔剣。

だがエージェンヌの剣はみるみるうちに切断され、中程から真つ二つになる。

「驚いたか？これが籠刀 重の特性、超振動刀や！！」

薄紅色に煌めく刀は確かに細かく振動し、微かにイイインと音がする。

「ならばこれはどうだ！」

エージェンヌは半ばから切断された魔剣を捨てると両腕を風の魔力で覆うと、

「ハアッ！！」

交差するように大きく振り下ろしカマイタチを放ってきた！！

緑に輝く刃が黒蟻めがけて殺到する。

が、

「無駄や！！」

黒蟻は防御すら行わずに突っ込む。

風の刃が唸りを上げて黒蟻に迫り、

粉々に散ってしまう。

「振動しとんのは刀だけちゃう!!俺もや!!」

籠刀 重は振動する。

振動し、振動し、振動し、振動し、振動し、振動し、
し、振動し、振動し、振動し、振動し、振動し、
振動し、振動し、振動する……！！

その超振動は体に伝わり全てを弾く鎧と化す！！

風の刃を一気に突破し、エーゲン又^{また}に斬りかずらつと並んだ光の矢が体中に突き刺さり爆発する。

「いくらなんでも光は弾けまい!!とどめだ!!」>シャイン・ライ
ン・レイン<!!!!」

光り輝く浄化の矢が一斉に粉塵のなかに飛び込み爆発する。

「ハハハハハハハハ！！欠片ひとつ残さず吹き飛んだか！！」

煙が晴れ、そこには何も残っていなかった。

エージェンヌは、魔王軍六魔将にふさわしい、凶暴な笑顔で振り返り、

「皆の者！！勝鬨をあげグブツ・・・？」

後ろに控える味方を振り返ろうとして、トンツ・・・と背中を何かに押される。

自分の腹を見ると刀がはえている。

「超振動。」

イイイイイイイイイイイイン！！！！

「！！！！ぐああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

「くぅなぐぅいぞぐがグツチャグチャくぐりぐりめっちゃくちや」

傷一つついてない黒蟻が何もない空間から染み出してきた――。

「くステルス」。けっこうドラマチックな演出やったやろ?」

もはや意識のないエージェンヌを刀で串刺しにしたまま黒蟻はにやりと笑った。

人斬り忍者より愛をこめて（後書き）

俺！！復活！！！！

ながらくお待たせしましたあ！！！！

疾風怒濤に愛をこめて

低空を巨大な黒い戦艦が不気味なほど静かに静止している。

遠くから（かなり遙か遠くから）見るとまるで超巨大なマッコウクジラといった感じだ。

が、クジラと違うところをあげるとすれば、背中にあたるところに無数の機銃、大砲が備えられ、さらに後ろのほうには巨大な塔が突き出ているところだ。

これは超巨大空中要塞『モンスター』。

その『モンスター』の前方下部。

そこでは一人の男が薄紅色に煌めく刀を肩に担いでいる。

肩口がざっくりと切り落とされた、袖の無い装束。

体中に巻いた鎖。

頭には蟻を模した仮面。

そして体中を濡らしている返り血。

つまりは黒蟻だ。

肩に担いだ刀には百舌鳥の早贄のように一人の女が串刺しのままぶら下がっている。

「ああ、」

黒蟻は血に濡れた手を頬に当てて、溜め息を一つつくと、

「ええなあ？」

顔を恍惚に歪めて一人ごちる。

「ええなあ、ええなあ、ええなあ、ええなあ、ええなあ、やつぱこのゲームは最っ高やなあ？この返り血、この匂い、この色、この血飛沫！！ああ！！ここまで出血グラフィックにこだわったゲームは他にないで！！」

エーゲンヌのはらわたをえぐったときの返り血で、ずぶ濡れとなつた黒蟻はご満悦だ。

「ああ、せやけどしまったなあ。殺してしもた。あゝんゝどないしよ。あ、せや、復活タイム過ぎるまでに生き返らせたらええんや。

クハ！俺かしこー！クハ、クハ、クハハハハハハハハハハア、あ？」

哄笑する黒蟻はしかし、ふいに影が差したのに気づく。

周りを見ると、すっかり取り囲まれている。上下左右すべて黒い甲冑に埋め尽くされている。

「將軍をはなせ！！」

漆黒の甲冑を付けた騎士達が、これまた漆黒の馬具を付けた馬に乗っていない。

馬に乗っているのではなく馬具に乗って宙に浮いている。よく見れば鎧や馬具から紫の（いかにも邪悪な）オーラが溢れている。

（『ファントム・ナイト』・・・か。361体も。）

黒蟻はうんざりした様子を隠そうともせず、

「やれやれ、血イ出そうにないやつは守備範囲外やねんけどなあ。」

そういうと、黒蟻は背中の中肩甲骨辺りからブースターユニットを展開し、足先からビームサーベルを伸ばす。手の甲からは2メートルはある大鎌の刃がシャキーンと生える。

肩には串刺しになったエージェンヌを担いだままだ。

黒蟻はまたもニヤリと笑うと、全身に力をこめ、

「ほな、一気にいくでえ！！」

「っ！来るぞ！！ぜ（ドジュウッ！！）・・・」

その瞬間、幾本もの極太光線が包囲網を焼き払った。

光の柱はそのまま地上にいたスケルトンの軍勢を薙ぎ払う。

いつの間にか破壊された砲台はすべて綺麗に無くなっており、元の平らな漆黒の壁に戻っている。

かわりに直径10メートル、長さ20メートルものTHE大砲が5門、鎮座していた。

イメージ的には釣鐘を縦に伸ばしてゴテゴテと飾ったような。

「サンキュー、フロスト。」

そう言うのと今しがた出したばかりの武器を次々にしまつ黒蟻。生き残った残党には手裏剣をぶち込む。

「いいサ、副砲の動作テストができた。」

頭の中に声が響く。＜メッセージ＞だ。

血の出ない相手だと基本やる気の出ない黒蟻はこれでフロストに応援を頼んだのだ。

「んじゃ、今から帰還するわ。」

「いまハッチを開ケル。」

モンストロの下部にある、口を模した入り口（白地に黒でギザギザの線が入っている。）が音を立てて開く。

そこから入り、少し行ったところのテレポート・ポートに入る。

この間エージェンヌはプラインと串刺しになったままだ。・・・かなりシユール。

ちなみにこれは『ラヴァーズ』メンバーしか動かせない。

一瞬蒼い光に包まれたあと、彼は入り口からかなり離れたところにいた。

そこでラヴはどこから出したのか大きなブリッジの模型と彼らそっくりの操り人形（黒蟻の返り血までリアルに）を用い、回想劇をしていた。

「お前の異様にリアルな人形劇とか語り口調とかいろいろツツコミどころはあるんやけど……いま捏造があつたやろ？」

「え？何もありませんよ？」

「忍法記録」

パツと空中にスクリーンセーバーが出る。

そこでは満面の笑みのラヴが真つ赤になつて半泣きになつたルリを半裸に剥き、押し倒している。

「にゃー……！！！？？」

ズ

ルリがわずか0・2秒で両袖からガトリングガンを4丁出してスクリーンセーバーに銃弾の嵐を叩き込んだ。

「なっなんでこんなの撮ってたんだよ!!」

「わっ、ちよっどこに手えつつこんでんだよ!」

「あなたの胸元ですよ?それにしてもぺちゃですねえ。ちゃんと牛乳飲んでますか?」

「うるせえ揉むな!!あっ、まっ待て、脱がそうとするな!!サラシ剥がすなあ!!」

「.....」

「怖い!無言は怖いからあ!!やめてえ!!あっ、耳に舌入れちゃダメエ!力抜けあっ、あっ、ひううっ、」

.....ぶっ殺したるかこのバカップルは。

「.....他所でやれや。」

「おや、黒蟻。遅かったですねえ。」

こいつらはリアルでもこっちでもイチャイチャイチャイチャイチャイチャイチャイチャイチャイチャイチャイチャイヤがって!!

大体、なんでフロストは止めへんのや!!

ああもう、こんな非常識な連中が仲間やと身が持たんで。こんなや

つらに振り回される、常識的なこっちの身にもなれや。

「・・・悪い。つい、楽しんでもうた。んでついつい殺つてしもた。」

「おやおや、仕方の無い子ですねえ。死亡時間は過ぎてないでしょうね。」

「大丈夫や、あと6分22秒12ある。」

死亡時間とは戦闘で死亡すると『DEAD画面』に移行し、復活可能になるまでの10分間である。

復活できるポイントは最後に寄った町またはギルド拠点となる。

復活するを選ぶと死体が消えるので蘇生はできなくなる。

『DEAD画面』は今の状況が全くわからない仕様なので、仲間を信じるか、とつとに戻るかをプレイヤーは選択することになる。

ちなみにこれも非公式設定。

「いやに正確ですね・・・？ま、とつと蘇生しましょう。アイテムボックス、ハイポジション、ライフポジションと。」

そして極めつけは頭のとっぺんから下まで真っ二つに白と黒に別れている。

その隣には白い陶器のようにつややかで、三日月ににやりと笑った口が目じりの下がった右目、左目は赤い十字模様に丸を重ねたような柄の仮面をつけた和服のおとこ。

斜め後ろには真っ白な、それはもう純白の白衣を着た男がいる。

こっちは齒車をいくつも重ねた仮面をつけている。

その後ろに自分を刺した男がいた。

・・・刺した？

・・・！！

バツと自分の腹を見る。

が、そこに傷はない。

自分の背中を貫き、内臓をぐちゃぐちゃにかき回したあの激痛が夢だったのかと思うほど綺麗に元通りになっている。

状況から考えて、こいつらが治療したのだろう。

・・・おそらく恰好からして白衣の男。アレをこつも元通り治すとはかなりの凄腕だ。

「忍者とは忍ぶものだと言いたのだから」

精一杯の虚勢を張る。

「これからの時代は個性が大事なんや。闇に生き、闇に消えるなんて正味その辺のガキでもできんで？・・・まあ洞窟にぶち込むだけやけど。」

「まあまあアホは放っておいて、僕とお話しようよ。いろいろ聞きたいことがあるんです。」

白黒が近づいてきた。

定番の唾を吐きかける。

「殺せ！！仲間は売らぬ！！！！」

・・・・・・

「あ。」「あ。」「ア。」

「・・・・・・」

白黒が唾に濡れたまま固まる。

「ステルス。」「転位。」「フッ!」

黒蟻が空気に染み込むように消え失せ、ルリが闇色の光に包まれフツと消失し、フロストが床に罅が入るほどのダッシュでどこかにあった出口から飛び出す。

「うふ、うふ、うふふふふ?」

白黒は、とても、そうとても爽やかに笑う。

だがさつきと決定的に何かが違う。

自分を囲み始める圧迫感。
プレッシャー

嫌な、吐きそうになる重圧。魔王様のものとは全く違う、心がへし折られそうな圧力。

白黒がパチンツと指を鳴らすと拘束具が消える。

「ねえ、ゲームをしましょうか。」

「何・・・？」

「僕を殺せたら君の勝ち。兵を退きましよう。君が死んだら君の負け。別に何もしてくれなくていいですよ。簡単でしょう？」

「・・・なぜそんなゲームを？」

「えっ？君の仲間を想う気持ちが僕を動かしたに決まってるじゃないですか？」

よく言う・・・。絶対負けない自信があるのだろう。

だが私に拒否権はない。

・・・勝てる見込みも、ない。

・・・ならば！！！！

エー
ジェ
ンヌ
は
す
ぐ
さ
ま
立
ち
上
が
り、

[illegible]

両足に魔力を込め全力で突撃し、

「貴様もおおおおおお！！！！！！」

両腕に防御皆無の攻撃にのみ特化した風の刃を纏い、

「道連れだああああああああああああああああああ！！！！」

疾風、否！

暴風の槍と化したエージェンヌの刃が、

トレンチコートを引き裂いた。

エージェンヌさんに愛をこめて

パリーーーーーーン!!!!!!

クマをかたどった仮面が砕け散る。

鮮血がトレンチコートに飛び散る。

エージェンヌの刃がコートをズタズタに斬り裂く。

防御を捨て、暴風の槍と化したエージェンヌは、

鉄球を腹にブチ込まれて血を吐いていた。

「が……はっ……」

何が起こったかわからない。目の前の奇妙な、いやむしろ奇怪な光景が理解できない。

自分の刃は確かにヤツの体を貫くはずだった。

現にヤツは斬り裂く直前まで、刃がまさに触れ合う瞬間まで、そこに居た。

だが今！そこには誰もいない。あるのは私が引き裂いた白黒の服だけ。

そして、そこから冗談のように生えてきた鎖付き鉄球だけ。

バラバラに散った布切れから、ムギユウッポンツと間の抜けた音と共にバスケットボールくらいの鉄球が飛び出してきて

「ぶごおー！！」

エージェンヌの鳩尾にブチ込まれた。

それだけで内臓がいくつか潰れ、口から血が吹き出る。

ビチャ、ビチャビチャッ

ドサリと膝から崩れ落ちる。

「くっ！<ミグ・ヒール>!!」

だがすぐに腹に手を当て、回復を行う。

中級の回復呪文だがこの程度なら短縮で発動できる。

手の平から光が溢れ、腹部に浸透していく。

腹部の痛みが引いていく。さすがに完治はしていないがこれでまだ戦える。

すると、

ぱちぱちぱちぱち。

間の抜けた拍手が響く。

「いやあ、なかなか良かったですよ。見たこと無い技だったので驚きました。それにその呪文も。」

どこからか声が聞こえる。

上下左右全て白の空間。

そのはるか彼方。

そこに黒いシミがポツンとある。

真っ黒のカッターシャツに真っ白のベスト、そしてまたも真っ二つに白黒のスーツズボン。靴は片方が黒で片方が白。

黒い髪に中性的に整った顔立ち。どこかしら慈愛すら感じさせる微笑。

だが何より目立つのは、すべてを飲み込むかのような、どこまでも暗く、黒い、その瞳。

男が口を開く。

「さてさて。改めまして、自己紹介♪」

自分の胸に手をあて、優雅に微笑み、

「僕は『愛のブラック・ホール』ことラヴ・ムーン。PKギルド『ラヴァーズ』のリーダーです。以後御見知りおきを？」

[illegible]

白銀に輝く漆黒。

禍々しき神聖。

そんなでたらめなオーラがラヴから発せられる。

「.....」

震えが止まらない。目の前にいるだけで死にたくなる。さつきまであつた覚悟が粉々になる。

あきらめたい。

楽になりたい。

死ぬのは簡単だ、このまま風の刃を自分の頭上に創るだけだ。

それだけでいい。あれとは戦いたくない！！

そんな思考に自分が支配され、

（我に仕えろ！！）

そこで突然、自分が仕える方を思い出す。

部下を一人一人気遣い、こんな自分にも良くしてくれたあの方を。
まだ幼く、だが強大な力を持つがゆえに孤独なあの方を。

（・・・帰ってこいよ）

おそらくあの方は敗北を理解していらした。

だから既に民を避難させていたのだ。

最後に見た時、あの方は、いまにも泣きだしそうだった。

震えは止まった。

覚悟はとつくに出来ている。

さあ、意地を見せる時だ。

エージェンヌの周りで風が唸りだす。

ぐるり、ぐるりぐるり、グオオオオオオ！！！！

最初こそ微風だったそれは瞬きのうちに巨大な竜巻へと変貌する。

その竜巻が、徐々にエージェンヌの腕に絡みつく。

創り上げるは一本の突撃槍。

轟々と回転するそれを高々と振り上げ、キッと前を睨み据える。

「行くぞっ！！これで最後だ！！！！」

右足の膝から下がない。

ブスブスと煙を上げている。

「ああ、素晴らしい目ですねえ。まさに覚悟を決めた者の目です。僕はね、そんな目を見るのが大好きなんです。そうまさに愛する者、大切なもの、守りたいものがある人特有の目です！！誰かを深く愛する人の目です！！それはリアルでもこちらでも変わりません！」

華やかでにこやかな声がする。

「愛は素晴らしいです！！それがあればどんな困難も乗り越えられると信じていることができる！圧倒的な存在に向かって特攻する勇気が持てる！ああ！！なんて愛は素晴らしいんでしょう！！！」

ラヴは自分を掻き抱くように震えながら力説していた。

ふいにピタッと動きを止め、

こちらを向く。

「そして、そんな愛に溢れるあなたの為に、とってもスペシアルな処刑を、用意しましたあ？」

パチンッ！！

ラヴが指を鳴らす。

と、

ビー——ッ！——！——ビー——ッ！——！——ビー——ッ！——！——ビー——ッ！——！——！——

けたたましい警報。

それとともにエーゼンヌの目の前に真っ黒の壁がのびる。

いや、その隣にも、その隣にも。

エーゼンヌの周りを六角形に囲むように壁がせり出してくる。

壁はどんどん高くなり、ついに光がほぼ見えなくなる。

ビー——ッ！——！——ビー——ッ！——！——ビー——ッ！——！——！——ビー——ッ！——！——！——

赤い回転灯がその壁の内側に等間隔につけられており、暗い六角柱

の中をぐるぐる照らす。

「なにを・・・？」

エージェンヌは魔族だ。ゆえに暗闇でもよく見える。

だからこそそれが見える。

バスケットボール大の丸い突起が。

それが壁一面にずらっと上から下まで並んでいる光景が。

そして思い出す。

その突起はついさっき見たばかりであることを！！

「ぐっ！マズイ！！ フラ（ガシュウッ！！）ぐほあ！！」

翼に魔力を込めて飛ばうとした、その一瞬より早く、床から拳ほどの柱が飛び出し、エージェンヌの鳩尾を挟む。

柱に持ち上げられるように弓なりになり、背中の翼がむき出しになる。

ドシュドシュ！！！！

その翼目掛けて鎖付き鉄球が発射される。

サンドイッチになるように2つずつ。

グシャア!!

「!!!!!!つつつつつつく(カシュ)ぬおっ……………」

彼女を持ち上げていた柱が引込み、体が倒れる。

「く、く障壁てん(ガシュッ!!)(ごおっ……………」

とすぐに別の柱がその口を閉じさせるようにアッパーのように顎を打つ。

そのまま人形のように片足で立たされたところに、

ドゴオッ

右から、

ゴシヤッ

左から

ガンッ

後ろから、

それがラヴの種族である。

適当な、行き当たりばったりな鼻歌をあげながら、アナライズ＜解析＞で減つていくHPを観察しつつその光景を鑑賞する。

（ん）きれいだなあ？やっぱりあいうガンバリ屋さんっていいね！諦めた目もいいけど不屈の目もまた綺麗だ？あつ、いいのが良かった？）

彼は眺める。死なないように、氣絶しないように、ギリギリの強さで鉄球を操りながら。飛び散る血肉を。踊るように殴りまわされる姿を。ぐちゃぐちゃになっていくその音を。

（ああ、でも・・・）

ドゴトゴトゴトゴトグシャガズベキヨドムバゴオドチャグチャベキ
ヤドズグチャー！

限界に達し、もはやズルズルの肉塊となったソレ。

（あーあ、限界かあ。ま、もったほうかな？）

少し不満げに頬を膨らませ、

「さて、フィニッシュといきますか。」

そう言って、両腕を前に掲げる。

そしてそのままずぶうり、と一何もない空間に手を突っ込んだ（・・・）。

「フンフフン♪おっ！あつたあつた♪」

ずるりとそこから取り出したのは、

スイカくらいの大きさの、黒く、丸い、鉄球ではない。

頭にバチバチと燃えている導火線。

ギリリと笑った『ラヴァーズ』シンボル人喰いハート。

つまりはアニメのような爆弾。

「では♪ひとつ派手にー！！」

ポーンとそれを上に投げ、

「逝っけええええええええええ！！！」

ハットリックで塔の中に蹴り込む！！！！

[illegible]

「
・
・
・
・
・
ゲ
ボ
ツ
・
・
・
・
・
ゴ
・
・
・
・
オ
・
・
・
・
」

いつの間にか嵐は過ぎていた。

自分は暗闇の中、はるか遠くにある光を見ていた。

つまりは仰向けに転がされていたということだ。

動けない。

全身の骨が砕け、肉がミンチになっている。

どうして生きているのか自分でもわからない。

ふいに風を切る音がした。

そして迫ってくる赤い心臓。

最後の瞬間、彼女が考えたことは・・・。

塔の壁が一枚ずつ、ゆっくりと倒れる。

しゅうしゅうと煙を上げているその中心には、誰の姿もなかった。

エージェンヌさんに愛をこめて（後書き）

ゲホオッ！！難産だったあ！！

てーかあれです。テストがあまりにアレだったのでパソコン没収されかけてます。

・・・・それでも僕は書き続ける！！

噂をすれば愛をこめて

ここは超巨大空中要塞『モンスターロ』。

の上に突き出てる塔。

の中のブリッジ。

の下階。

休憩室。

ちなみにラヴがハッスルしてるのは塔の一番下の階層。

「ふい〜。」

銀色の光が生まれ、パアツと弾けると、ルリが降り立つ。

「危なかったネ。」「ホンマやで。」

プシュウツと入り口が開き、黒蟻とフロストが入ってくる。

三人はそれぞれ席にぐったりと座り込む。

「あいつ興奮したら見境ないからなあ」

「いい迷惑やでホンマ。」

「彼女も馬鹿なことを言ったもんだ。」

それきりみんなぐったりとする。

[illegible]

「あゝあ、あいつ今頃お楽しみなんだろうなあ。」

しばらくしてルリが口を開く。

「リーダー、ああいう『仲間のために！』みたいなやつ大好きやからなあ。」

「……何されてると思う？」

「ん、アレやない？安全基準全く守ってないようなロケットに乗せて発射するやつ。」

「『斬風』とか名乗ってたんだろ？じゃあバターになってんじゃね？」

「……俺はプレスだと思ウ。」

「プレスう？アレ一番楽（に死ねる）だろ？そんなのあいつ使う」

かねえ？」

「ボスは元ネタから大幅に手を加えてル。・・・プレスは減圧室に閉じ込めて減圧シ、いきなり穴を空けル。」

「あ？で、どうなるよ？」「急激な気圧の変化に体が耐えられず二、内部から破裂すル。」

「うげえ！！」

「または内臓が口から飛び出ス。」

「ううえ、よう考えんでホンマ。たかがゲームの世界でそんだけエグいこと思い付くんやからなあ。・・・ちなみに俺の言ったヤツはちよつとずつ加速するんや。んで座席に縛り付けられたモンは自分が潰れていく様を見ることになるんや。」

「それもエグいな。」

「しかも、前にしか倒れへんリクライニングシートに飲み物とクラシックのおまけ付きや。」

「シユールだナ。」

「あーでもあれだな、千本なノックは勘弁してほしいよな。」

「ああ、アレはさすがにキツイやんな。」

「たし力、ボスはアレの音がお気に入りだと力。」

「ええ、徐々に肉が潰れていく音が素敵なんですよお？」

「ホンマ趣味悪いで。」

「それに、つば吐かれてもむしろご褒美とか抜かしやがる変態だしなあ、ギャハハ！」

「・・・へえ、僕は変態ですか（ニッコリ）」

「「「！！！」」」

いつの間にかラヴがルリの背後から首に手をまわし、翼で包むようにして立っていた。

見方によつては（墮）天使の抱擁に見える。

が、かたや蒼白で、かたや獰猛極まりない笑顔なので、肉食獣が獲物を逃がさないようにしているかのようだ。

「ま、待てよ、アレだよ、ほら、な、なんていうかそ「フロストー？ちよつとの間指揮を任せるね」。「了解。」って聞けよ！」

「いやゝそれがあの子、意外に脆くてですね。欲求不満なんです。体が火照ったままなんです。だから発散に協力してください。」

「んなウルんだ目で見んな！！！」

ラヴの目が好色な色と嗜虐的な光を帯びる。

スルスルと腕が首に絡みつく。

「30分ですませろヨ。」「頼むから別の部屋でやってな。」

「ま、待てって！俺の意思は！？せ、セクハラ防止コード発動すんぞ！」

「おや？この前それやってリアルで自分がどうなったか、忘れたんですか？」

「！ーう、うう・・・」

「思い出しましたか？さ♪立ってください？」

ラヴがその細い指をルリの顎にあて、妖しく微笑んだ。

.....

ズルズルと引きずられていくルリを見ながら、黒蟻はリア充爆発すると、フロストはドナドナを呟きながら彼女に同情した。

「なあ、あいつら確か付き合ってたやんな。」

「アア。昼休みに弁当交換しているのを見たことがある。」

「・・・なんでルリはリーダーについていけないの？」

「なんだかんだ言っても、ヤツはボスにベタ惚れだ。それにボスに
対してだけヤツはDMだ。」

「・・・さやか。」

「そうなのサ。」

そう言うところフロストは白衣の懷からフラスコを一本取り出す。中身
は黒い液体に満たされている。

キュポンと蓋を抜くと湯気とともにほのかに香ばしい匂いが漂いだ
す。フロストが仮面の端に手をやり、そこにある小さな突起を押す。

と、仮面を構成している歯車が回りだし、口の形の隙間を作る。

フロストはそのままフラスコを無造作にあおる。かなり飲んでから
口を離すが、

フラスコの中身はごく微量しか減ってない。

「・・・それ、中身なんや？」

「コーヒー。」

「・・・鯨飲フラスコそんな風に使っ変人はお前だけやで。」

黒蟻が呆れたように首を揺らし、仮面の顎をカチカチと鳴らす。

「ポーションは不味いんです。」

フラスコを懷になおすと、一拍置いて、

「ところで、黒蟻。今日は何か違和感のようなものを感じないか？」

「ハ？別に？むしろいつもより楽しいと思うくらいやで？」

「・・・そうか。」

いっ……いつもより楽しい。

それこそが自分の感じている違和感だと、彼は考えていた。

だがだからどうした、それがなんだと、はつきり言えないうちはいつものように口を閉じていようと彼は結論付けた。

噂をすれば愛をこめて（後書き）

えー誤字脱字がございましたら感想で教えてください。

・・・こゝあんまり書くこと無いなあ。

これは日常茶飯事だ。

ここは超巨大空中要塞『モンスターロ』。

の上に突き出てる塔。

の中のブリッジ。

の下の階。

休憩室。

コーヒーをがぶ飲みしたフロストが、その白い息とともに言う。

「さて、そろそろ相手方も退屈しているだろう。」

「お？また俺の出番やな！」

シャキーンと紅く煌めく刀を抜いた黒蟻。そのままダッシュで飛び出そうとする。

（やれやれ、この変態ハ……。）

そのまま足を引っ掛けて派手に転がす。

ガシャ——ン！——！ゴロゴロゴロ……。。

無言で立ち上がる黒蟻。

フロストも無言で重厚な鉄甲を腕にはめる。みるみるうちにその鉄甲が凍りつき白い冷気が立ち上る。

黒蟻がクイツと外に向けて顎をしゃくり、それに頷いてブリッジから出るフロスト。

二人とも無言のまま塔の最下層、つまりはエージェンヌが吹き飛んだ真っ白空間である。

『ラヴァーズ』メンバーは全員がレベル999なので彼らが争うといちいち施設がぶっ壊れるのだ。

細かいものを数えるとキリが無いのでいくつか大きな例をあげると

- ・通路でルリと黒蟻の肩がぶつかる。↓通路全壊
- ・フロストの日頃のストレスが爆発↓第三階層壊滅
- ・黒蟻がラヴの愚痴を言い、その際ラヴを「異常識人」と呼んだのをたまたま通りがかったラヴ本人に聞かれる。↓食堂半壊。黒蟻ナイフと針で壁に磔。

そんなことがたびたびあったのでラヴがギルドポイント消費して塔を増築し、

『ここ以外でケンカしたらスペシャルなオシオキですよ?』
と言ったのだ。

で、

「あんなやり方で止めんなや！」ドンッ！

「ああでもない止まらんだろうガ！」ガギッ！！！

二人は殺り合っていた。

たった一合で鉄甲の上半分がザツクリと削られる。同時に黒蟻の刀が腕ごと凍りつく。が、こちらはすぐに超振動で氷が弾け散る。

「俺が行ったらあかんのかいっ！」イイイイン！！

紅く煌めく刀を構えての突撃を、

「いや、お前のターンはまだダッ！」ギーン！！

はめた手甲で弾く。今度は刃が立たないよう、腹の部分に拳を叩きつける。

「あ！？じゃあお前が出るんかつ！」ギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリ！！

それでもその超振動が鉄甲を削っていく。

「いや俺でもない！モンストロの試運転ダッ！！」ドゴッ！！

逸れた半身に目掛けて蹴りを叩き込む。が、手応えはない。

「まだなんかあったんか？」ザザアッ・・・

どうやら自分から後ろに飛んだらしい。

（あの突撃の勢いからすぐに反転するとはな・・・種族的なボーナスかそれともヤツのテクか・・・）

わりと本気で殺り合っていた二人は距離を取る。

「・・・まだ強襲設備と主砲、シールドにステルス機構に音波兵器に変形機構に光弾と魔弾の試射、それが「オツケー」、好きにしてや。」

かなりあっさりと引き下がる黒蟻。フロストのこだわり（オタク談義）は引火する前に消火しないとかなり面倒なのだ。

「・・・そうさせてもらウ。」

話を途中で遮られてフロストは不満そうに締めくくった。これらの機構を思い付いたのはラヴだが、組みこんだのはフロストなのだ。

ようは一番苦勞した立役者であり、「モンスター」の母とも言える。

「ん？でもやで？そんだけ使ったらあの城跡形もないんちゃう？」

「だから今回は強襲設備の試運転だけだ。．．．つまりはお前の作ったメカシノビ部隊だ。」

「おつまジでか！！それをはよ言えや！ククク、ついにアイツらのお披露目かあ。楽しみやなあ、クククハハハハ！！」

「・・・現金なヤツダ。機嫌が治ったならとつと行くゾ。あんなザコギルドにてこずったなんてラヴに思われてみ口？何されるか予想がつかン。」

そうやって背を向けさつさと行くことにする。

（全く、キレやすく冷めやすい、ここの連中に常識は通じんな。ま、唯一まともなこの俺が、しっかりせねばな。）

寡黙な仮面の裏側で、やや諦めに似た境地に達していた。

[illegible]

（ふ）、多少強引やつたけど何とか終われたな。）

黒蟻はコツソリと額の汗を拭う。

実のところそれほどキレてなかったのだが、なんとなく引込みが

つかなくなったただだったのだ。

（あんな下らん理由で俺に向かってブチキレられたらシャレならんからなあ。）

冷や汗をかきながら黒蟻はその白衣の背中をじっと見送った。

歩く不発弾、気の長いロシアンルーレット、鬼神二面相、呼ばれたあだ名はラヴより多い。

その称号は『マッドサイエンティスト激怒博士』。

『ラヴァーズ』アタッカー最強の前衛である。

これは日常茶飯事だ。(後書き)

更新遅れてすいません!!!!!!

えーこれからも不定期更新になりそうですが、

どうか!!!!なにとぞ末長くお付き合いください!!!!!!

これは攻城戦その一だ。(前書き)

お久しぶりです!!!

これは攻城戦その一だ。

ここは超巨大空中要塞『モンスター』。
の上に突き出てる塔。
の中のブリッジ。

「さて、状況を確認しよう力。」

そう言ってモニターに近づきカメラを起動させようとする。

が、

「外部カメラですね、すぐにします!!」

と言ってオペレーターの一人がモニターを出す。

「・・・・・・ありがとう。」

なんなんだ・・・もう少しでわかるんだが何かがおかしい。

「さて、敵拠点の上空まで微速前進。同時に第一兵蟻部隊を投下し
口。」

「了解。『モンスターロ』、前進します」

「ヒューヒュー、ノリノリやんwww」

「羨ましいだろウ。」

「俺にもやらしてえなwww」

「フロスト様！！敵拠点の上空に到着しました！！」

「うム、では投下し口。」

「了解、第一兵蟻部隊、降下してください」

『了。』

「グッド・ラック！」

「どれだけ持つやラ。」

「5分からへんに100円や」

「賭けにならんナ」

.....

城壁の上は大混乱だった。城全てを覆ってまだ余りすぎるソレは、日の光を完全に隠している。まるで夜そのものが形となって襲い掛かってきたかのようなうだ。

城壁で指揮をとる魔導士たちはなんとか混乱を収めようとしていた。

「ええい、鎮まれ、鎮まらんか！！ ブレイブ ! ブレイブ !
！」

ブレイブ とはその名の通り、対象に勇気をもたらし、恐慌状態を鎮める魔法である。

この場を任された指揮官は空を睨む。

「アレは・・・船、か？・・・」

（先発隊を一瞬で消し飛ばしたあの魔導兵器、なぜ使ってこない？ 下にはついていないのか？ いや、さっきもただの壁からいきなり現れた。いくら結界があるとはいえ、油断はできないな。）

「伝令！ 謎の物体がこちらに向けて降って来ます！」 「なにい！？」

その報告に目を凝らす。

（確かに小さなゴミのようなものがたくさん、いや、あれは人か？ バカな！ あの高さだぞ！？・・・いや、魔導士部隊か！）

なるほど、魔導士部隊ならばあの高さでも 浮遊 で飛ぶことができるだろう。

だが、

「バカめ!!」

どんどん近づいてきたソレは突如上空で（バリバリバリバリバリバリ!!!）結界に阻まれ感電していく。

城壁で歓声があがる。

「ハハハハハハ!! 魔王様が直々にお張りになられた結界だ。じっくり味わうがいい!」

いや、実際結界がなければ危なかっただろう。いま結界に焼かれているのと空を飛んでいるのを合わせると軽く100を越えている。と、結界に焼かれているのが動き出した。

「な、バカな!!」

動き出したソレらの腕が回転する。回転し回転し回転して……一本の鋭い槍になる。

ソレらは結界に槍となった腕を突き刺した。

そう、つまり、

パリーーーーーン!!

とても綺麗な、澄んだ音とともに結界が壊れた。

同時に飛び込んで来る敵。

呆然としていた彼は、しかしすぐに自分を取り戻した。

「そ、総員迎撃せよ！！一匹たりとも城に入れるな！！」

そう言った彼の前にソイツが降り立つ。

それは袖の無い装束、全身に巻き付く鎖、顔は覆面をしていてわからない。足からはゴウゴウと炎が出ている。どうやらそれで飛んでいるようだ。

だがなにより目を引くのはその全身が（装束から覆面まで全て）光沢ある金属でできているところだ。

黒蟻が外見から装備まで全てクリエイトし、名付けたモンスター。

レベル280、マシンソルジャー。真庭兵蟻である。

・・・まんまである。

ちなみに『ラヴァーズ』メンバーはそれぞれ特色豊かな兵隊をそろえている。

覆面の上。目のあるはずの場所には暗闇だけだ。

と、紅く光るひとつ目がそこに灯る。

ビコオン・・・

ヒュツとそのモノアイが指揮官に向き、

「殺」

ジャキツ！

金属的な音が聞こえ、

クイツと腕をこちらに向ける。

その腕から、銃口が覗いていた。

「ッ！！！！」

とつさに後ろに飛びのき、障壁を張る。

パパパパパパパパパパ！！！！

衝撃が障壁を襲い、見る見るうちに罅が入る。

「クツ！！＜三重障壁＞！！！！」

と、新たに障壁を張りなおす。

だが。

カシャンカシャン。

新たに二体の兵蟻が着地する。

「殺。」

感情の欠落した声。

その二体は手腕を回転させ、そしてそのまま障壁に突き立てた。

ギィギィギィイィイィン！！！！

「う、おおおおお！！！」

ピキ、ピシ・・・

徐々にヒビが入る。

「くっ、し、　シー（パライイン！！）」

再度障壁を張ろうとした彼は、そのまま弾丸の嵐と刃に貫かれた。

「ゴガアアアア！！！」

興奮したオーガが力任せに２メートルはある戦斧を振り回している。

その威力足るや城壁ごと削り飛ばすほどだ。

そんなやつらが何体も暴れまわり、嵐のような有り様だ。

だが兵蟻達はその嵐の中に次々に飛び込んでいく。

瞬く間に嵐に血が混じり始め、肉が飛び、そしてすぐに嵐は収まった。

代わりに城壁には血の雨がふったが。

ボコッ、ボコッ……

偽りの命を与えられた骸骨の兵士が土の中から這い出てくる。

骸骨兵士とは言うが装備はしっかりしているし、見た目と違って実は力も強い。

そんな兵士たちがワラワラと現れ、兵蟻たちに跳びかかる。

それに対し兵蟻は手の甲から刀を出し、弾丸をばら撒きながら切り込む。

結果、そこら中に「パズル」が転がった。

ゴブリンの強みは数の多さと毒の武器だ。

ゴブリンたちは時に徒党を組み毒矢を放ち、時に味方の死体に紛れて毒に濡れたナイフで兵蟻達に襲いかかった。

そんな矢の雨の弾道を計算し、矢を切り落としながらその徒党を血の海に沈めた。

ナイフで襲いかかったゴブリンはそのナイフを手の上から掴まれ、そのまま喉笛に毒ナイフを刺し込まれた。

城壁内は阿鼻叫喚の地獄絵図と化した。

これは功城戦その一ダ。(後書き)

ああ、もっと素早くかけたら・・・(泣

あ、あと皆様の感想、ご意見お待ちしております!!

ただし作者はアルミのハートですので優しくお願いします。

これは攻城戦その二ダ。

ここは超巨大空中要塞『モンスターロ』。

の上に突き出てる塔。

の中のブリッジ。

暗い、モニターの光だけが室内を照らすそこ。

黒蟻は天井にぶら下がり、フロストはフラスコから直接コーヒーを飲んでいる。

「ああやつぱ圧倒的やなあ。」

「ふム、だが兵士の投下実験は成功シタ。喜ばしいことだナ。」

「せやけど・・・あんなかでプレイヤーは何人くらい居ると思う？」

「10人いれば多いほうだナ。だがそれを差し引いてもこの数とレベルダ。大した抵抗はできマイ。それに相手のPOPスピードよりこちらが新戦力を投入する方が早イ。なにせかなり溜まっているからナ、制圧は時間の問題ダ。」

「それもそやな。・・・つてウオオ!？」

「どうシタ。」

「いやいやよう見てみい！殺られとるやないか！..」

「なんだト！？」

フロストはあわててモニターを覗きこんだ。

.....

上空でブラックドラゴンが何十体もの兵蟻に取りつかれている。

その様はまさに獲物にたかる蟻そのものだ。

だが、

「ギヤアアアス！！..」

突然黒いオーラを纏ったブラックドラゴン、それが爆発した！！

バラバラと落ちていく兵蟻達。

爆炎からぬくと姿を現したブラックドラゴンは傷一つない。

キュウウウウウンンン！！！！！

ブラックドラゴンの口に闇のエネルギーが溜まっていく。

「ギャオオオオオオオオオ！！！！」

カースブレス。

暗黒の閃光が発射される。

それは発射と同時に拡散し、兵蟻達を貫いていく。

動揺するかのように顔を見合わせる兵蟻達。

それを見たブラックドラゴンはニヤリと笑うように歯を見せると、第二撃の発射準備に入る。

それを止めようと十数体ほどの兵蟻が飛びかかる。だが、刃も弾丸もオーラに阻まれる。

それらを眺めながらブラックドラゴンは悠々とブレスを充電し、口をひら兵蟻が口に突っ込んできた。

ブラックドラゴンはそのまま口の中に響く不吉な音を聞くことになる。

カチッ。

まばゆい閃光が自分の内側からほとばしった。

頭部の吹き飛んだドラゴンが、ゆっくりと墜ちていく。

だが残ったブラックドラゴンは竜騎士の生き残りに周りを守らせ、200もの邪妖精達に味方を強化させている。

再びブレスが吐かれ、瞬く間に空にいた兵蟻部隊が駆逐されていく。

[illegible]

「いやはや、レベルたつたの280じゃあ480レベルのプレイヤーには勝たれへんか」

「……まさかブラックドラゴンがプレイヤーだったとは……」

「初めて見たで。これはラヴが知ったら悔しがるやろな。こんなお

「もろいもん見逃したんやから。」

「しかし予想はしていたがブラックドラゴンにもなれるとハ・・・
W o R何でもできるに偽り無し力。羨ましいナ。」

「オイ、待てやオイ！お前の種族の方がよっぽど強力でレアやないか！」

「いや、あれは属性が気に入らん。しかも特殊能力のせいでこんな仮面を着けねばならんす。」

そう言ってコンコンと歯車の組合った仮面を指で叩く。

「まったく、こんな属性ほど俺に似合わないものはないゾ。」

「いやこれ以上無いくらいお前にはピッタリや。」

黒蟻が呆れたように言う。

「又、地上にも動きがあつたようだな。」

二人は再びモニターに視線を向けた。

[illegible]

城壁の一部、割と広めのところに大きな魔法陣が展開されており、その周りを結界が囲んでいる。

その中心にいる魔導師部隊は固まって呪文を唱えていた。

もちろんそれを見逃すような兵蟻部隊ではない。

またもドリルが結界を貫通し、あっという間に蹂躪される。

しかし、

「・・・よ、目覚めよ、汝の・・・腕は、敵を・・・穿つ槍、汝の花弁は・・・災い阻む鎧・・・。」

魔術師たちは切り裂かれながらも詠唱を続けていた。

震える口で詠唱を終える。

「さあ、咲き誇れ・・・フィラメス。」

途端、城が揺れる。

と、次の瞬間。

「キイイイイイイーーーー！！！！」

黒板を引つ掻くような、耳障りな音とともに地面を突き破ったなにかが飛び出し、兵蟻達に襲いかかる。

その地響きは地を割り、走る罅は一点に向かう。

ボゴボゴボゴボゴオオオオオオ！！！！！！

その一点はみるみるうちに盛り上がり、土砂を降らしながらそれが姿を現す！！！！

巨大な植物。

それが人の胴ほどもある根を、触手を振りあげている。

そしてその植物はその先端に巨大な極彩色の花を咲かせた。

[illegible]

「で、でかいなあ……！」

「なんだあの魔物ハ。見たことがない。」

「アナライズ・アイでも詳細出ません！完全に未知の敵です！！」

ブリッジは騒然となっていた。

なにせその花は城よりも大きく、もう少しで空にあるモンスターに届きそうだ。

そのうえほぼ全てのダンジョンを攻略し、殺して集めたデータは凄まじい量におよぶ『ラヴァーズ』のメンバーがわからないと言っているのだ。

プレイヤーによってクリエイトされたモンスターもベースとなるモ

ンスターがある。

＜アナライズ＞ならばそれを見抜けるのだが、できなかった。

つまりそれは『ラヴァーズ』が出会う完全に新しい敵ということだ。

「ただのザコにしては大きすぎル。ボスクラス力。」
「いや見たらわかるやろ。」

「しかしおかしいナ。我々のような手段を用いない限り拠点の外にモンスターヲ、しかもボスクラスモンスターを配置できるはずがないのだガ。」

『ラヴァーズ』のモンスター投下システムはホール・テクノロジーによるものだ。

通常、モンスターは自分から外に出ることができない。

が、例えば掴んで引つ張りだすことはできる。

ラヴはこれを利用した。

まず、『モンスターロ』を作る際に下部に小部屋一（といってもかなり広い）を作りそこをPOP場所にする。ちなみにこの小部屋一つ一つを階層として認識させるためにビツミョーに、それもドットひとつ分以下程高さが違う。

次にその小部屋の床一（このときは地面に接していた。）を開くようにする。

で空を飛び、ハッチを開ければPOPして溜まっていたモンスターが落ちる。

落ちていくモンスターは敵を認識次第攻撃に移る、というわけだ。

今までのモンスターはこんな感じで発進していたのだ。

ちなみに砲台やミサイルはPOP場所を出現出来ないほど狭く作られている。

ゆえにハッチが開けば飛び出したかのように見えるのだ。

さらに砲台はPOP場所の設定に『POPした一体が倒されるまで新しくPOPしない』と加えているので詰まったりしないのだ！！
「！」

「テンション高いなあ・・・説明楽しい？」

「無論。」

「そーか。そらよかったやん。・・・あ、せや、外に出とったスケルトンはどうなん？」

「・・・言われてみればそうだな。これは仮説だが城タイプの拠点は配置できるとか？もしくは実はこれは運営による何らかのイベント戦だとか。」

もしそうだとしたらさっきラヴに“可愛がられた”彼女（名前忘れた）は運営に雇われた・・・やめよう考えないようにしよう。

「ん、まあ考えてもじゃあない、あれどないする？」

「ふム、10秒ほど爆弾を投下し、その後投下するお前の部隊の数を上げつつルリのAC部隊を出すのはどうダ？」

「なんなん勝手にしてあいつ切れへんか？」

「大丈夫だろう。ボスとアレした後の賢者モードのあいつは多重人格者レベルで別人だからナ。」

本当にいつもあれくらいおとなしくて素直ならいいのだが。

そりゃまああれだけ外面良くしてたらストレスも溜まるか・・・。

ま、俺らに見せてる顔が本性とは限らんが。

「それもそうやな。ならやってまおか。」

「よし。そうと決まれ・・・どのボタンだったかな？」

「フロスト様、お恐れながらそれは私達の仕事です。」

「皆様は指示を下さるだけでいいのです！」

「座っててください！」

「そ、そうか。ならよろしく頼む。」

「」「」「任せてください!!」「」「」

「……………そ、そうか!わかったぞ!!」

「黒蟻、さつきから何かおかしいと思っていたがわかったゾ!」

「なんや?」

「オペレーターが妙に生き生きしているんだ。」

「なんやて!?」

「どうだ驚いただろう。」

「ああまさか気づいてへんかったとは……。」

「表に出口。」

「上等や。オペレーターはん、そういう訳やからよろしく頼むで。」

「は、はい!了解しました。」

「いや待テ、その前になぜこうなのか考えよウ。」

「ああん？んなもんラヴのやつに決まっとるやろ。」
「なぜ？」

「こんな無茶苦茶できる心当たりがあいつしかおらんのや。」

「・・・ふム、確か二。」

たしかに、考えることを完全に放棄した結論だがボスならそのくらの伝手くらいあ（ドッゴオオオオオオオオオオオン！！！！）又オオオ！！？

「艦底部に被弾！！！」

「本艦に対する損傷は皆無。」

「しかし出撃中のレイヴン部隊、兵蟻部隊は全滅しました！！！」

「なんだト！？」

さっきの巨大花か。

どうやらアレの触手の先にあるあの小さな花から雨のように光線が放たれているようだな。

しかし兵蟻部隊はともかく、ルリの部隊をこの一瞬で殲滅したただと？

それはさすがにム・・・ああアレならイけるだろうな。

目の前の映像では、極彩色の花がギュンギュンと力を溜め込み、その巨大な花に見合うだけの光線を発射していた。

ドッゴオオオオオオオオン!!!!

なるほど、降下中のACに真下からあれを当てればいかなスーパーロボットSRと
言えど大破するか。

しかし参ったな、勝手に使った数少ないAC部隊をこつも簡単に潰
してくれるとは。

………ん？これつてもしかしてボスに……？

「なあ、思ってたんだけどさ……。」

「ふム、奇遇だな俺もそう思ってた。」

黒蟻も俺も前のモニターを見ている。

モニターでは怪獣ビオランテ（仮）が爆弾を受け、その傷を瞬く間
に治して爆弾を打ち落とし始めている。

「攻城戦の指揮を任されてや、」

「本来5分前から落とせる城をダ、」

「未だに落とされへんうえにや、」

「製作に割りとかネのかかるAC部隊を三体とはいえ潰さレ、」

「加えてあいつらがメイクLOVEしてんのをここまで聞こえる爆音が邪魔する・・・と、」

「たしか奴等がセクロスするのは第二階層の道場エリア。ここにも聞こえる爆音ダ、さぞ響くだろうナ。」

やれやれ、こいつも俺も同じ結論に達せざるおえんな。

「・・・殺されるナ（んな）」

「と、とりあえずアレ何とかしよ！」

「ソ、そうだナ！今ならまだ間に合うかもしれン！！」

「俺がアレ潰しに・・・」

「いや、お前はあいうデカブツは苦手だろウ。俺が出る。」

「了解や。なら俺はあっちのブラックドラゴンやな？」

「頼ム。」

全く、やれやれ。悪魔なんかと取引するもんじゃないな。

・・・ま、命も惜しいし、さっさと片づけるか。

これは攻城戦その二ダ。(後書き)

テ、テストが・・・テストがあ!!

皆様の感想、ご意見、質問などお待ちしております。

テストがアアアあ!!!

これは俺の趣味ダ。

超巨大空中要塞『モンストロ』。

そこには地下（投下兵格納庫）と上にある塔を除き、全部で六階層のエリアに分かれている。

第一階層・モンストロの体内

第二階層・十五夜大森林

第三階層・秘密基地

第四階層・ネバー・エンディング・ウォー

第五階層・サイレント・ムービー

第六階層・月の光

ルビをふるなら順に入り口、真庭の里、フロストの研究所、ルリの戦場博物館、ラヴの処刑場、そして最終防衛ライン。

上の通り二丁五階層は『ラヴァーズ』メンバーがそれぞれ趣味全開で作成したものである。

ただし第一階層と第六階層は『ラヴァーズ』メンバー全員で考えたものだ。

第一階層はお互いがお互いに手加減させ、最終防衛ラインとなる第六階層はこれ以上ないほどエグいハーモニーを奏でている。

ここはそんなモンストロの第二階層・秘密基地。

薄暗く、如何にもな悪の秘密結社のステージで、所々に監視カメラが設置され、戦闘員一（サイボーグ、アンドロイド、オートマタ等レベル240〜370）が施設内を巡回する。
砲座や銃座の中にいたのはこの戦闘員という設定だ。

ちなみにこの階層、一応一階層と数えられているが、様々な施設、研究練があり、それぞれが何階層もあるのだ。

さながら秘密基地というより研究都市のビル群だ。

さらには渡り廊下や移動パネルで繋がっていて正に研究の摩天楼。
あ、後天井までだいたい23キロくらい。摩天楼マジ摩天楼。

施設としては『生命改造施設』『新型ロボット開発工場』『武器生産工場』『食品開発研究所』『生命科学研究所』などがある。

もしこの階層に攻め込んできたプレイヤーがいれば、監視カメラと連動して様々な研究兵器たちが実験と称して襲ってくる。

で、それら全ての本体である『フロスト兵器研究所』。
膨大な面積に乱立する様々な研究施設の成果が集められ、ここで一つにまとめられる。主にSR兵器開発用にだ。
まあ研究するのはフロスト一人だが。一応研究員というキャラもいるが、もちろん飾りだ。

の格納庫エリア。

そこはフロストが今まで作成したSR兵器を保管する場所である。

薄暗く、無機質な壁に囲まれ．．．．．ようはガソダムとか並んでそんな感じの場所。

そこでは『ラヴァーズ』メンバー、Dr・フロストが、今回使うSR兵器を選んでいる。

．．．．．
．．．．．

さてどれにしようかな。近接格闘型伊ー八号がいいかそれとも中距

離爆撃型露・二号にしようか。

フフフ・・・ハッ!? いやいや落ち着け俺。

今は趣味に走っている場合ではない。最も効率よくあの花を潰せるのは・・・広域殲滅型仁・七号か。

・・・やれやれ、あれは結構奥の手なのだな。

まあ背に腹は代えられん。

では行「フロスト様。」ぬおおッ!?

いきなりなにかが抱きついてきた。何だ? と思って首だけで振り向くと、紅い瞳と目が合った。

真っ白い髪がトゲトゲな感じになっているポニーテール、血のように明るい真紅の瞳、ぶかぶかの白衣を着た、俺よりも頭一つ小さい少女。

こいつは・・・確かこの階層のボスの一人だ。

名前はゴート・セヴンス。

俺と目が合ったからかスツと離れる。

そのとき、小さく白い電光が彼女の動きにあわせてパチパチッと走る。

よく見ると少し発光している。

それもそのはず、ゴートの元になったのは麒麟なのだ。

この研究所で俺の助手、という設定だ。

単体でもレベル777と777で十分強いのだが俺が作ったSR兵器の内一つを与えてある。

ボス部屋で颯爽と乗り込む演出は様になっているはずだ。

・・・前回のホワイトナイツ襲撃戦で大破したがな。まあ一度作った物だから、二回目は簡単だったし？

それにもっと強力で改造したから？何も問題は無いぞ？

・・・ホワイトナイツめえ・・・！

「出撃ですか？」

って話しかけっ・・・ラヴか・・・？

「ああ、そうダ。」

「ですがフロスト様が出るほどのことではありません。どうかこの私と『クロック・タワー』にお任せを。」

・・・ラヴめ、味な真似をする。今度誰にプログラムを組ませたか聞くとしよう。そしてこの技術、絶対にモノにするぞ。それにこの口調にこの表情、俺の設定に実に忠実だ。その礼もせねば。

フツ。それにしても、ボスクラスモンスターは外に出れない。

プログラム上のサービスのセリフだろう。

苦笑しながらそれに答える。

「必要ない。俺も久々に暴れたくなつたのだ。」

「そうですか。ではどれでお出になるのですか？」

「仁・七号だ。」

「ではいつも通りデータを取っておきます。」

・・・データ取り？

ああ！そういえばそんな装置作つたな！

まあ簡単に言えば『カメラビット』というクリエイトモンスターだ。ビットタイプのモンスターを元に超望遠レンズ、高性能カメラ、情報転送プログラムに光学迷彩を組み込んだ、いわゆる偵察用モンスター。

ただしレベル20。ゴミだがその分数を翔ばすので無問題。そいつを発進させ、戦闘記録を撮るのだ。

まあ簡単に言えばスクリーンセーバーを撮るモンスターだ。

「ああ頼ム。」

「ではいつてらっしゃいませ。」

ふむ、なかなか楽しい会話だった。

実に高度なプログラミングだ。

.....

そのままフロストはうつすらと青い格納庫を歩いていく。

通路にはいくつもの隔壁があり、そこには手前から順に『伊^イ』『露^ロ』『破^ハ』『仁^ニ』・・・と、大きく記されている。

フロストはそのうちの『仁』と書かれた隔壁の前に立ち、そのすぐ横にある電子ボードに慣れた手つきでパスワードを打ち込む。

ブーッブーッ!!

パスワードガチガイマス。
シンデクダサイ。

途端に床から壁から天井からマシンガンガトリングガンミサイルレーザービームサーベル付きロボットアーム警備ロボが飛び出して――

.....

「ふム、また間違えたナ。パスワードなんて設定しなければ良かった。」

と言ってアイテムボックスからマスターカードキーを取り出して電子ボードに通した。

シ。ドドド

ヨウコソ、Dr.フロスト

ガシャンシューウィーンウィーン……

ゆっくりと閉じていた隔壁の一枚目が上下に開き、二枚目が左右に開いた。

この扉はフロストの自信作で例えレベル999プレイヤーだろうと破壊するのは困難な、超レア素材を使った破壊不能オブジェの次に硬い扉なのだ。

これだけの数の隔壁用に素材を集めるのは大変だった。

当時この素材が出る鉱山をどこぞのギルドが違法占拠していたのだ。

無論『ラヴァーズ』全員で獲物を分け合った。

砕け散った氷像の煌めきはいっ見ても綺麗だ。

それに首謀者がラヴの一方的な愛に包まれるのは見てて実に楽しい有様だった。

なにせ最終的に5センチ四方になったからな。

ちなみにこれだけの設備は全て勝手にフロストの作品群にイタズラしに来る奴等を撃退するためにあった。

ああ、あの撃退装置を強化していった日々が懐かしい……。

最終的には撃退は不可能という結論に達して隔壁を強化した今があるのだが。

ほんの少し懐かしく思いながら『仁』格納庫に入っていく。

後には完全に凍りついている（弾丸すら空中で凍りついて止まっている）撃退兵器の数々が残された。

・・・・・・・・・・・・・・・・

『仁』格納庫の中はそこそこ広く、先程とは違い、明るい照明の光が様々な物を照らしている。

天井からはクレーンやたくさんのロボットアームが降りており、その中にはドライバーやドリルやバーナーや何かわからない物やらがついているのもある。

だがそんなものよりまず目の前を塞ぐ物が部屋中央にある。

そこにはデザインを徹底的に無視した直径15メートルくらいの球

体に大きな拳と靴をくっつけて楕円形の円盤みたいな頭をちょこんと乗つけたようなロボットが静かにたたずんでいた。

最初に言っておくがハロではない。

機体カラーはライトグリーン。

念のために言うがカプルでもない。

フロストは操作パネルに近づくとまたもマスターカードキーを通し、搭乗口開放のコマンドを入れる。

ちなみにこの階層の本体であるフロスト兵器工場が攻撃された場合はここに眠る『伊』『巢』『ん』までの全てのSR兵器にパイロット戦闘員が乗り込み、完全武装で迎撃に向かうのだ。

……今ほとんどが大破しているが。

目の前のロボットの胸の辺りがパシュウツとスチームを吹きながら上下に開いた。

そこにはオレンジ色のライトに照らされた操縦席がある。

フロストはとんと床を蹴るとふわりと操縦席に滑り込む。

「ハッチクローズ、起動パス『Dr・frost』。(ブーッ!!
ブーッ!!)・・・マスターキー。」

バシュンッ!!ビコオン!!

コックピットが閉じ、円盤みたいな頭にモノアイが光る。

同時にフロストの周り(コックピットの内側)が透明になり、モノアイに映る景色にリンクする。

「動作チェック、カメラ良好、武装確認。・・・さて、行く力。」

フロストがレバーを引くと、拳がドリルに変形した。

「・・・また間違えタ。」

そう苦笑するとフロストは今度こそ正しいレバーを引いて、転送ゲートまで歩いていった。

これは俺の趣味ダ。(後書き)

あかん、自分の文才のなさにかっかりする。

もっとすらすら書きたい。

イメージはあるのに・・・！

焦る二人から愛をこめて

ここは超巨大空中要塞『モンスター口』。
の入り口。

「あいつなにやっとなじゃ!!」

遅い！あまりにも遅い！！

あいつ命かかっとなのわかつとるやろな!?

このままラヴにお仕置きの口実を与えたら・・・あかん、考えとつない。

ええい！俺だけ先に殺るか！

時間かかってもドラゴンと花両方殺れれば言い訳は立つ。

もしかしたら助かるかも。

まあその場合はフロストは死ぬやろけど。

どうでもええな。

なんにせよ、そうと決まれば即決行！！

獲物はドラゴン！！

血しぶきハッハー――！！！！！！

[illegible]

「さてさて？ご機嫌いかがや？」

突然奇妙な声が聴こえた。

速攻 カースブレス 発射。強化魔法による 高速チャージ で一秒に満たない内に通常より遥かに大きいブレスを放つ。

「おおっとハズレや。」

またも音のした方に目を向けると、じわりと空間から染み出すようにソイツが姿を現した。

肩口からざっくりと切り落としたかのような、袖のない装束。

腕、足、胴に蛇のようにぐるぐると巻き付いている鎖。

両手両足には鋭利な爪のついた手甲に足甲。

顔の上半分を覆う黒く、艶やかで、強靱な顎がついている仮面。

コイツはエージェンヌ殿を殺した・・・！

・・・戦場ゆえに仕方ないこととはいえ・・・我慢できることではないな。

「何や切れとるみたいやけど、まあええわ。お前には悪いけど、俺

の安全と楽しみのために死んでくれや。」

ふっ面白い！！

ブラックドラゴンは喉の奥で笑うと自分の纏う　カースアーマーをさらに強化。同時に邪妖精達がさらに強化魔法を重ね掛けし、攻撃魔法の詠唱に入る。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

さあ怨敵よ！！来い！！！！

「まずは俺の愛刀を紹介したるわ。」

腰に付けたポーチからずると、さながら四次元ポケットのように抜身のだんびら包丁を取り出す。

白銀に輝く刀身の峰に背骨のように、釣針のような返しのついた突起が突き出ている。

そしてその輝きを台無しにするように毒々しい黄色の液体が滴り落ちる。

「これが俺の愛刀、籠刀……」

重
や
！
！
」

[illegible]

「うおおら、刀籠流し!!」

黒蟻が横薙ぎに刀を振るうと、

カシンカシンカシンカシンカシンカイイイイーン!!!!!!

だんびら包丁が伸びる――否！！突起の数だけ別れて刃の鞭へ姿を変える！！

ザクザクザグウ!!!

踊る刃が次々に邪妖精の小さな体を切り裂き真っ二つにしていく。

「キイツ！」

刃がほんの少し掠っただけで邪妖精はブクブクと黄色い泡を吹きながら落ちていく。

それに対し邪妖精達は氷の槍を生成、ズラリと周りを埋め尽くし躲す隙間もないそれを一斉に発射する!!

だが、

「無駄ア!!」

イイイイイイイイイイイイインンンンン!!!!!!

黒蟻に当たった氷槍は次々に碎け散る。

口を大きく開け、噴水のように血を吐き散らすと、がくりと力を抜いて落ちなかった。

腹がだけが膨れるように持ちあがり、

ドブズツ！バシャアア！！！！

刀が腹から突き出し、血の水風船を黒蟻が食い破ってきた。

ブラックドラゴンの死体は今度こそ地上に落ちて行った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

地に落ちる黒竜を全身血でずぶぬれの黒蟻は眺める。

その表情は恍惚に歪んでいる。

「つふう~~~~」

いやぁ楽しいひと時やった。

やっぱ血ィ浴びんの最高や？

噴き出す血、飛び散る血、降りしきる血のシャワー？

暖かい腹の中から飛び出すあの感触？

つと、んなこと考えてる暇ない、はよもう一体を（キイイイイイイ
イイン！！！！）・・・チッ、あいつ来てもうた。

遠くの方、巨大花に向かっていく薄緑の球体。

殲滅型かぁ、フロストのやつも一応やる気あるんやな。

・・・でもアイツの場合兵器っていうより拘束具って感じやな。

さて、先に戻ってこかな。

そう考えた黒蟻は振り返りながら手裏剣を投げ、残った邪妖精をのこらず地に落とした。

.....

SR兵器とはあの全ての歴史をひっくり返した大事件、『重なつた日』『次元崩壊記念日』『同空間多重物質重複災害』に流れてきた様々な技術、魔術の合作のことだ。

リアルの世界でそれが起こったのはもう140年も前になるのだから

ら時の流れとは恐ろしい。

話が逸れたがSR兵器というのは当時最先端科学の要を担っていた屍馬博士と魔術を極めたといわれる名門ディアー家が未曾有の人類の脅威に立ち向かうべく多種多様な次元世界に存在するあらゆる文明を使って製作したとつてもすごいロボット兵器のことだ！！

どうすごいかというとまず物理法則無視。質量保存の法則無視（おっぱいミサイルが連発できる）とか慣性の法則無視（体がちぎれない）とかあり得ない変形（腕がドリルに！）、合体（合体中は攻撃されない）とかを可能にし、根性とか気合いとかで機体の損傷が治り、魂とか勇気とかで機体性能をはるかに超えたスペックを叩き出せる！！「試作型（プロトタイプ）が継続機より弱いなんて誰が決めた？」とはあまりにも有名なセリフ。

のちに様々な軍需企業や魔術結社がそれぞれ科学のみ、魔術のみのSR兵器開発に成功したりと、近年目覚ましい発展を遂げている今一番熱い兵器なのだ！！（ルリ：談）

で、ここW O RでもSR兵器は存在する。

ただし非常に機体の操作が難しく、素人は機体の性能に振り回されがちだ。

だがやはり高い防御力と攻撃力は非常に魅力的である。

しかし、「乗り物」によって倒した経験値は加算されない、乗り物が爆発するとほぼ即死（そりゃそうだ）などのペナルティーもある。

しかもある程度強いプレイヤーは普通にSR兵器やそれに準ずる戦車や戦闘機を単身で撃墜できる。

ようは小回りのきくSR兵器がごろごろしているのだ。

もちろんそれに対抗するように「乗り物」性能補正をかけれる「パイロット」という職業がある。

機体の速度を加速させたり、攻撃力を上げたり、ときには（例え首だけでも）機体を完全回復させたりと、いろいろ便利なスキルがある。

ただし・・・「パイロット」はぶっちゃけひどく弱い。どのくらい弱いかというと魔法使えない魔術師（モヤシ）くらい弱い。

「パイロット、席から降りれば、ただの力モ。」という川柳すらあるくらいだ。

もちろんサブスキルで魔法やら銃やらで抵抗もできるが、やはり防御力が皆無で、スライムの体当たりがヘヴィ級プロボクサーのパンチに感じる。

しかもこの「パイロット」スキル、特殊スキル扱いで他の職業では使えないのだ。

もちろんSR兵器は「乗り物」扱いなので「パイロット」でなくとも乗れるのだが、やはり専用スキルの＜根性＞＜気合い＞＜加速＞＜姿勢制御＞＜視野拡大＞などがあるほうがかなーり便利なの

『ラヴァーズ』はSR兵器生産ユニット、つまり『フロスト兵器研究所』をダンジョン内部に持っているのもそれより安く手に入る。

そしてこの施設をエンジニア系職が使うとさらに安く生産できる。

そうフロストだ。

ガラスの筒みたいな転送ゲートにフロストは仁・七号で乗り込む。

女性の機械音声が上から聞こえてくる。

『どちらへ行きますか？』

「出撃用転送ゲート・前面Y16番だ。」

『了解。出撃用転送ゲート・前面Y16番に接続。・・・接続完了。転送開始。』

フロストの周りのガラスケースが透明から漆を流し込むように黒くなり幾何学的な光の模様を描いて、

『・・・転送完了。』

再び周りが透明になり、転送ゲートの扉が開くと、そこにあるのはカタパルト。

前に進み、カタパルトに足（と言っても靴だけみたいなものだが）を嵌め込み、フロストは吼えた。

「Dr・フロスト、仁七号、出る！」

ブースターに点火し、仁七号は飛び出していった。

[illegible]

短い足からジェットブースターを吹き出しながら高速で前へと飛ぶ。

クーツと大きく廻って方向転換。

そのまま加速して巨大花に突っ込む！！

「ム、これはブレーキではなかったのか？」

ドグオオオオオオオオオオオオオン！！！！！！

その凄まじい体当たりは500メートルもの巨大花を大きく揺らす！！

だがそこにほとんどのダメージはない。

「キイイイイイイッツツ！！！！」

傾いた茎を元に戻し、すぐさま大量の触手が襲いかかってくる！！

シュゴオオオオ！！！！

だが仁・七号も姿勢を元に戻し後ろに飛びつつ、

「ミサイル全弾喰らうがいイ！！」

ピッ！

右手がドリルに変形しロケットパンチ化して前に翔んでいった。

「・・・。」

ドリルパンチは触手を巻き込みながら巨大花に迫る！

だが、

ピピピピーッ！！！！キュボン！！

そんな軽い音と共に迎撃レーザーが触手に生える花から放たれ、ドリルパンチは爆発する。

そしてなお増え続ける触手に囲まれ、花の銃身が仁・七号に狙いを定める。

「クッ！シールド展開！！」

ガシャン！！

仁・七号のボディに帯状に穴がズラリと開き、ミサイルが発射され、同時に光線が放たれる！！

ピシ・・・ピキ・・・。

シールドに僅かづつ罅が入ってくる。

「フツ・・・だが転送装置を使えば一瞬で貴様の後ろダ。」

ポチッ！

キュッポン！

気の抜ける音がするとボルボックスの翔んでいった右手が新たに生えた。

「・・・。」

パッキイイイイイイイイン！！！！

シールドが粉々に割れ、あっという間にぐるぐる巻きになり、

ギ・・・ギギ・・・ギイ・・・キイ・・・ギ・・・。

不気味な軋みが聞こえてくる。

「フ・・フフフ、だがまだ挽回できル。全方向凍結エネルギー、照射！！」

カチッ！

両手が翔んでいった。

「・・・。」

・・・ピッポッパッ。

ピピーツ！自爆装置作動。

10、9、8・・・

フロストはアイテムボックスを開くと、……実に慣れた手つきで『脱出』の項目を選び一枚の札を取り出す。

赤い染料で『転移』と書かれた札を破くと、フロストはフツとコックピットからいなくなっていた。

・・・2、1、0。

ピーー！

ピカーーーーーーッ！！！！

突然仁・七号を包んでいた触手の塊から光が漏れ、

バキッ！！パキパキパキッ！！！！ピキピキパキパキッパキン！！！！！！

その冷氣は触手の塊をあつという間に凍りつかせ、どんどん触手を伝って葉を茎を花を根を凍らせ、地面を伝って城壁の一部を覆い、多くのモンスターも彫刻に変えてようやく止まった。

巨大花フィラメスは細胞ひとつ残さず氷の彫刻と化し、城の黒いオーラを反射して静かに煌めいていた。

焦る二人に愛をこめて

ここは超巨大空中要塞『モンスターロ』。
の上に突き出てる塔。

の中のブリッジ前のテレポート・ポート。

そこに転移したフロストはブリッジに向かって歩き出した。

「フーやれやレ、また失敗ダ。」

なにかと俺の作るSR兵器は暴走する。

今回も操作系統がイカれていたらしい。

お陰でまた高価な一台を潰してしまった。

・・・だがそんな不具合聞いたことがないな。

まあいい、壊れた仁・七号はいつも通り“大ヤギ”のエサにでもするか。

おっと考え事していたらもうブリッジに着いた。

黒蟻は先に帰っているかな？

カシュウツ。

フロストは自動ドアをくぐり、

「やぁおかえりなさい？」

速攻で逃げた。

後ろに向かって走りだし、自動ドアを片手で粉碎してそのままブリッジに入った。

「ッ！」

もう一度後ろに向かって飛び込み、ブリッジに入る。

目の前には先程と同じく優雅にカップで紅茶を飲みながら、アンテ
イークな机と椅子でくつろぐラヴがいた。

新しいのを取ってきたのか新品のクマ仮面が机に置いてある。

くっ！しまった！！

やはりブラックドラゴンも俺が殺して手柄を立てておくべきだった
！！

いや、俺が出たときはもう黒蟻に殺られていたから・・・ええい！
！！過去よりも今は目の前のことだ！！

「や、ヤア！早かったなボス。」

とりあえず話しかけるフロスト。

するとラヴはカップを置いて人差し指をチッチチイツ、と振り、

「ダメですよフロスト、こういうときは『な、何で中にいい〜！？
ウケ、ウケケケ』と言って上院議員に敬意を表さないと。」

「ハ、ハハハ、だがそいつはそのあと死ぬじゃないかあ縁起がわるだからぴったりなんですよ。」・ハハ、ハハハ。」

ヤバイ、このままだと俺は死ぬよりひどい目に合う。

いや実際こいつに殺されるくらいなら『貧者の洞穴』にいたゴキブリ（体長3メートル。ほどよいデカさで非常にキモい。）に頭から喰われるほうがマシだ！！

「さて、何か遺言があったら・5秒以内に言ってください時間切れですさようなら。」

ぬおお！！！！

突然なにもない空間から白いダガーナイフと黒い針が何十本と飛んできた！！

「クツ！！ 凍結結界　！！」

パキパキパキパキパキ！！

フロストの前の空間があつという間に凍りつきナイフと針が止まる。

ゾクリ！

前に向かって転がる！！

ブウンッ！！

嫌な予感通り！

さっきまでフロストがいた目の高さにギロチンが横向きに通り抜けた。

浅かったのできつと視界を潰すためだけのものだろう。

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ！！！！

なんとかラヴの気を反らさねば！

そ、そうだ！黒蟻は！？まさかヤツだけ逃げたんじゃないだろうな！！！！？

いや待てよ、それならヤツに全ての責任を押し付けよう！！

ブラックドラゴンも俺が殺したことにして！

「ア、ああそうだラブー！黒蟻はどうした？ヤツには言いたいことがあるんだ！ヤツが『モンスター』の性能試験にこだわったせいでこんなにもてこずるはめになっタ。幸い俺が敵の秘密兵器っぽいブラックドラゴンと巨大花を潰したからもう後は簡単に落とせるはずだ！アイツも困ったヤツだよハッハッハッ！」

早口でそう捲し立てると、ラブは驚きで目を真ん丸に見開き、しかしすぐに不思議そうな顔をして、

「へえ、そうだったんですかあ。あれ？でもおかしいな？そこにいる黒蟻は違うことを言ってたよ？君が試運転にこだわって彼が尻拭いをしたってさ。」

アノヤロウ・・・今度あつたらタダじゃ、うん？

そこにいる？

俺は、いや『ラヴァーズ』は全員隠匿系スキルを看破するスキルを所持している。

さすがにレベル999である黒蟻のステルスは看破できないが、それでもそこにいるかいないかぐらいは（ボンヤリとだが）わかる。

だがいくら目を凝らしてもその輪郭すらわからない。

ポタ……ポタ……。

ん？なんだ？何か上から……

ひょいと上を向くと、天井に磔にされた黒蟻が居た。

「ツツツツツ！！！？？」

黒蟻は手を腕を肩を足を脛を膝を腹を胸を喉を舌を口を、およそ死なないであろうところを白いナイフと黒い針とで全て貫かれて十字に磔になっていた。

「うふふ、ほら見てやってください。きれいな顔でしょう？あれ、生きてるんですよ？」

確かにピクピクと痙攣している。

だが知っているぞ。

あの白いナイフから電流が流れていることを。

ラヴのジョブスキルの一つ、魔法の固形化。

アレは 聖竜王の息吹 を固形化し、粉々に砕いて削った物だ。

ラヴが固形化を解除すれば元の魔法に戻り、黒蟻は黒焦げになる。

あの針、ラヴの作ったお気に入りの武器だ。

付加能力は『対象に刺さったとき、必ず貫通する』だ。

つまり刺さりさえすれば必ず反対側まで針が伸びてぶち抜くということだ。

やばい、ヤバイヤバイヤバイヤバイ!!!!!!

そっと、優しく、ラヴが肩を抱いてくる。

「本当はね、誰の責任かなんて、全然気にしてないんです。」

その顔はやさしく、まさに天使のよう。

「ただ、せっかく楽しんでいたのに水を差されちゃって、欲求不満なのです。」

と拗ねた子供のような顔をする。

と同時にひどい悪寒。

スツとラヴがフロストの瞳を覗き込む。

どこまでも暗く、黒い、その瞳に、意識を飲まれ

「だから、僕と、遊んで？」

寸前で飛びのいた！！

（危ない、いきなり<チャーム>とはな！！）

<チャーム>とは、相手の言うこと聞いてもイイカナーという気分
にさせるスキルで、脳に直接作用するこのゲームならではのスキル
だ。

あのままラブの瞳を見続けていたら、絶対自分はギロチンに首を差し出していただろう。

だが距離を取った！！

「超 凍結結界 ！！」

フロストの周りに氷の壁が、いやむしろ隔壁というべきものが形成され、四角い氷のシェルターが完成する。

（よし、これはヤツにもすぐには破壊できない。あとはほとぼりが冷めるまで（ピピーッ）そうぴーっ・・・ぴーい？）

くるりと振り向くと、ちょうどタイマーが1から0になった四角い箱が――

.....

ビシッ！！！！！

くぐもった衝撃音と少しの振動が僕に伝わる。

おおすごい！さっすがフロストの 超 凍結結界 だ！！

ブリッジまるまる吹き飛ぶクラスの爆弾を、こんな密閉空間で封じ切るなんて！！

しかもこのシエルター、罅しか入ってない！

いや、彼はすごいなあ。

「んふふ、すごい見れたから、ちょっと満足かな？さて、二人は遊び疲れて休んじやっかし、あとは愛しの恋人の活躍をゆっくり眺めようかな？」

そう言ってラヴはまた、紅茶に手を伸ばした。

焦る二人に愛をこめて（後書き）

二話連続はしんどい・・・。

感想いつも見てますありがとうございます！！

おかげさまで62,000アクセス突破です！！！！

これからもがんばります！

城壁制圧作戦だぜ！！（前書き）

地獄の合宿から帰ってきて・・・風邪引いて寝込んで・・・ようや
く上げようとパソを立ち上げたら・・・？

たった五日で一体何が・・・？

城壁制圧作戦だぜ！！

ここはどっかの城。で、玉座の間。の、玉座前の広いこの床。

宙に浮かんだスクリーンセーバーの前で『ラヴァーズ』の面々は床に座って各々好き勝手に菓子やらジュースやらを飲んでいる。

もはや仮面すら脱いで完全だらけモードだ。

フロストがフラスコを呷りながら口を開く。おっとカメラが回り込んで顔が見えない。

「ここまでが俺の知っていることだ。」

「そつえばあの状態からどうやって助かったんですか？」

「とっさにもう一枚結界を張りながら気合と根性で防御した。」

「・・・いい加減転職しません？」

「つかフロスト！！お前もうロボット乗るな！！今まで何体ぶっ壊しやがった！！」

「フツ・・・お前は今まで食べたパンの枚数を覚えているの力？」

「デメエ・・・。」

「まあいいじゃないか、どうせコルドロンで金はいくらでも手に入る。俺はそれよりいい加減黒蟻の籠刀が見たいんだが。」

「あれ？フロストは知らないんですか？」

「知ってるのか？」

「俺も知らねえんだけど？てか、おいおい、なんでラヴだけ教えて俺らには教えねえんだよ？」

すると、黒蟻は遠い目になり、何もない空間に過去を観る。

「・・・お前ら、メツチャ強力な装備手に入れたらどないする？」

「「ラヴを殺す（ス）・・・ハッ！」」

「見事に返り討ちや・・・。俺の血は・・・薄かったで？」

「君たち・・・僕も一応傷つくんだよ？」

ちよつとシンミリとした空気が漂ったが、

「さ、さてと！次はいよいよ俺だな！！」

その雰囲気吹っ切るように、そう言つてルリが自分のスクリーン

サーバーを宙に出す。

-
-

ここは超巨大空中要塞『モンスター』の上に突き出てる塔。の中のブリッジ。のさらに何回か上の階層。

そこは狭く、ズッシリと重厚な、黒地に蒼で幾何学模様の入った椅子が一つ。

その椅子を囲むようにキーボードがあり、様々な大きさと色のスイツチやらレバーやらが設置され、大量のケーブルやらコードやらが繋がっている。

ここは『モンスター』のコックピットだ。

この超巨大要塞を自動で動かすためにブリッジがあり、手動で動か

すためにこの部屋がある。

いわば『モンスター』の中核なのだ。

外にある背面部砲座の操作、モンスターの発進、全階層の監視映像、トラップ、徘徊するモンスター、侵入者の排除まで全てここで行える。

ただ滅多に使わない。使ったしたらラヴが自分の階のトラップを発動させるか、バカ広い『モンスター』内に放送をかける時くらいである。

そこにドツカリと座り、すごい速さでキーボードを叩く人影。

肩まで流れる漆黒の黒髪、シミひとつない雪のような白い肌、藍色の着物と深紅の十字を刻むターゲットサイトのついた仮面。

『ラヴァーズ』の一員、ルリ。

次々と空中にモニターが開き映像を流していく。

ルリは右手でカメラを操作し左手で居なかった間の戦闘ログを開き、忌々しげに舌打ちした。

酷すぎる・・・こんなひどい戦いは初めてだ・・・！

ルリの前にはだんびら包丁を振り回し、血を浴びながら狂喜乱舞する黒蟻と、支離滅裂な動きをしたあと自爆するロボットが映っている。

なんて無駄な戦い方してんだよ！！

どうしてまず『モンスター口』で邪妖精共を吹き飛ばさねえ！！

どうせ少しでも血を浴びるつもりだったんだろ！！

あとお前はいい加減本物の籠刀を出しやがれ！この前は槍だったじゃねえか！！

あとフロスト！！もうお前ロボット乗るな！！

今まで何台潰した！三桁からこつちもう数えてねえぞ！！

どうしてお前は作れるのに使えねえんだよ！！

ああもうめんどくせえ！！ラヴの注文は『城壁の制圧』だったな。いいだろう、本物の戦争を魅せてやる！！

ルリは肩をぐるりと回すと、スパイビットを発進させ、フロストが仮面を作ったときの副産物である「広域凍土化爆弾」を投下し、無

人戦闘機部隊を発進、それに指示を与えるべくイヤホンマイクを被る。

これら全てを同時にお知らせる。

「あー、テストス、んん！ 命令^{オーダー}。移動指示、つと。」

目の前にあるモニターに映る城壁にルリは指先で触れる。

すると城壁に青い矢印^{マーカー}が印される。

『指揮官』のスキル 移動指示 だ。視界にある、または認識してある味方ユニットを自分の命令通り動かしたり（ただしCPUまたは混乱、魅了状態の味方プレイヤーのみ）、強化したりする支援系スキルだ。

『ラヴァーズ』が誇るプログラマー、Dr・フロストがカメラビットの映像をこの部屋に回し、そこから指示が出せるよう改造しまくったのだ。

だがこの部屋はフロスト立ち入り禁止となっている。

理由は・・・わかるな？

『ラジャー
了解。』

「スパイビットは城を多方面から撮れ。映像は全てこの部屋にまわ

せ。・・・っとこれじゃ反応し『^{ラジャー}了解。』・・・？」

何か妙な感じはしたが、通じるならいいかとルリはさらに様々な指示を与えていく。

ん？ メッセージか、受信 っと。

「おう俺だ。」

『ルーリー、早く早く！お仕事ですよ！』

「わーってるよ、もう“仕事部屋”だ。」

『え？あなたが直接行くんじゃないんですか？』

「ハッ！どうせアレだろ？俺が名乗りあげて恥ずかしがるのを見るつもりだったんだろ？」

『・・・』

「言い訳あるなら言ってみろよ、おらおら！ギャハハハ！！」

『歩兵40、戦闘機10、AC3で城壁制圧できなかったら罰ゲーム。（ブツッ）』

「ちよっ！」

ええいまたか！！ハア、奴の機嫌を損ねるとろくなことにならねえ。
具体的にはこの映像みたいに。

ルリの前にはいくつもモニターが浮かんでいて、その内一つはブリ
ッジを映している。

つまり二つ分の半死体とラヴだ。

まあいい、ラヴは無理難題を押し付けたみたいにいるようだが、私にとっては造作もないことだ。

ま、せいぜい彼の珍しい吠え面を拝ませてもらおう。

ルリは指をパキパキ鳴らすと、にっこり笑って呟いた。

「そんじゃま」『ラヴァーズ』の一員にして作戦参謀、『歩く戦争』
ルリが、宣戦布告させてもらうぜ！！」

通達はしねえがな！！

城壁制圧作戦だぜ！！（後書き）

ええ、感想でいっぱい言われてるのですが・・・これ回想っていう第一章みたいな感じなのです（テヘツ

ん）いつそ題名から回想外したほうがいいですか？

情景描写は・・・ガンバリマス。

8・20・というわけで初めて章管理してみました！

城壁制圧中だぜ！！

ヒュールルルルル・・・

立派なドングりに羽根を付けたような爆弾が一つ、二つ、ゆっくりと落ちてくる。

それら二つが城壁の内と外にトスツ、と突き刺さり――

何も起こらなかった。

別に爆発したり光ったりもしなかった。

たまたま近くにいたゴブリンが不審に思い、近づこうと一歩、足を踏み出した時、

ジャリッ

何かを踏んだ。

足をどけると、白く光を反射する氷と土とがあり、それらが混ざって酷く汚く見えていた。

よく見ると氷はそこだけでなく周り、突き立った爆弾から広がるようにポコポコと土を押し上げていく。

と、今度は押し上がった霜柱から順に次々と結合していき、みるみるうちに地面が氷に閉ざされていった。余談だがこの時地面に立っていたゴブリンやスケルトンは足を凍らされ、助けようと下りてきた者も同じく犠牲になる。

キイイイイイイイイイイン！！！！

『モンストロ』の底面部滑走路からミサイルを満載した戦闘機が10機、飛び立つて行く。

編隊を組まずバラバラに飛んだ戦闘機群は城と城壁にある入り口に向かい、そのまま突っ込んだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

空に浮かぶ『モンストロ』は城を完全に覆っていた。

「おっけージャストミート！！」

ルリはキーボードの前でケタケタと笑っている。

モニターには爆発炎上する戦闘機と、それに扉を塞がれ右往左往す

るモンスターが映っている。

オーダー
命令 による指示は愚直に遂行される。

だから壁の中に行けと言われれば、壁を破壊してでも中に行くし、海の中に行けと言われれば、たとえ途中で溺死するとしても構わず行く。

つまりルリは 移動 によって即席特攻隊を作ったのだ。

「さあて、POP場所に繋がってるっぽい所はこれであらかた潰したな。」

モニターには右往左往するモンスター達が映る。

「あそこで慌てているヤツらがプレイヤーか、それとも 恐慌状態になった唯のモンスターか？」

ちらりと画面のひとつ、 VOICE というタグのついた物に目を向ける。

そこには白い画面にいくつものフキダシが泡のようにポコポコと湧いており、『火を消せえ！』だの『援軍は来ねえのか！？』だの『足が、俺の足があ！？』だのいろいろな台詞が書かれている。

次々に浮かぶそれらを眺めながら、顎に細い指をあてて少し考え、出した結論は

「ま、全部潰しゃいっか。」

ゴリ押しだった。

「何はともあれ、お次はいよいよメインのAC部隊と歩兵部隊を投下すっかな!」

ルリは流れるような動作でレバーを引いたりスイッチを押したり。

「ようし、AC部隊『ドーベルマン』一部投下、続いて第一から第四突撃部隊投下つと。」

.....

地面に足を凍りつかされ、動けなくなった運の悪いゴブリンは、足を剥がそうと躍起になっていた。

麻痺してしまったのか、さっきまでビリビリと痺れるような痛みも今はない。

両手で自分の足首を掴んでぐいぐいと引っ張っている。

と、彼(?)は自分の二歩ぐらい前に空豆のような黒い点を見つけ

た。

その黒点はみるみるうちに大きくなり、
自分を覆ってからようやく何かが降ってきていることを理解し――

ぶちゅんっ!!

凄まじい地響きとともに城壁内に降り立ったのは黒と灰色の迷彩柄に肩にはナイフを口にくわえた犬を模したエンブレム、ゴツゴツした、鋼鉄の四脚型AC。

10メートルほどのその巨体は、それに見合った大きさのマシンガンを構え、城壁の上にクイツと向けた。

戦車を二秒で鉄屑に変える銃口が火を吹いた。

.....

ACとは、とある世界で運用されていた、後に純科学産SRとして分類された汎用機動兵器のことである。

ACに乗り込む者達は“レイヴン”と呼ばれ、傭兵として合法、非合法にかかわらず様々な依頼をこなす。

“混ざった”あの日からは企業だけでなく国や政府の依頼も受け、謎の巨大生命体やら宇宙からの侵略やら悪の巨大ロボットやらの相手を他のSR乗りとするのだが、彼らが自分から（つまりは正義感とかで）協力するのは非常に稀なため、あまり快くは思われていない。

機体の制御が非常に難しく、搭乗者の体に負荷をかけるような作りだが、その代わり機動性に優れ、火力にも定評がある。

それが凍った地面を踏み割りながら、ついでのように動けないモンスター達を赤い地面のシミにしていく。

その間も休むことなく弾丸の嵐は吹き荒れ、巻き込まれたモンスターは風船のように弾け飛び、城壁は爆散していく。

ゆっくりと旋回しながら撃ちまくり、城内にある建物には肩からミサイルを発射し、舐めるように蹂躪していく。

「まったく総司令の用心深さは凄まじいぜ。」

カメラに映るのは火の海に、あつてないような抵抗をするモンスター達。

「こんな楽な仕事俺一人で十分だつてのになあハハハ！」

そのとき、好き勝手に城内を蹂躪していた四脚ACの後ろの空間がユラリと動いた。

透明で向こう側が見えてはいるが微妙に空間が歪み、ずんぐりむっくりとした不格好な人型の輪郭がゆっくりとACの後ろにまわる。

20メートルぐらいの輪郭は太い柱のような右腕を振り上げ勢いつけて振り下ろす！！

ガツンッ！！

四脚が軋みを挙げ一撃で虫のように地面へと叩きつけられる！

攻撃したことにより隠匿系魔法が解け、透明な巨人に色がつく。茶色く、樽の体に樽で手足を付けたような姿。鏡餅の二段目のような頭にぽっかりと目と口と思われる空洞が空いている。

ゴーレムだ。

そのまま連撃を繰り返そうと腕を引き、

『お前みたいなマヌケでも助かるように作戦を組んでくださっているんだよ。』

唐突にゴーレムが爆散した。
縦向きに潰れていくかのように四散した。

「・・・チツ、余計なことしやがって・・・」

四脚は頭部のカメラを上に向ける。
遙か上空、『モンストロ』底部に自分が投下されてきたハッチが空
いている。

そこに開いたハッチの縁に四脚を引っかけ、体を固定し狙撃銃を構
えるＡＣがいた。

回線から女の声が入る。

『やれやれ総司令殿もお前みたいなマヌケにまで気をかけなくても
いいのに。』

「何か言ったか第二世代。」

『言ってやったさ第一世代？』

『やめろ。』

またも回線に別の声が割り込む。

城壁が外から吹き飛び、もうもうと上がる土煙の中からゆっくりと
もう一機のＡＣが姿を現す。

右手にでかい銃口のハンドガン、肩には細身だが高威力のグレネー
ドキャノンにでかいミサイルポッド、左手には火炎放射機。

そして全てを轢き潰す無限軌道の脚部。

「隊長……。」

『Dα01二等、Dβ01二等、今は作戦行動中だ。いくら余裕のある相手とはいえ油断はするな。この城にSR兵器が無いと決まった訳ではないのだからな。』

言いつつも城壁の中にあつた通路に火炎放射機を差し込み、内部に炎を流し込んでいく。

「……了解。っと、うわぁ……容赦ねえ。」

隊長と呼ばれたキャタピラは、淡々と城壁をただの瓦礫に変えていく。

そしてふと空を見上げると、鋼線が下りてきた。さらにそこを伝って兵士がスルスルと下りてくる。

周りを見渡せば焼け野原に死屍累々。

「……もつやることねえよなあ。」

『サボるなマヌケ。』

チューン、と四脚の体を上からの狙撃が掠めた。

城壁制圧中だぜ！！（後書き）

えー今回暴走したかもしれない。

でも好きなんだからしかたない。

ラストレイヴンの難しさは異常。だが好き。

でもこれはあくまでラヴとルリの恋愛物語でSRメインのお話ではないのです。

城壁制圧完了だぜ！！に愛をこめて（前書き）

超展開　な部分は無視してくださって結構です。

マジで意味ないんで。

城壁制圧完了だぜ！！に愛をこめて

「ギャハハハハハ！！見ろ！人がゴミだ！！」

ルリはキーボードをバンバン叩きながら爆笑する。

画面には焼け野原に逃げ回るモンスター、追いかける兵士たち。

正に虐殺だ。

それを見ながらルリは笑い転げる。

そして、

「・・・あーツマンネ。」

いきなり部屋の空気が凍った。

「超ツマンネエ、カス過ぎんだろ。」

その声はゾツとするほど冷たく、仮面の奥の瞳は道端の石でも見るかのよう。

（相変わらず無意味で無価値で無意義なカスどもです。あまりにも弱いし、動きも単調。防衛の仕方わからないのですか。もし“プレイヤー”はいなかった”なんて言い訳する気ならなおさらガッカリです。城内なら安全だとも？自爆特攻が効くってことは破壊不能オブジェではないということでしょう？殺ろうと思えばこの艦を降

るすだけでもいいんですよ？彼我の戦力差もわからないですか？残された道は降伏、撤退の二択しかないとなぜわからないのでしょうか？

「・・・あゝやっぱ戦争するなら『ラグナロク』の旦那がよかったぜ。さ、ラヴの悔しがる顔を見に行くか、ギャハハハ。」

彼女は、またも唐突に雰囲気に戻し、ケタケタと笑いながらコックピットから出ていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

さて、今日は俺の話を少ししよう。

俺はある武術道場の跡取り娘として生まれた。

そこは最強の戦士を造るという妄執に囚われたカスの巣窟だ。

そうは言っても幼少の頃からの地獄の訓練と、妖怪やら荒神やら凶悪犯罪者やらの処分とかで、それなりに修羅場をくぐったことがある。

おかげで野生の勘的なものが鍛えられた。

それにまあ、言ってしまうえば俺天才だし。ぶっちゃけリアルでも俺ビルくらい真っ二つにできるし。てか一人で中級神くらい殺せる

し。

つまりジジイの妄想は既に叶ってるのさ。気づいてないがね。

まあそれは好都合。ジジイは正義の味方（笑）側だからな。いづれラヴの——月光つきひの邪魔になる。だからその時こそ、ジジイを、あのカスどもを踏み潰す。ククク、今から楽しみだ。

おっと、話が逸れたな。

まあ俺の隠れたムダ設定だ。日の目を見ることなんかねえよ。

長々と語ったが、つまり結局何が言いたいのかというのだ。

この扉を

開　　け　　た　　く　　ね　　え　　！！

ルリの前には内から外に爆発したかのような丸い穴の空いた扉がある。

その穴から中の惨劇がチラ見できる。

なんだこの嫌な予感！？思わずアツチの世界に行きかけたぜ！？この扉を開けたら確実にヤバい！何かわからないけど何かされる気がする！！

俺は別にルール違反してないよな！？アイツにお仕置きだべえ、な目に合わされる覚えはねえぜ！？

・・・いやいや落ち着けオレ。俺はルール違反はしてない。だから攻撃されない。次に俺の防御力は絶対。不意打ちさえ気を付ければ

“防御”できる。

さっと中に入り、攻撃を防いで、こちらの正当性を主張する。アイツはアレで結構説得が効く。畳み掛ければなんとかなる！

覚悟を決め、いざ中に入らんと一歩足を踏み出し――

「あ？！おかえりなさい？」

至って普通に挨拶された。

「お、おう。ちゃんと言われた通りに制圧してきたぜ。」

「フッフ、さすがルリ、いい子ですね！頭を撫でてあげます？」

「お、おいよせよ！」

そうはいいながらもルリはまんざらでもないのか、されるがままに仮面を剥がされ、頭をナデナデされた。

先程の嫌な予感の気のせいかな？

そう思っていると、

「じゃ、」
「褒美です？」

そうきたか!!

「て、　てもゴアっ!？」

スキルを発動させる前に口の中に手を突っ込まれ、指が舌に絡みつく。

コイツ指細いよなあなんて場違いなことを思いながら、着物の袖からデザートイーグルを取り出し^{フシユッ}それを取り落とす。

「ひゃえ？」

体から力が抜ける。カクンと膝から崩れ落ち、ラヴに受け止められる。

ガシャンと銃の落ちる音が耳に響く。

「あ・・・っ・・・」

声がでない。いや顎や舌からも力が抜けているのだ。

ラヴは相変わらず無邪気な笑顔で　。

「さっすがキャッシュュが持ってくる薬は効果が違うなあ。こんな速効性なんて。」

その手に握られているのは空の注射器。

（麻痺系の毒か！くそつ、動けよこのお！！）

わずかに動く体でのろのろと懐の状態回復ポーションに手を伸ばす。

が、それをラヴはぺしっと払い、さっさと回復薬を抜いてしまった。

動かない口で説得を試みる。

「・・・つか・・・う・？」

「ん？なぜこんなことをって？んゝ、君が大好きだから？」

なるほど、話を通じない。どこの世界に恋人に薬をもるやつがい・
・ここにいるな。

脱出は・・・無理っぽい。

「ていうかね、ぶっちゃけ僕限界なんです。オモチャはすぐ壊れたし君とのHは邪魔されるし二人はすぐダウンするし君はカッコいいし可愛いしイケテルし犯したいし。」

あ、やばい。目がイッちゃってる。

目だけがぐるぐると濁り、腹の中の欲望が覗けるような、むしろ欲望そのものがこつちを視ているような。

「これだけオアズケ食らったらもう我慢できませんよあ？」

ギィと無邪気な笑顔を歪めて彼は嗤う。

ひよいとお姫様だっこされる。

そのままコツコツと足音を響かせて、ルリを抱いてブリッジの外へ。

その間ルリは、

（脱出、無理。反撃、したくない。防御、する意味がない。．．．ハア、もういつかあ。何だかんだ言って、その、俺も、嫌いじゃねえし。）

ぐったりとしたまま、少し熱っぽい目をラヴに向けていた。

ラヴとルリは完全に二人の世界に行ってしまった、その間黒蟻とフロストは忘れられていた。

．．．．．

ここはどっかの城。で、玉座の間。の、玉座前の広いこの床。

スクリーンセーバーがブチっと消える。

黒蟻が首をかしげる。

「ん？ 続き無いん？」

「ねえよボケ！！」

「あ？、見ます？」

「見せるなよ？」

ゴリツとラヴの頭にリボルバーを突き付けるルリ。

「え、えへへ（汗）」

「てかよお・・・アレ、いいのか？」

ルリはそう言いながらもう片方の腕でP99を連射し、這って移動していた黄金の髪の少女を撃ち抜いた。

「っ！！あ、あああああ！！！！」

綺麗に両手足を撃ち抜かれ悲鳴を上げる少女。

「あ？、意識を取り戻したんですね！よかった！！」

ラヴがホッとした顔で彼女に近づく。

「ひっ！！」

だらだらと血を流す手足を引きずり、必死に距離を取ろうとする少女。

そんな彼女にラヴはつかつかと近づき、スツとしゃがんで目線を合わせる。

優しく微笑み、そつと乱れた黄金の髪を持ち上げ、耳にかける。

だが少女はガタガタと震えながらその腕を見る。
一瞬でも目を離せば何かをされると恐怖する。

「あゝあ、逃げようとしてたから折れてねえのかと思ったのに、ツマンネエ。」

「そら無理やで、あそこまで酷い・・・てか惨いことされたんや。ブチ折れとるやろ。」

「しかしあそこまで啖呵を切ってたの二、呆気ないものダ。俺でももう少し抵抗したゾ。」

「だからそれは言ったんって。少なくとも逃げる気概は残ってたんやろ?」

「ハイハイ、みんな酷いこと言わない!彼女が怯えてるでしょう?」
軽く手を叩き注目を集めるラヴ。

「それよりみんな、スクリーンセーバー出して!最後の確認するよ!」

そついうとラヴはひょいと少女を、脇の下に手を入れて持ち上げ、玉座の前に連れてきて、自分の膝の上に座らせた。

やれやれと三人が準備を始める。

震える少女に優しく、安心させるように、耳元でラヴは囁く。

「さあ、君の仲間がいかにも勇敢に戦ったか、一緒に見ましようか？
・・魔王様？」

・・・・・

ここは城。
の地獄と化した城壁内部。
の城の大扉の前。

空から『ラヴァーズ』の面々が降りてくる。

踵から轟々と青白い炎を噴出しながらゆっくりと降りてくる黒蟻。
その顔一（といっても顔の下半分だが）はどこか憔悴しているように見える。

「あゝ死ぬかと思たで。」

ドオオン！！と明らかに異常なほどの音を出して地面に落下したのはDr・フロスト。

陥没してクレーター化したところから普通に歩いて出てきた彼は、
どこことなくグツタリしている。

「死ぬかと思っタ。」

着物の両袖から飛び出した太いジェットブースターでバランスを取りながら降下するルリ。

スタンと地に降りるとガシヨンとひっこめる。と、少したたらを踏んだ。すこしやつれたような雰囲気は気のせいではないだろう。

「・・・死にかけた。」

「~~~~~~~~」

適当な、行き当たりばったりな鼻歌をあげながら、漆黒の翼を広げて降り立つラヴ。

すぐく・・・ツヤツヤしてます・・・。

「死ぬかと思っタ？」

「「嘘つけ（ケ）！！」」

三人が即効突っ込みを入れる。

対してラヴはキョトン？とした顔をしている。

「・・・テメエは・・・もういつかれた。」

「突かれた？」

「殺す！！」

「おや？続きのお誘いですか？」

「ッ！……ッ！……ッ！……ッ！」

「俺何で生きとんかわからへん……。」「

「俺もダ。あの野郎、ご丁寧なことに爆弾に貫通針仕込んでタ。」

「まあまあ皆さん過ぎたことは忘れてwww」

「……」。」「」

パンパンと手を叩き、話題を変えるラヴに呆れ諦め達観した三人。

「さ、フロスト。頼んだよ？」

いつも通り無邪気な笑顔のルリに対し、

「……まあいい、任せ口。」

フロストは重厚な黒鉄の扉に近付くと、左手をトンと数秒間当て、腰を捻り右手を振りかぶってガシャアン！！と扉を叩き割った。

超低温によって冷やされ、脆くなった鉄はガラスのように碎け散りガラガラと音を立てて崩れていく。

「脆い扉だナ。」

「さっすがフロスト、いい仕事してますね！」

「お！ラヴ、お出迎えだぜ！！」

扉の中には隊列を組み、大きく反った三日月刀と体を覆えるほど大きな丸盾を構えたりザードマン達が目の前の光景に啞然としている。ラヴァーズの面々は知らなかったが、この扉も魔法によって強化され、呪いまでかけられていたのだ。

それかあっさりと破壊され、今まさに敵が侵入しようとしている。

と、ここまで至った彼らは正気を取り戻し、

「「「「シャアアアアアアアアア！！！」」」」

一斉に飛び出してきた。

それを見ながらラヴァーズの面々は、

「ふム、SRを喚ぶのは後にするか。」

「とりあえず突っ込むで？全部切り裂いてええやんなあ？」

「俺の射線に入らなけりやな。」

「私のナイフにもね？」

「当てへん努力は？」

「当たらない努力をして？」

「当てる努力はしてやるぜ？」

「・・・流れ手裏剣に気いつけや。」

「おい来たゾ。」

言うや否やフロストは手近のリザードマンをぶん殴り、何十メートルもぶっ飛ばし、その線路上の敵も巻き込みながら壁に叩きつけた。

しかもその拳圧の余波で氷の道ができる。

「相変わらず滅茶苦茶ですねえ。それ、種族スキルだけでしょっ？」

「『狂科学者』は生産職だゾ、当然だろう。」

「サブスキルは？」

「サブスキルも全部生産系ダ。」

二人の会話の隙を突いて周り混んできたリザードマンが丸盾で体ご

と突進をかます。

そのまま何もない空間に消えていった。

一瞬の空白の後、リザードマンが消えた辺りの空間からダラダラと血が流れ出した。

「一名様ごあんない？」

「相変わらず無駄にエグいな。一体どれだけ張ってるんだ？巻き込まれてはたまらん。」

「んゝ、たくさん？あ、大丈夫！開閉は私の自在だから。」

「ならいい。ム、もう我々の出番は無いナ。」

「え？あつホントですね。」

二人の視線の先には、両袖からギツチリと、まるで銃の花束のようになったでできたなモノを振り回し、竜巻のように暴れまわるルリと、身体中から刃物を生やし、斬り上げ斬りつけ斬り下ろし、一太刀で真つ二つになった敵もわざわざバラバラにして、存分にはしゃぎまわる黒蟻の姿。

「うふふ、楽しそうですね。」

「この間にSRを喚んでおこウ。」

そう言うとフロストは左手首に嵌めた腕輪型の端末にスイッチを入れた。

「来イ！テンパランス？！！」

。。。。

・ ・ ・ ・ ・。

・ ・ ・ ・ ・。

・ ・ ・ ・ ・。

「・・・長いですね。」

「『モンストロ』が巨大すぎるのだ。」

と、反重力装置の特徴的な、反響するような駆動音が聞こえてくる。

ルルルルル・・・。

5メートルくらいの白い立方体が小さな立方体をいくつも従えて飛んでくる。

白磁のような色合いの20?くらいの立方体（小）がいくつも、何十と重なり、形を造り上げ、立方体（大）に合体していく。

ゴツゴツした両腕、ゴツゴツした八本の触手脚。根元は太く、先は細く（先端は四角）。

そして最後に立方体（小）が八つ重なってできた立方体（中）が立方体（大）の上にゆっくりと接続される。

「なんか・・・パツとしないですね。」

「ククク、まあ見てい口。ハッチ・オープン。」

フロストが手首の端末を操作すると立方体（大）の前面がパクッと裂ける。

中は真っ暗だったが、フロストは特に気にすることなく飛び込む。フロストを飲み込むと裂けた穴は閉じ、跡も残らなかった。

一拍置いて機体がブルリと震えると、頭部が変型した。

内側から重なった四つの立方体（小）が四隅に向かって裏返り、押し退けるように赤いモノアイが中央に現れた。

同時進行で身体中が変形していく。

ゴツゴツしたところは角が取れ滑らかに丸く。触手の先端の平面は盛り上るように鋭く。ぎこちなかった触手の動きは滑らかに。

パイロットによって命を吹き込まれた姿がそこにあった。

テンパランス？の拡声器からフロストの声が聞こえる。

『フハハハハハ！見口！パイロットの搭乗による常識を超えた変形！これぞまさにSRの醍醐味！おっと浪漫だけじゃないゾ！装甲は俺の錬金術 スキルによる『38式合金』デ、衝撃に強く特に耐熱性に優れているシ、操作は精神感應式！』

精神感應式とはイメージで動かすということだ。操作性は格段に上がる、というかどんなバカでも操作できるが、その代わりに機体のダメージが最低60%

フィードバックする。

ようはメチャクチャ痛い。

頭とか潰されたらショックで死ぬ、イメージの反映性能がいいほどフィードバックも上がるからなお死ぬ。

「前回のテンパランス（節制）は出来る限りの経費削減がコンセプトでしたが今回はなんですか？」

『今回も同じダ。』

「では何を削ったんです？」

『塗装費ダ。』

「・・・そうですか。」

『装備も充実しているゾ！試し二・・・ム？敵はどこダ？』

「君が興奮している間に全滅しましたよ。ルリも黒蟻も中に入っちゃいましたし。」

ラヴが呆れたように肩をすくめる。

『やれやれ、空気の読めん奴等ダ。では俺もコイツのテストに行ってくる。』

そういうとテンパランスはズルズルと蛸足を蠢かして破壊された城門から中に入っていた。

そして誰もいなくなり、静かになった空気の中、悲鳴のような風が吹く。

ラヴはその場に一人佇む。

咳き込むような硝煙の薫り、むせかえるような血の匂い、目に鮮やかな紅と死体のコントラスト。

それらを眺め、ふんわりと笑うと、ゆっくり歩いて城の中に入っていた。

鼻歌が遠くに聞こえた。

城壁制圧完了だぜ!!に愛をこめて(後書き)

あと二話くらいで回想編終了です!!

な、長かった・・・。

これが俺の種族デ、これが俺の種族やから、これが俺の種族だぜ！（前書き）

やっとできたあ！！

いろいろ忙しかったですがやっと投稿できます！

で、この小説を読む前に三つほど。

- 1、この小説は『主人公最強もの』である
- 2、しかし、無敵のキャラは一人もない
- 3、主人公たちのなかに多重人格者はいない

という感じです。

楽しんで頂けたら嬉しいです。

これが俺の種族デ、これが俺の種族やから、これが俺の種族だぜ！

ここは城。

の地獄と化した城壁内部。
の城の大扉の中。

「あれ？」

「ふうん？」

「あ、やっぱり。」

ラヴは破壊された城の大扉を出たり入ったりしてしきりに首を傾げ、
三回目で確信に至ってばむ、と手を打った。

「大きさがデタラメだ。」

この城の入り口は少し前に突き出ており、学校の教室を縦横奥に二
個づつ重ねたような大きさだったのに、扉をくぐると、くぐった所
から既に大ホールだった。

上を見ても左右を見渡しても、どう考えても縮尺が合わない。

「んー、これもホルテクの恩恵でしょうかね。」

そう呟いてラヴは歩き始めた。

自分の獲物を探すために。

右を向けば何かが這って行った跡。左を向けば血の絨毯。前を向い

たら風穴だらけの階段。

「順当に考えて、僕は階段かな？かわいい娘がいたらいいな？」

そう言って階段を上っていく。

.....

一方その頃、

歯車に覆われたヘルメットのような仮面を被った白衣の似合う青年、
Dr・フロスト。

彼は今困惑していた。

というより不思議がっていた。

「いったい何がどうしてこうなっタ？」

過去を振り返ってみてもさっぱりわからない。

実に奇妙で不思議である。

彼の視線はあるモノを見ていた。

グツシャグシャになり、脚もいくつか千切れ、紅いモノアイが割れている、無残なテンパランス？に。

「・・・まあいい。失敗は成功に付き物だ。それにやはり精神感應式とかいうあやふやなモノなど信用できん。これからも手動式を造るウ。」

そう呟くと、興味を無くしたのか、さっさと行ってしまふ。

コツ、コツ、とレッドカーペットの敷かれた大理石の床を歩く。

廊下の両脇に等間隔で燭台が並び、薄暗く周りを照らしている。

「ム？ボス部屋力？」

廊下の先に一際大きな燭台が二つ、轟々と燃え盛る蠟燭を刺している。

にも関わらず、蠟燭は少しも短くならない。

その間に巨大な扉がある。

その前に立ったフロストはポキポキと拳を鳴らし、

「で八、派手に登場ダ。」

ゆっくりと扉に手を当て、しばらくしてからノックするように軽くコンツと叩く。

大きな扉を粉碎して中に入ると、そこには初老の男が一人、たたずんでいた。

使い込まれた鎧を着、幅広の剣を大理石の床に突き刺して柄に組んだ手を置いているその姿は、一種の絵画のような、荘厳な空気を纏っている。

男がゆっくりと眼を開く。

「……僕は六魔将が一人、ゼファー・ドラルル。僕の息子達を引き裂いたものは何処に居る？」

「息子だト？……悪いが殺した相手が多すぎてわからんナ。」

「……若い二匹の黒龍だ。二匹とも先の戦いで死んだ。」

「黒蟻が殺した奴らのことか？……黒蟻なら血の跡を辿れば見つかるゾ。」

.....

「なんつで！鎧！ばつかやねん！！」

言いながら周りを囲む鎧たちを手にした紅く煌めく刀で真つ二つに
していく。刃渡り二メートルにも及ぶそれを片手で器用に回転させ
ている。

・・・もとい、回転している。

手首から先がグルングルン回転している！！

「うつとお、しい！！」

今度は指先からレーザーブレード、肩からは鉛筆のような大きさの
小型ミサイルを発射する。

『生物兵器』。

黒蟻の種族である。

基本種族をサイボーグ化することが条件の種族『機械人』。そこか
らさらに派生する特殊上級種族だ。

特殊ゝ種族とは今のところ派生条件がはっきりしていない、という
意味だ。ちなみにラヴの『堕天使』も特殊上級種族である。という
か『ラヴァーズ』はメンバー全員が特殊上級種族である。

そんな特殊上級種族『生物兵器』とは、その何らかの条件を満たし、転生クエスト『如月研究施設襲撃』と『生物兵器設計図強奪』をクリアするとされる。

機械系種族と同様に>改造<スキルで様々な武器を体に仕込め（ちなみに>ステルス<機能もこれにあたる）、さらに他に類を見ないほど体を滑らかに、自在に体を動かせる。

黒蟻はその様々な兵器を使い囲みを崩そうとする。

それでも鎧たちは次から次へとわらわら湧いてくる。

（失敗やった！！でかい鎧やからさぞたくさん噴き出すやろと襲ったんが安易やった！！）

実際は後ろから真つ二つにしても血どころか空気も出ない空洞で、どこにいたのかという量の鎧にあつという間に囲まれた。

どこの城にも並べられてるような普通の鎧が、別に魔法とか撃ってくる訳でもないただの鎧が、マ。リックスのように集まってくるのだ！！

「>ステルス<！！」

黒蟻が空気に溶け込むように消える。

と、ソコめがけて津波のように鎧達が覆いかぶさり、突撃し、タッ

クルをかます。

中心にいる鎧が踏みつぶされても構わず突っ込み、沈黙とともに積み重なっていく。

もはやうごめく小山となり天井に届きそうだ。

(・・・おお、コワ。)

そんな不気味な光景を天井から眺める黒蟻。

天井にペツタリと張り付き、ワツシャワツシャとその場を後にした。

そこ、ゴキブリみたいと言わない。

.....

「・・・ふむ、ここは狭いな。場所を変えよう。ついてこい。」

「ほう、いいの力？狭いここならお前にも勝機はあるかもしれんゾ？」

「いや、私自身、広いほうがいいのでね。」

そのままフロストの横を通り、破壊された扉からさっさと出て行ってしまう。剣は床に刺さったままだ。

フロストも後をついていく。

「あの大剣はいいの力？」

「あれは飾りだ。」

振り向くことなく答える。

やがてまたも大きな扉の前につく。

扉の両脇には悪魔の翼と鳥のような顔をしたガーゴイルが松明を掲げ持っている。

ゼファーが扉の前に立つと、ガーゴイルが松明から片手を離し取っ手を掴む。

ガリガリという石を引きずる音とともに扉を開いていく。

そこは闘技場だった。

すり鉢状の客席に天井はかなり高く、周りを囲う壁も高い。必然、客席もかなり高いところから見下ろすことになる。

しかしその客席にはだれもおらず、だが不思議と身の引き締まる静けさがあつた。

「ここなら誰にも邪魔されまい。」

「ふム、それデ？素手でこの俺を相手取るつもりカ？」

「ああ、その通り、だ……。」

一瞬。

瞬きにも満たない時間。ゼファアの体がぶれ――

グオン！！

と巨大化した。

全身に漆黒の鱗が生え、首筋にたてがみが生える。顔は鰐のように尖り、鋭い一角が額から飛び出す。背中からは蝙蝠の翼が生える。

爪は黒曜石のナイフ、すべてを噛み千切る牙を持ち目は血のように

燃えている。

「ホウ・・・ブラックドラゴンkpr」

きりもみしながらフロストは宙を舞う。

ゼファアのトラック並みの足に蹴り飛ばされて。

闘技場の壁に激突し、めり込んでいく。

「キ、貴様ア・・・はなs」

目が合う。

壁にめり込んだフロストの目の前に黒龍の顔がある。

その鰐のような口がパカリと開くとゼファアの口の中にギュンギュンと闇のエネルギーの塊ができ、閃光となって解放される。

かつて人間の軍隊を壊滅させた一撃が集束し、ただ一点、フロストのみを貫くように襲い掛かる。

「ぐ、おおおおお!!」

5秒、4秒、3秒、2秒、1秒。

それだけ放つとゼファアは羽を拡げてフワリと後ろに下がる。

(・・・おそらく殺っておるまい。プレッシャーが消えておらん。)

メチャクチャに破碎され、壁にいくつも走った罅から茶色い液体が勢いよく、血のように噴き出す。

ブシューブシュー、

ブシューブシュー、

ブシューブシューブシューブシュー、

ブシューブシューブシューブシューブシューブシュー、

ブシューブシューブシューブシューブシューブシューブシューブシュー
ブシューブシューブシューブシューブシューブシューブシューブシュー
ブシューブシューブシューブシューブシューブシューブシューブシュー、

「……出過ぎではないか？」

ドラゴン形態をとったゼファーは優に30メートルを超える。
にもかかわらずもう膝くらいまで茶色い液体に浸されている。
明らかにあの小さな（注・ドラゴンから見たサイズで）男の容積を
超えている。

バゴンッ！！

と、何かが割れるような音に顔を上げると、フロストが突っ込んだ穴の上、客席の一部が上に吹き飛ぶ。

新たに空いた穴の淵に手を掛け、ゆっくりとフロストが這い出てくる。

純白の白衣は見るも無残に茶色だ。

歯車の仮面はいくつも罅が入り、いくつか欠けている。

いや、ぼろぼろと歯車が落下し、崩れ、隠されていた素顔を晒す。

現れた顔は、非常に整っており、伶俐な美貌をたたえている。歯車に覆われていた髪は月光のように輝く銀髪。

だが最も目立つ特徴は鋭く尖った耳だ。

「・・・エルフか。それもダークエルフ。」

ゼファーは少し驚いたように呟く。

同盟関係にあるダークエルフが相手だったこともだが、たかがエルフが自分の連撃に耐えきったことがさらに驚きだ。

フロストはゆっくり客席の上に立ち、大きく、そしてまたゆっくりと息をついた。

その視線はゼファーを、というより中空を漂っている。

「・・・フー・・・ハー・・・。・・・痛かった。それなりにだが痛かったゾ。」

ボンヤリと立ったままのフロストだったが、ゼファーはそれに何か異様な雰囲気を感じた。

「・・・・・・・・マ、ボスの拷問よりはマシだな。・・・それに残念ながらレベルが足りなすぎるらしい。それでは俺は殺せんヨ。」

と、苦笑するように肩をすくめる。

「・・・だがこれはひどくない力？」

そう言っただけで割れたフラスコを取り出すフロスト。

それは奇妙な光景だった。

下半分が無惨に割れ、そこからジャバジャバと茶色の液体が流れ落ち続けている。

流れ落ちた液体は客席を満たし、溢れ、リング内に伝っていく。

「鯨飲フラスコが割れてしまっタ。おかげで俺の白衣もすっかりコ―ヒー色ダ。」

スイツと視線がゼファーに向く。

「・・・つまりこれはアレカ？俺に白は似合わないト？ダークエルフが白を着てはいけないト？エルフがゲームしてたらおかしいの力？魔法得意な一族が科学者目指しちやいけないって力！！？」

突然、何の前触れもなくキレた。

「・・・何を言っておるのだ？」

「つとぼけてんじやねえぞクソボケガア！！！！だいたいよくも俺の口上を邪魔してくれやがったナア、アゝア！！？普通攻撃しねえだ口！！？それともアレカ！？俺の話なんざ聞く価値もねえクソだつて力！！！！？チクシヨウコケにしてくれやがったテ！！！！ゼツテエ許さソ！！アゝ俺の白衣汚しやがったこと！あれだけ痛い目に合わせてくれたこと！！そして何より俺の邪魔をしやがったこと！！！！まとめテ、ブチ込んで、ブツ殺してやル！！！！！」

と、またも突然、フロストの服が燃え上がった。

轟々と燃え上がる。

轟々と燃え上がっているのだがフロストは気にすることもない「暑い
イイイイイイ！！！！」・・・もとい、気にしてた。

「暑い暑い暑い暑い暑い暑い暑いアツイアツイアーーー
イイイイイイ！！！！！！！！クソガアッ！！暑くてアツくて仕方
ない！！誰のせいだこんなに暑いハ！！！！って俺のせいだドチク
シヨウガ！！！！クソツクソツ、アゝアアアアア！！もうい
！！！！全部、全部ぜんぶゼンブ、ぶっ殺して、ブツ壊して、焼き払

つてやルアゝアゝアアアアアアア！！！！！」

全身から火を、炎を、焰を立ち上げて叫ぶ姿はいつそ狂気を感じる。

だがゼファ―はまたもその光景に何らかの違和感を感じた。

今度はその正体がすぐに分かる。

沸騰しているのだ。

周りの、足元の、未だジャバジャバと流れ続けるフラスコの、それら全ての茶色い液体が沸騰しボコボコと泡立っているのだ！！

同時にフロストの姿が一瞬ブレてシュンツ！と黒い塊が大きくなり

化け物が現れた。

大きさはゼファ―より一回りほど大きい。

隼のように鋭い鳥の顔、だが嘴は凶悪なまでに牙が並ぶ。こめかみには悪魔のごとく捻じれた雄羊の角。五本の指は昆虫の脚みたくギザギザとしていて、爪先はまるで刀剣だ。

全身漆黒の羽根に包まれ、その上からでもわかる筋肉がうごめく。

やはり羽毛に覆われている太い尾がゆっくりと揺れている。

バサリと開いた闇夜の翼には星空のように白い斑点がある。

目は金色に光り、口からは黄金の光が漏れる。

さながら腹の中に太陽を飲み込んでいるようだ。

[illegible]

咆哮と同時に全身から放たれる熱。

闘技場を満たしたコーヒーはあつという間に蒸発し、石造りの客席がドロドロと融け、一部では蒸発さえしていく。

ドラゴンでもなければ存在すら許されない空間。

否、そのドラゴンであるゼファーですら少しずつ焼け始めている。

竜すら超える化け物と化したフロストは、ギリイツと闇夜の拳を握り込む。

そこを中心に膨大な熱が、
空氣が歪み近い地面が融けるほどの熱量
が集まる。

もはや小型の太陽だ。

一步、一步と歩く度に地面が煙を出し悲鳴を上げる。

ゼファアの目の前に来ると、そのまま脚を引き腰を、肩を、腕をギリギリとねじって――

.....

ドゴオオオオオオオオオオオオンンン！！！！！！

「……！　いつたい何の音だ！！」

城全体が揺れた。

城内に敵の侵入を許し、迎撃のために走り回る黒い豹。

その廊下いっぱいの巨体がブレ、猫耳尻尾の少女が現れた。・・・
一応言っておこう、全裸ではない。

六魔将が一人、ベルルーシカ。両手足が全て艶やかな短い黒毛に覆われていて、白いワンピースがよく似合っている。猫っぽい顔をしている、どこか幼さの残る顔はとても愛らしい。

「・・・嫌な予感がする。」

先ほど龍の咆哮が聞こえた。恐らくゼファー様だろう。
だが二度目のは？

駆けだそうとしたその時、不意に廊下の奥、曲がり角に誰かの気配を感じる。

「ッ！誰だ！！」

誰何の声をあげると、ソイツは、彼女は出てきた。

片腕がなく、額からも血を流し、壁に寄りかかるように立つ、満身創痍の女。

魔王軍六魔将が一人、エージェンヌだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「え、エージェンヌ様！！？ご無事だったのですか！？」

「うつ、クツ！ああお前か、無事でよかった。」

「エージェンヌ様、いったい何があつたのです！？こんな・・・ひどい傷を・・・」

悲痛な声をあげるベルだがエージェンヌは微かに笑い、

「なに、かすり傷だ。」

「片腕無いんですよ！？」

「そんなことより今は急いであの方に会わねばならない。敵の狙いや能力がわかつたのだ。」

「わかりました！ご案内します！！」

そう元気よく言うベルは、拳を握り全力でエージェンヌの顔面をぶん殴った。

「・・・地獄にな。」

殴られた勢いそのままに吹き飛ばされ壁に激突するエージェンヌ。

それを憎悪の視線で射殺さんばかりに睨みつけるベル

「……一瞬でもお前なんかをエージェンヌ様と間違えた自分が憎いよ。」

「グはア……！」

エージェンヌは血を吐きながらズルズルと床に落ちる。

倒れたままベルを見上げ、

「な、何故だ……私は味方「黙れよ。」なッ！」

獣人の優れた脚力に任せて床を蹴り、倒れ伏すエージェンヌ目掛けて拳を（どぶん、）全力で左に跳ぶ。

続けて床に伏せ廊下の右端まで転がり、寝転がった状態から更にバク宙でエージェンヌから大きく距離をとる。

わずか5秒にも満たない時間。その間にベルの動きを追って放たれた銃弾は1600発。

廊下の壁も床も穴だらけだ。

「……リロード、魔弾選択、ライティング・バレットレベル2、連射速度三倍 銃撃威力強化三倍 オートリロード
弾薬消費十分の一。」

リロード、アイテムボックス内の弾薬アイテムを対応する銃器に補充するスキルだ。

蒼白い光が集まり、四角い箱型の弾倉に弾がギツチリと詰められる。ガトリングガンから大量の薬莢が転がり出っていて、床は足の踏み場もない。

更にバチバチと蒼い電流が銃身を走り回る。

いつの間にか取り出した――否、手の平から直接生やしたガトリングガンで廊下を穴だらけにしたエージェン又は、いきなり姿がぐにやりと歪み、虹色に変色したかと思うと姿が変貌し始めた。

グネグネと脈動し、腕が生え、単髪から背中へ流れるような長髪へ、鎧から衣服へ、顔はツルリとしたのっぺらぼうへ。

腰には大小の刀が生え、デコと思われる箇所からつぷりと白い陶器のような少し湾曲した、先の尖ったモノが現れ、そのままぬるると生えたかと思うと、パタンと閉じ顔を覆った。

そこには三日月に笑った口とだらしなく下がった右目に深紅の十字を刻むターゲットサイトの左目。

グネグネとうねる体が静まり、極彩色に色がつく。

藍色の着物、艶やかなオールバックの黒髪、袖口からはガトリングガン。

「そんじゃま、改めちゃってえ自己紹介」

ガシャンツとガトリングガンを肩に担ぐと

「俺はPKギルド『ラヴァーズ』の一員にしてこれでも一応作戦参謀、ルリ。『歩く戦争』のルリだ!!」

威風堂々、見下すように名乗りを挙げた。

.....

距離を取って対峙する二人。

「んで？何でわかったんだ？」

ニヤニヤとした雰囲気でルリが問うと、

「・・・黒豹の獣人とはいえそこまで近づけば匂いでわかる。」

僅かに顔をしかめてベルが答える。

「におい〜?」

いつのまにこのゲームは個人を特定できるほど匂いがリアル化したのだろう。

いや確かにゾンビ的な種族に転生した奴はひどい、というかひどすぎる臭いを放つがそれでも——いや、自分が知らなかっただけで獣人系のプレイヤーはわかるのだろうか。

(てえことは聴覚も強化されてんのかね、知らねえけどよ。)

「へえ、まさかそんなもんで正体見破られるとはね。」

「・・・エーゲン又様をどうした。」

「あ?エーゲン又?さっきの顔の女か?」

「そうだ。」

「死んだよ。」

「ッ!・・・そうか。」

「滑稽な死に方だったぜえ?」

「・・・なんだと?」

「カスのくせにキャンキャン吠えて、最後はズツタボロのグツチャグチャになって死んだよ!超笑ったぜ!!ギヤハハハハ!!」

「貴様・・・殺してやる・・・!!」

「おつと来るか? いいぜ、別に。どうせここの奴ら皆殺しにすんだからよお・・・。テメエもとつと負けて死ね!!」

肩に掛けていたガトリングガンをベルに向け引き金を引く。

機械仕掛けの銃身が唸りをあげて回転し、薬莢が爆発して弾丸が発射され、放たれた鉛弾は六つの銃口それぞれに小さく展開された魔方陣を通り紫電へと変換されていく。

秒間400発もの雷光が一直線にベルの居たところを通りすぎた。

「・・・・・・・・あ?」

どこいった?

「どこを見ている。こっちだ! ドルグ・ダム　!!」

声のする方に銃口を向けると岩のボールをベルが大きく振りかぶって投げるところだった。ただし直径三メートルのボールを、壁に立つて、だ。

足の指を全部壁に食い込ませ、それによって壁に直立し、そこから腰をひねって片手で投げられた岩石は野球ボールのように真っ直ぐ飛んでくる。

（何も無いところからいきなり岩　ドルグ・ダム　未確認スキル、敵種族恐らく豹の獣人見ればわか変身、変装の可能性、解析・完了敵種族黒豹人確定、よって種族スキルではない未確認スキル↑危険、対応策接近を許さず破壊！）

この間わずかコンマ2秒。最善の作戦を立てソレを実行する。

「しゃらくせえぜ！！　デッドリーストーム　！！」

ルリの左袖からバズーカ砲がゴトンと滑り出て、岩石に向かってロケット弾を一回に五発も吐き出す。

スキルによつて明らかに装弾数を超える数のロケット弾を喰らい岩石は爆散する。

・・・大量の土煙と爆炎とそこから生じた黒煙とともに。

廊下は煙に覆われ、一寸先も見えない。

「っと、ミスったな。」

仮面から軽い調子の声を響かせながらバズーカ砲と入れ代わりにガトリングガンで掃射する。

紫紺の弾幕が次々に黒煙の中に飛び込み上下左右、床にも壁にも天井にも当たるように撃ちまくる！！

「下手な鉄砲、数撃ちや当たったかあ？ カートリッジ 変更、ウインド・ブラストバレット レベル1。」

鉄の銃身に風が絡みつき、そのまま床に向けて引き金を引くと、着弾点に小規模の暴風が巻き起こり黒煙を吹き飛ばした。

煙が晴れると、床も壁も天井も等しく抉り回され無残になった廊下だけ（・・・）が。

そして耳に入る風切り音。

「お前の敗因は、あの方を侮辱し私を怒らせたことだ！！」

豹の腕に剣のような爪を生やしルリの真上——天井から飛びかかる！！

寸前で顔を上げたルリが慌てて銃口を上に向かそうとするが時既に遅し。

輝く白刃がその身を引き裂く。

「がッ・・・はぁ・・・。」

血を吐きながら彼女は膝をつく。

信じられない。

彼女の顔はそう言っていた。

胸から血が、力が抜けていく。床についた手が霞む。

そしてそんな彼女の頭にゴリツと銃口が突きつけられた。

「テメエの敗因はいくつもあるぜ？まず最初に俺の種族を見抜けなかったことからだ。」

ルリが仮面の奥でニヤニヤと笑う。

肩から銃剣のついた突撃銃を生やして！！

「おかしいと思わなかったか？最初の変身も、袖からバズーカが出るのも。」

そう言つて銃口をベルの頭からどけ、手を広げる。

その姿が一瞬虹色に輝き、また元通りになる。

「>ジュエル・スライム<。その種族スキル>四次元体質<つてな。」

『ジュエルスライム』

不定形種族最強のモンスターにして神族をのぞいて最も堅いスライム。

正体は西洋系のゲル的なスライムだが、その全身が煌めく液体宝石でできている。

魔法完全吸収　打撃系攻撃完全無効　などが常時発動し、さらに　防御　すれば斬撃、刺突系攻撃にも　超耐性　が付く。
まさに無敵のスライムである。

『種族スキル』

現在成っているジョブに固定される>メインスキル<、過去成っていたジョブのスキルを任意で設定できる>サブ・サポートスキル<。そしてそれとは別に現在成っている種族に固定される>種族スキル<。

普通、スキルはスキルはメイン一つ、サブ四つ、サポートが五つの計10種類までだが、種族が>人間<以外ならば>サブ・サポートスキル<の枠が一つ減り、代わりに>種族スキル<が入る。

これはプレイヤーが現在成っている種族に合わせて固定され、詠唱一（いちいち>スキル名<を言うこと）もメニュー操作もせずに発動できる。

その代わり、疲れる。派手な技ほどとてもとても疲れる。ゲームなので実際疲労しているわけではないが。

ようするにSPとか消費して楽々使うスキルに対して、本来人間に

無いような器官を無理に使うということだ。

しかもその使い方の説明もひどい。

例を挙げよう。

レベルが上がって種族スキルを一つ取得すると、メニューに運営からメールが来る。

差出人：運営

件名：種族スキル・>ファイアブレス<使用方法

・ゲロ吐く感じで

差出人：運営

件名：種族スキル・>獣化<使用方法

・根性？気分？だいたいそんな感じだよ、きっと。

差出人：運営

件名：種族スキル・>落雷<使用方法

・天気の良い日に自然を味方にした気分で行きましょう。

・・・・以上である。

ゆえに人によつては全く使えない死にスキルになる。

慣れればなんてことはないという廃人もいるにはいるが。

ヌルヌルと肩から生えた突撃銃を引つ込めながら、ぺらぺらと喋る
ルリ。

剣呑な雰囲気をもた崩さないベルルーシカはゆつくりと体の体制を
整える。

「次に俺の二つ名は歩く『戦争』。つまりな・・・」

蹲っていたベルが急に立ち上がり襲い掛かる！！

「銃撃戦に制圧戦に砲撃戦、狙撃爆撃奇襲強襲暗殺虐殺、そして
ちろん接近戦にと何でもござれなんだよ。」

掴み掛かろうとしたベルの腕を両袖から伸びた何本もの腕が、虹色
に光り輝く腕がガツシリと掴み返す。

「んで最後に、これが一番の理由だが・・・お前の耐久度^{レベル}じゃ俺の
攻撃力^{レベル}にどうやっても勝てねえんだよ！！」

ゆつくりと腕に力が入りベルの腕を握り潰していく。

「あぐツ！ぐうううううう！！！」

たちまち骨が軋みをあげ、激痛が走る。

苦し紛れに顎めがけて蹴りを放つ。柔らかい体を活かした岩をも砕く垂直蹴りが、顔を傾けるだけで避けられる。

背中や胸から生えたであろう腕が襟から飛び出し伸びきった脚を捕らえ締め上げる。

半身になったベルの腹の傷に膝を叩き込み、更に膝頭からナイフが生える。

「アギヤア！！ア、うああああああ！！！！！」

バキボキと腕が砕け、ベキンベキンとしなやかな脚がへし折られる。

腹に刺したナイフを膝でぐりぐりと押し込み、そのたびに響く悲鳴を聴きながら、ルリは楽しそうに、実に愉しそうに笑う。

「もっちゃん拷問も得意なんだぜ？ま、聞きたいことなんかねえけどな！ギャハハハハハハ！！おっと！」

突然パツとナイフを抜き、全部の腕を離す。

ベルは反射的に距離を取ろうともがくが、手足があり得ない方向に曲がっただけは意味がない。

ギラギラした目でベルはルリを睨み付けるが、ルリは人を小馬鹿にした雰囲気纏ったまま後ろに下がる。

「何の・・・つもりだ？」

激痛に汗を流しながらベルが聞くと、ニヤニヤした仮面を傾けなが

らルリが答えた。

「俺のジョブってさあ、『乱射魔』なんだよ。」

「・・・何を、言っている？」

「いやな？『乱射魔』には『拳銃使い』や『狙撃手』とは違う一風変わったスキルがあるんだぜ？」

「だから何を言って・・・」

その時、ベルの耳が奇妙な音をとらえた。

何かと何かがぶつかりあう音。

それは自分が来た廊下の奥から近づいてきている。

「最初の時はOFFにしていたが、その次のはONにして撃つんだ。今になってやっと帰って来やがった。」

廊下の奥に時折キラキラと光が、青紫の閃光が見える。

その閃光は近づくたびに十、二十と数を増やしながら床、壁、天井を縦横無尽に跳ね回る。

「400発分の 跳弾、プレゼントしてやるよ」

紫紺の流星群がベルを襲う。

咄嗟に折れた腕で体を庇うが一発が体に着弾すると同時にバチインッ！と弾けた。

「うあ！？」

「オイオイ、電撃系の耐性無しで防御を選ぶとか、死にてえの？・・
って、もう聞こえてねえか。」

そう言うトルリは、背を向けて歩き出す。

後ろからは断続的に悲鳴や誰かの名前を呼ぶ声が聞こえる。

その、徐々に途切れ途切れになる悲鳴を聴きながら、トルリは仮面の下を恍惚に歪め、大きく口を開けて嗤いだした。

「ギャハ、ギャハハハハハひひひひクツクツケケケケケケハハハハハハ！！アアハハハハハハハハア！！！！最高！！最高ですねえ、カスの悲鳴は！！アハハハハハ、あ、イケネ。」

（アハハア。いけないいけない。少し興奮しすぎましたね。ああでも最高の気分ですね！！カスの悲鳴、怨嗟の声、憎悪と嫉妬にまみれたあの視線！たまりませんねえ！！ああいけないいけない、またキャラがブレてますね、直しかねえとな、ギャハハ！）

ゆっくりと廊下を歩ききり、少し広いところに出る。

そこには無残な、いや無意味に悲惨な死体がそこらじゅうに転がっていた。

（バラバラでもカチコチでもドロドロでも、ましてデコボコでもな

い死体、ってことは月光つきひがいるのか。・・・久しぶりにタッグ組んでデートすっかな？)

とてもご機嫌な恋する乙女は、先ほどとは似ても似つかない優しい微笑を浮かべた。

もちろん、仮面で見えはしないが。

・・・・・・・・・・・・・・・・

プチンッ！

「あ。」

ラヴはニッパ―片手に噴水の前に立っていた。

「・・・あゝあ。やれやれ、今の声はフロストかあ。ってことは早く止めに行かないと、この城熔けちゃうぞ。」

いかにも仕方ないなあという仕種で肩をすくめ、ラヴは部屋から出ようとし、一度だけ振り返ると、ニコリと微笑み、

「じゃ、これで失礼しますね、六魔将のなんとかさん。」

首筋から血の噴水をあげる、壁に礫になったナニカを残して去って行った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ここやあー!!」

巨大な鉄の扉がバラバラになりゴトンゴトンと崩れていく。

切り開いたその部屋はそれなりに広く、だが僅かな蠟燭の光源しかない薄暗い部屋。弱すぎる光は高い天井を照らし切れておらず、闇を残している。

部屋の奥には祭壇があり、その両脇には太い柱がある。

しかし最も目を引くのは部屋の床いっぱいにくつも書かれた魔法

陣。その数20。

魔法陣が紫に発光するたびにズブズブと新たな鎧の兵士、『ファントムソルジャー』が現れる。

武器も何も持たない唯の鎧なので、ファントムナイトに比べ性能は格段に落ちるが、その分かるコストが低いので大量に呼び出せる。

いわゆる魔法職の壁役だ。

（ぽぷユニやな・・・出すんやったら生き物出せや！！）

魔物量産系ユニット・・・通称ぽぷユニとはダンジョンのPOP場所の簡易版を金で買って設置したものだ。

出せるモンスターは一種類のみで、破壊も可能だが、防衛用モンスターのPOP場所のない街系拠点、またはAランクギルドが好んで使う乗り物系拠点を有するプレイヤー達にとっては無くてはならない存在である。

「これさえブツ壊しやあ、流石にプレイヤーが出張ってくるやろ・・・
・ほんま鬱陶しかったわあ。」

右手に構えた薄紅色に煌めく刀がイイインと音をたてる。

さっさと終わらせようと魔法陣に近づいた時、

「待つて。」

静かな声が黒蟻に届いた。

目の前の薄暗い空間、蠟燭の明かりに照らされた影。

その影ひとつひとつがゆつくりと、部屋の奥、祭壇の上に集まり、重なり、濃い闇を形成する。

闇は徐々に形をとり、ローブが、深い闇のローブが現れる。

首には魔力のこもったネックレスを掛け、袖から覗く白い手——
もとい白骨の手の薬指にはルビーの指輪をはめている。

深くかぶったフードには赤い光が二つ灯っている。

『ハイ・リッチ』だ。

攻撃系魔法に特化したスキルを覚え、即死系魔法などの闇魔法にかかる魔力（SP）消費が半分になる。

ただし回復系魔法などの光魔法にかかる魔力（SP）消費は倍だし、回復系の魔法やポーション使つと酸で焼かれるような激痛がプレイヤーを襲う。

そんなハイ・リッチはフードの奥から女の声を響かせる。

「私は魔王軍六魔将が一人、リア・テイル。その魔法陣を壊したいのなら、私と、彼らと、——夫を倒してからにして頂戴。」

ローブの袖をはためかせながら腕を横に振る。

と、部屋の四隅、黒蟻の後ろの廊下、高い天井の壁に次々と魔法陣が浮かぶ。

「召喚魔法・・・鬼か蛇か楽しみやなあ？」

対して黒蟻は口元をギイと歪めて待ち構える。

その間に新たな魔法陣から次々とファントムナイトが馬の（馬具の？）嘶きとともに飛び出し、足元の魔法陣からファントムソルジャ―が整列を始める。

そして祭壇に腰かけたリアの上、天井の闇の濃いところに大きな赤い光がボウツと灯る。

その光に照らされ、天井が、いや、天井の高さまである巨大な鎧、『ファントムギガス』が姿を現す。

祭壇の両脇の柱、つまりはファントムギガスの足が動き、前に進む。

それほど広くない部屋なので狭そうだ。

その巨大な兜の格子状の覗き穴から見える赤い光が声を発する。

「俺は魔王軍六魔将が一人、ガルド・テイル。こいつの夫だ。」

野太い声が響きわたる。巨岩のごとき拳がギシギシと音を立てている。

前後左右ついでに上も鎧で囲まれる。

だが黒蟻はその光景に対ししばらく身をブルブルと震わせていたかと思うと、

「もう無機物の相手はええんや!!!!」

広く、薄暗い召喚部屋に黒蟻の絶叫が響きわたる。

「何やねん!! 鬼でも蛇でもええから生きモンだせや!! ああもう

クソッ！クソッ！クソッ！クソッたりやあア！！ぷりいずぎぶみい
生命体い！！！」

ちよっぴり禁断症状入った黒蟻は、頭を抱えてブンブン振り悶え
バク宙して脚から大刀を生やし後ろから突撃してきたファントムナ
イトを馬具ごと二つにする。

大刀を収納しながら見事に着地し、今度は奇妙な叫びを上げた。

「『もう』『イー』！！『疲れた』。『とつとつ』『忍法』『デカ』
『た』『ずける』！！！」

「・・・？」

突然奇妙な話し方を始めた黒蟻に首を傾げるリア。そんな彼女を
護るように前に出るガルド。

その声はまるで、ラジオやテレビの音声を切り貼りしたような、老
若男女、切羽詰まったのから
のんびりした声まで混じる、ずいぶんと機械的な声だった。

依然召喚は続いており、新たな鎧騎士が発光する魔方陣から出てく
る。

鎧騎士達はそこらに転がった、無惨に二つとなったファントムナイ
トの手足をひっ掴み、それを鈍器代わりに殴りかかっていく。

脇に控えていた残りのファントムナイトもそれに合わせて突撃を仕
掛ける。

それに対し黒蟻は刀を仕舞い、その口元を凶悪に歪め――

「『なにはともあれ』『此れにて一件落着く』『だ』『忍法！』『逆鱗』『探し』！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

場面変わって元・闘技場。

客席は斜めに溶け流れ、天井からポタポタと溶けた大理石が雫となつて落ちてくる。リング内も原型留めずドロドロに溶け、高熱の泥沼と化している。

そんなマグマの中。

黒い人影が佇んでいる。

全身が漆黒の鱗に覆われ、その所々に白い鱗が混じり、肌に星空の刺青を刻んだかのような姿。

頭のこめかみから捻じくれた角が生え、背中からも肌と同じ柄の翼が生えている。

ソイツはゆつくりと目の前の空間に手をかざした。

そこに（彼にしか見えないが）白いメニューが現れる。

項目から アイテムボックス を選び、『鎮静』の項目から表示されている幾つかのアイテムを選択する。

黒い人影、フロストのすぐ前に蒼い光が集まりパンツと弾けると、コーヒーの入ったフラスコと歯車が一枚現れた。

歯車を額に当て、歯の一つを押し込む。

歯車から小さな歯車やら大きな歯車やらが次々に出てきて、組み合い、重なり、クルクルと回転し、噛み合っていく。

やがてフロストの頭を包みこむヘルメットのような歯車の仮面が現れる。

顎の力で無理やり歯車を押し広げる。

金属の擦れる嫌な音ともに明らかに人間より広く口が裂ける。

ぽつかりと空いた穴にフラスコの中身を流し込む。

口の中にジャバジャバとコーヒーが注がれ、顎を伝ってジュウジュウと、地に落ちるより早く蒸発していく。

ゴクゴクと飲み干し、空になったフラスコを握りつぶす。

しばらく後、

「クソッ・・・やはり温度が下がらん。・・・ム？」

忌々しげに呟くフロストの頭に、メッセージの着信音が響く。

『やつほーフロストキレてるー？』

ラヴだった。大方さっきの絶叫を聞いて、俺を落ち着かせようとしてるのだろう。

「・・・ボスカ・・・大丈夫ダ、すぐに落ち着ク。少し待つ『ダメですよー！』・・・何だト？」

『だからあ、いつも言ってるでしょう？怒りを抑えちゃいけませんって！』

「いや、だが俺はもう『ホントに？』・・・。」

俺の声を遮るようにラヴの声が聞こえる。

『イライラしてない？ムシャクシャしてない？ストレス感じてない？八つ当たりしたくない？何もかも壊したくない？スカッとしたくない？ブッ飛んだ気分になりたくない？』

『いいよ、かまわないさ。』

『楽しいよ？意味無く物を壊すのは。』

『楽しいよ？理不尽に人を殴るのは。』

『だからさ、』

『やっていいよ。』

ラヴの声が、悪魔の声が、毒のように頭に染み込んでくる。

ふわふわと浮いているような、地面が傾いていくような、狂った感覚。

とても、とても、心地いい。

「・・・いいの力？」

『もちろん。もし君が罪悪感なんていう的外れなものを感じてるんなら、僕が君に命令してあげるよ。——暴れる』

あの日折られた俺の心が歓喜の咆哮を上げる。

フフフン、やはり俺のボスは最高だ。

俺のやりたいことを命令してくれる！！

「イエス、ボス！！了解ダ！！こつから先ハア！全力！！全開！！オーバーヒートダアアアア！！！！」

『うん！楽しんでね！！Mr・ヒート！』

「オオ、まかせロ！この程度の城、俺一人で焼け落としてくれル、ア、ア、アアアアア！！」

Dr・フロストが、否、Mr・ヒートが吠える。

今まで抑えようとしていた灼熱が一気に噴き出し、
空気が歪み、溶けた地面がマグマのように赤熱してボコボコと沸騰
を始め、まるで地獄のような光景が広がる。
頭を覆うヘルメットはドロドロと熔け出して形が崩れる。
バサリと開いた翼からも同様の熱が発される。

太陽神ラー、墮天種。

それこそが『ラヴァーズ』最強の前衛にしてレベル999プレイヤー
マッドサイエンティスト
、激怒博士の種族である。

ちなみに、Mr・ヒートとは「冷静じゃない俺は俺じゃない。ゆえ
に今の俺はフロストではなくヒートト、Mr・ヒートと呼んでくれ。
」と本人たつての希望によるもの。

さらにちなみに、この時その台詞を聞いて爆笑した黒蟻がじっくり
ウェルダンに焼き上げられたのは、完全に余談である。

これが俺の種族デ、これが俺の種族やから、これが俺の種族だぜ！（後書き）

ぶっちゃけM r・ヒート出したくてD r・フロスト書いた、後悔はない。

でも基本D r・フロストがメイン。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3076t/>

鬼畜外道より愛をこめて

2011年10月3日07時16分発行